AA
97

小段遺跡

── 長野県塩尻市小段遺跡調査報告 ──

1 9 7 9

長野県塩尻市教育委員会

AA
97

酒井潤一氏寄贈

小　段　遺　跡

——長野県塩尻市小段遺跡調査報告——

信州大学理学部
地質
蔵書

1　9　7　9

長野県塩尻市教育委員会

序　文

小段遺跡は塩尻市大字洗馬芦ノ田にあり，小曽部川の右岸段丘上に位置し，以前より縄文時代の遺跡として知られていました。この度，芦ノ田地区土地改良総合整備事業が実施されることになり，工事に先立ち発掘調査を行うことになりました。

発掘調査は，日本民俗資料館の小松 虔先生を団長に，調査員には中信考古学会の諸先生方をお願いし，昭和53年11月に実施しました。この調査によってこの小段遺跡は縄文時代中期の遺跡であることが判明し，また竪穴住居址10軒，小竪穴，集石と多数の遺物が発掘され，松本平南部地域の縄文文化を解明する上に貴重な成果をもたらしました。

この発掘調査が無事完了するについては，長野県中信平右岸土地改良区の深いご理解と征矢野利幸氏はじめ地元の方々の暖かいご援助によるものであり，ここに心から敬意と感謝をささげる次第であります。

報告書の発刊にあたっては，調査団長，調査員の方々のご尽力によるものであり，重ねて謝意を表するものであります。

昭和54年1月

塩尻市教育委員会

教育長　**小　口　利兵衛**

例　言

① 本書は芦ノ田地区土地改良総合整備事業に伴う小段遺跡（長野県塩尻市大字洗馬芦ノ田 所在）の発掘調査報告である。

② 発掘調査は昭和53年11月1日から11月10日まで行った。

③ 遺物および記録類の整理作業から報告書作成は，昭和53年11月から昭和54年1月10日まで行った。

④ 本書は，小松 虔団長を中心とする各調査員の共同討議の上で執筆し，その文責は文末に記した。また編集は小林康男が担当した。

⑤ 遺物整理から報告書作成にいたる過程で次の方々の御協力を得た。記して深く感謝申し上げたい（敬称略）。

石田成二・小林秀行・小林美佐子・酒井潤一・篠宮 正・鳥羽嘉彦・直井雅尚・三好博喜・山本紀之

⑥ 出土品，諸記録は平出遺跡考古博物館で保管している。

目　　次

序　文

例　言

第Ⅰ章　調査の経過

第１章　調査に至るまでの経過…… 1

第２節　調査日誌…… 1

第Ⅱ章　遺跡とその環境

第１節　遺跡の立地…… 4

第２節　遺跡の歴史的環境…… 7

第３節　遺跡の概要…… 9

第Ⅲ章　遺　　構

第１節　AB 各トレンチ…… 12

第１・２号住居址，第１・２・３・４・５・６号小竪穴，第１・２・３・４号集石，

第１号ピット群

第２節　C トレンチ…… 21

第３・４・５・６・７・８・９・10 号住居址，第５号集石，第２号ピット群

第Ⅳ章　遺　　物

(1)　土　　器…… 31

(2)　土 製 品…… 71

(3)　石　　器…… 73

第Ⅴ章　結　　語…… 102

挿　図　目　次

第１図　松本盆地南部の地質図…… 4
第２図　松本盆地層序表…… 5
第３図　小曽部川右岸における模式柱状図…… 6
第４図　発掘地周辺遺跡分布図（1：50000）…… 8
第５図　遺跡地形図（1：2000）…… 10
第６図　小段遺跡調査区全図（1：400）…… 11
第７図　A・B・C トレンチ標準層序（1：80）…… 11
第８図　第１号住居址（1：60）…… 12
第９図　第２号住居址（1：60）…… 14
第10図　小竪穴（1：30）…… 15
第11図　第１号，第２号集石（1：30）…… 17
第12図　第３号集石（1：60）…… 18
第13図　第４号集石（1：40）…… 19
第14図　第１号ピット群（1：80）…… 20
第15図　第３号住居址（1：60）…… 22
第16図　第４号，第７号住居址（1：80）…… 23
第17図　第５号住居址（1：60）…… 24
第18図　第６号・第10号住居址（1：60）…… 25
第19図　第８号住居址（1：60）…… 26
第20図　第９号住居址（1：60）…… 27
第21図　第５号集石（1：60）…… 28
第22図　第２号ピット群（1：60）…… 29
第23図　A・B トレンチ出土土器（1：3）…… 32
第24図　A・B トレンチ出土土器（1：2）…… 35
第25図　第３号住居址出土土器（1：6）…… 38
第26図　第３号住居址出土土器（1：3）…… 39
第27図　第３号住居址出土土器（1：3）…… 40
第28図　第３号住居址出土土器（1：3）…… 41
第29図　第３号住居址出土土器（1：3）…… 42
第30図　第４号住居址上層出土土器（1：3）…… 43
第31図　第４号住居址出土土器（1：6）…… 45

第32図　第４号住居址出土土器（1：7）…… 46
第33図　第４号住居址出土土器（1：6）…… 47
第34図　第４号住居址出土土器（1：4）…… 48
第35図　第５号住居址出土土器（1：4）…… 51
第36図　第５号住居址黒色土・褐色土層出土土器（1：3）…… 52
第37図　第５号住居址褐色土層出土土器（1：3）…… 53
第38図　第５号住居址出土土器（1：3）…… 54
第39図　第５号住居址出土土器（1：3）…… 55
第40図　第６号住居址出土土器（1：3）…… 57
第41図　第６号・第10号住居址出土土器（1：3）…… 58
第42図　第７号住居址出土土器（1：3）…… 59
第43図　第８号住居址出土土器（1：3）…… 61
第44図　第８号住居址・第２号ピット群出土土器（1：3）…… 62
第45図　第９号住居址出土土器（1：5）…… 63
第46図　第９号住居址出土土器（1：3）…… 64
第47図　第９号住居址出土土器（1：3）…… 65
第48図　第５号集石・遺構外出土土器（1：3）…… 68
第49図　第２号ピット群・遺構外出土土器（1：3）…… 70
第50図　土製品（1：2）…… 84
第51図　A・Bトレンチ出土石器（1：3）…… 86
第52図　第３号住居址出土石器（1：3）…… 77
第53図　第３号住居址出土石器（1：3）…… 78
第54図　第４号住居址出土石器（1：3）…… 80
第55図　第４号・第５号住居址出土石器（1：3）…… 81
第56図　第５号住居址出土石器（1：3）…… 83
第57図　第６号住居址出土石器（1：3）…… 84
第58図　第７号・第８号住居址出土石器（1：3）…… 86
第59図　第８号・第９号住居址出土石器（1：3）…… 87
第60図　第９号住居址出土石器（1：3）…… 88
第61図　第10号住居址出土石器（1：3）…… 90
第62図　第５号集石・遺構外出土石器（1：3）…… 92
第63図　Cトレンチ遺構外・第５号住居址出土石器（1：3）…… 93
第64図　第３・５・10号住居址出土石器（1：6）…… 94

表　目　次

第１表　地点別出土石器一覧表…… 96
第２表　出土石器一覧表…… 97～101

図　版　目　次

第１　発掘地点遠景，Ａ・Ｂトレンチ発掘状況
第２　第１号住居址，第２・３号小竪穴
第３　第４号集石，第２号住居址
第４　第１・２号集石，第１号集石下掘り込み・断面
第５　第３号住居址，第３号住居址炉
第６　第３号住居址埋甕出土状況
第７　第４号住居址上層炉址・第４号住居址
第８　立石・第５号住居址
第９　第６・８・10号住居址
第10　第６・９号住居址，第１・４号住居址炉
第11　第６号集石
第12　第３号住居址土器出土状況
第13　第４号住居址土器出土状況
第14　第４号住居址土器出土状況
第15　第４号住居址土器出土状況
第16　第３・４号住居址出土土器
第17　第４・５・９号住居址・第６号集石出土土器
第18　第４号住居址出土土器，土製品

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　調査に至るまでの経過

昭和53年度芦ノ田地区土地改良総合整備事業は，小曽部川右岸の県道上今井洗馬線北側の地区において実施されることになった。この地域は以前から小段遺跡として縄文中期～後期および弥生土器片の散布地として広く知られていた。このため工事施工前に調査して記録保存することになり，長野県中信平右岸土地改良区からの委託をうけて塩尻市教育委員会が主体となり発掘調査を実施することになった。

発掘調査にあたっては調査団長に日本民俗資料館の小松虔先生をお願いし，調査員には中信考古学会の諸先生方をお願いした。

調査団の先生方には，それぞれ本務及び他の調査等仕事をお持ちの，極めて多忙の中で発掘調査を実施し，しかも2ヶ月という短期間で遺物・資料の整理，原稿執筆と，大変御無理をお願いした訳で，この御苦労に対して心から感謝申し上げる次第である。

また，地元の征矢野利幸・公子夫婦には調査期間中種々の御援助をいただき，発掘調査がスムーズに終了することができた。厚くお礼申し上げる次第である。

発掘調査のための組織は次のとおりである。

団　長：日本民俗資料館　小松　虔

調査員・調査補助員：

大久保知己・倉科明正・三村　肇・山越正義・大沢　哲・浅輪俊行・山本紀之・竹内稔・鳥羽嘉彦・小林秀行・直井雅尚・三好博喜・白崎　卓・谷崎史門・宮城孝之・中島初美・矢口晋司・馬場長光・有賀隆夫・山下俊幸・堀　洋一・石渡俊一・臼田美智子・石田成二・太田守彦・黒沢豊文・木村和弘・矢野あけみ・平林　彰

高校生・一般：

小幡八重子・中原佳江子・柘植みどり・征矢野公子・宮本星枝・田村志づか・寺沢和子・寺沢美幸・高橋恭美・寺沢たけよ・田村四郎・高井俊明・征矢野伸・征矢野利幸・小原　勇・高尾腎至・柳沢　順・高桑俊雄・篠宮　正・中堀雅英

（事務局）

第2節　調査日誌

10月31日（火）晴　午前10時，耕地林務課上野，教育委員会小林，専修大学学生山本紀之の3名が現地に赴き，明日からの発掘調査にそなえ，トレンチの杭打ちを行う。午後，発掘器材を運搬する。

11月1日（水）晴　午前9時に調査団全員が調査現場に集合し，調査団長小松虔より挨拶および発掘調査についての注意等を行う。その後直ちに発掘調査に入る。AB各1地区から24地区までの掘り下げを行う。この結果B-4・5・6にかけて小竪穴が検出され，AB-14に挙大の河原石の集石が発見された。またAB16～19にかけて不鮮明なピットが多数見つかる。出土遺物は土器片・石匙・打製石斧，石鏃があるが，量は少ない。

11月2日（木）晴　昨日に引続き，集石部分の調査と20～42地区までの掘り下げを行う。この結果，集石はほぼ2m×1mの方形を呈することが知られた。また，AB21～22にかけて径3mほどの円形の落ち込みがみられ，更に23～25地区にも落ち込みがあり，それぞれ住居址の存在が予想される。これら落ち込みの存在する部分からは土器片等遺物の出土も他地区に比較し，若干多いようである。この25地区より東側は，東になるに従いローム層までの深さが浅くなり，遺物の出土も皆無に等しい状態となる。したがって遺構は存在しないものと考えられる。

11月3日（金）晴　文化の日で休日のため発掘人員も多く，作業はおおいにはかどる。昨日までの調査の結果から，ABトレンチに関してはこれ以上東に掘り進んでも遺構は存在しないだろうということから，ABトレンチより北90mの所（配水管設置部分）にCトレンチ（幅2m，長さ60m）を設定し，掘り下げを開始する。C_2～C_3にかけて落ち込みが見つかり住居址の存在が確認される（第3号住居址）。C_9～C_{10}では地表下30cm付近に人頭大の河原石の集石が検出される（第5号集石）。Cトレンチでは全地区にわたり土器・石器とも出土量は非常に多く，ABトレンチとは極めて対照的な在り方を示している。ABトレンチでは1号址のセクション図を作成する。

11月4日（土）晴　3号址の性格をはっきりさせるためC_2～C_4の南および北側に各2mづつの拡張を行う。遺物の出土は夥しい。C_4～C_{16}までは褐色土層中に何箇所か焼土が点在し，全地区にわたり多量の土器片の出土がみられた。何らかの生活地と考えられるが褐色土層中のため明確に把握することが困難であった。C_{20}～C_{38}までは遺物の出土は少ない。この他，2号址のセクション図，1・2号集石の実測図を作成する。

11月5日（日）晴　3号址を引続き調査する。北拡張部分より石囲炉が検出される。これが3号址のものとすれば径6mほどの大きな住居址ということになる。C_5では褐色土中に両脇に河原石をかった立石が見つかり，褐色土中に存在した住居址に属するものと思われた。C_{14}～C_{16}でも住居址が存在し，床面上および覆土中より多量の完形・半完形の土器が出土した（第4号住居址）。C_{17}～C_{18}にかけても落ち込みがみられる（第8号住居址）。遺物の出土は余り多くない。C_{22}～C_{26}ではローム面に不規則なピット状の掘り込みがみられた。ABトレンチでは1・2号集石の実測完了後，集石の除去を行う。集石下はわずかな凹みとなる。2号址では覆土の除去を行う。好天が続き，しかも休日のため作業は大変はかどる。

11月6日（月）晴　3号・4号址の調査を続行する。4号址では土器の出土が非常に多いため，水路幅の北側6mを拡張して調査することとする。拡張部分では褐色土層中に炉址状石組みが検出され，4号址の上部にも住居址が存在したことが判明した。しかしその詳細を明らかにすることは

できなかった。この上部住居址下から再び土器が多量に出土する。C_{13}でもローム層に掘り込んだ住居址を検出する（第7号住居址）。C_9～C_{10}では褐色土中にあった集石の実測完了後，掘り下げを始める。C_{18}付近から縄文前期の土器片が数片出土する。

11月7日（火）曇　3号址の東，C_5～C_6にかけて住居址が検出される（第5号住居址）。またC_7～C_{10}にかけても住居址の存在が確認される（第6・第10号住居址）。本日までの調査でCトレンチではC_2～C_{19}まで住居址が密集して存在することが明らかとなった。これらの住居址の精査とともに，ABトレンチでは1・2号址を完掘する。またABトレンチの東西セクション図を取るための準備を行う。

11月8日（水）晴　Cトレンチでは5～10号住居址を調査し，ほぼ完掘する。5号址では西壁よりに埋甕が存在し，6号址では柱穴より耳飾が出土し，9号址ではきれいな石囲炉が検出される。ABトレンチでは1号址の実測，2号址の清掃，写真撮影および東西セクション図を作成する。

11月9日（木）晴　ABトレンチでは2号址の実測を行う。Cトレンチでは3号址の実測。東西セクション図を作る。5号址上部に見つかった立石を取りはずし，その下を精査する。この立石下は5号址の炉址になっており，この炉中より土製品（第50図－10）が出土した。終日，風が強く，測量を行うに苦労する。1部の人員は出土遺物の洗浄にかかる。

11月10日（金）晴　Cトレンチ4～10号址およびピット群の実測を行う。各住居址の炉址等の諸施設の精査を行う。本日で現地における主なる調査を終了する。

11月11日（土）晴　教育委員会職員にて器材の撤収を行う。

11月12日～1月10日　平出遺跡考古博物館にて出土遺物の洗浄・注記・復元作業を行う一方，実測図の整理，整図，遺物実測，拓本等を行う。また各調査員にては執筆分担に従い，報告書原稿執筆を行う。

1月10日(水)，報告書の編集を行う。

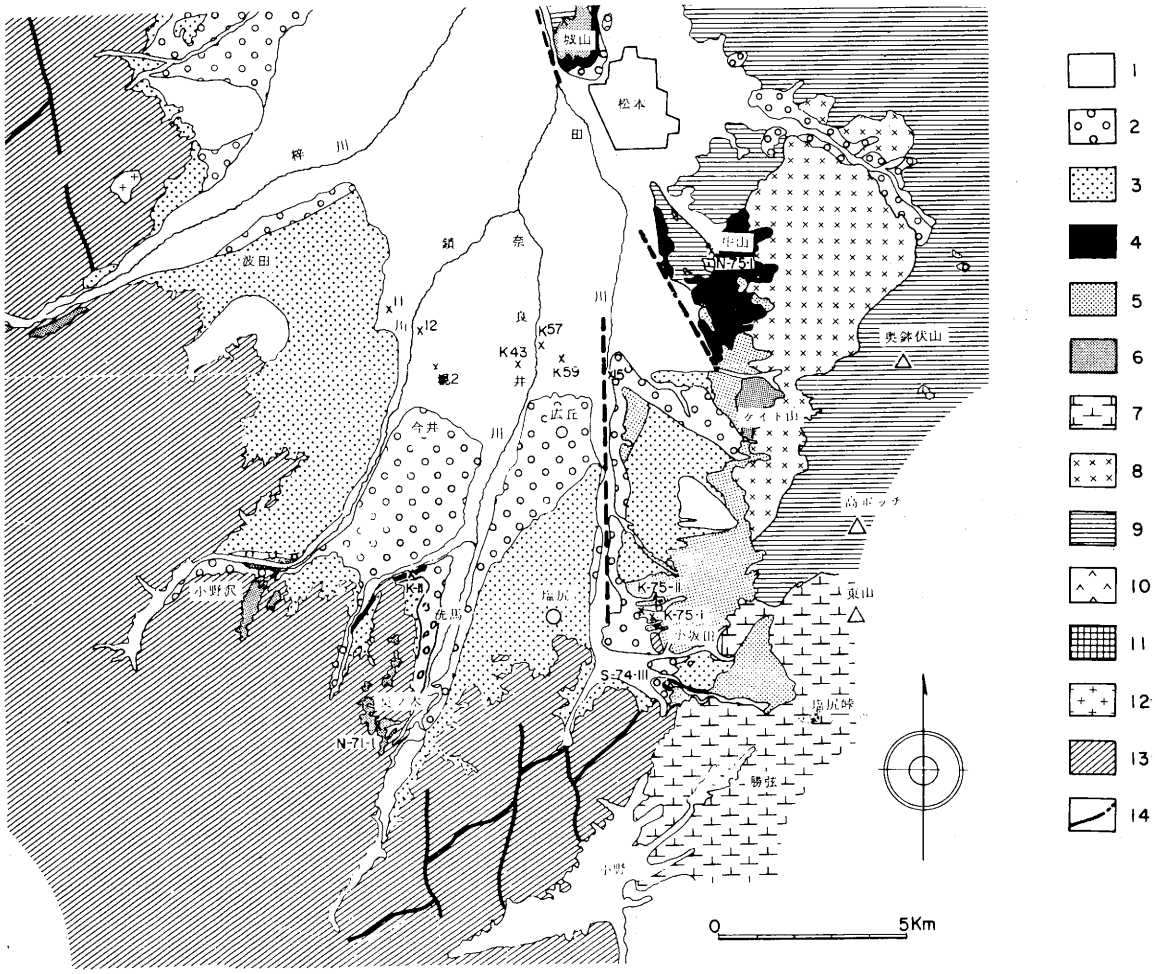
（小林康男）

第II章　遺跡とその環境

第１節　遺跡の立地

発掘地点は，松本盆地のほぼ最南端に位置し，奈良井川と小曽部川の影響を受けて形成された，洪積世後期末の郷原面（森口面）と呼ばれる河岸段丘の上にある。

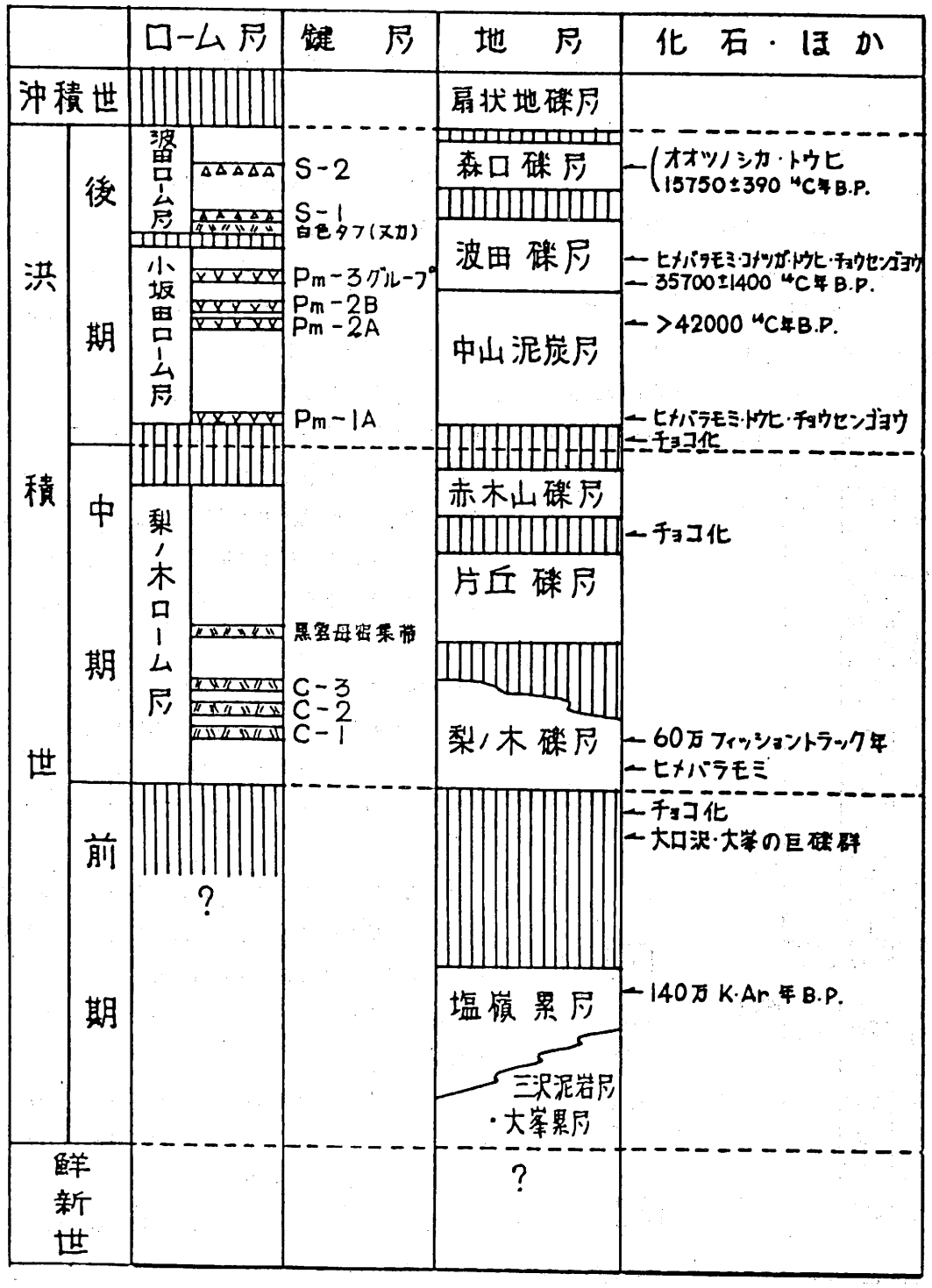
発掘地点の南西方の山地には，主として，砂岩層よりなる古生層が分布する（第１図）。



1：沖積層，2：森口礫層およびその相当層，3：波田礫層，4：中山泥炭層，5：赤木山礫層・片丘礫層，6：梨ノ木礫層，7：塩嶺累層，8：閃緑岩類，9：新第三系，10：木崎岩（熔結凝灰岩類），11：中生界，12：花崗岩類，13：古生界，14：断層（破線は推定断層）

第１図　松本盆地南部の地質図
松本盆地団研（1977）を１部改編

中央西線洗馬駅北方の奈良井川河床には，洪積世前期の塩嶺累層相当層と推定される白色の凝灰岩層をはさむ礫層が分布する（松本盆地団研，1977）。



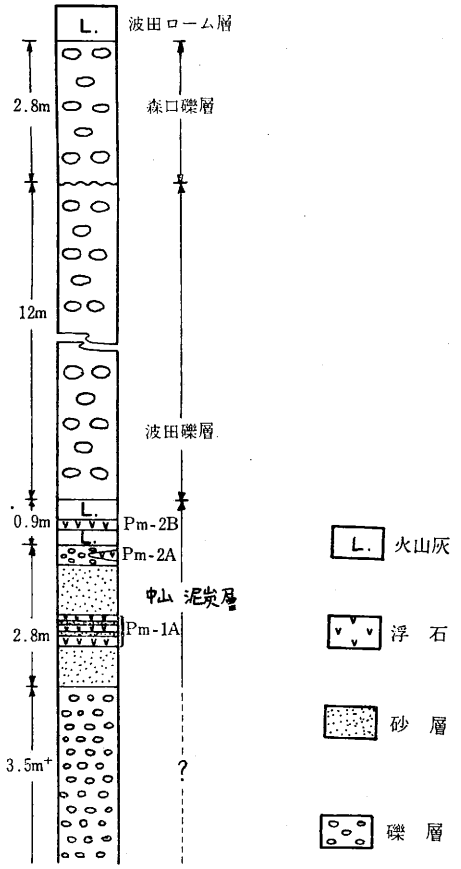
第2図 松本盆地層序表（酒井潤一・松本盆地団研・豊野層団研，1976の一部）

芦ノ田西南方の古生層よりなる山地の中に，標高850m前後の平坦な地形面が分布する。この平坦面は，洗馬の梨ノ木を模式地とする梨ノ木礫層と呼ばれる，洪積世中期初葉の堆積物によって形成されており，同礫層に整合に，厚い梨ノ木ローム層がおおう。梨ノ木ローム層中には，クリスタル・アッシュ（松本盆地団研，1972, 1977）と呼ばれる特徴ある火山灰層がはさまれている。松本周辺では，4枚のクリスタル・アッシュが識別されているが，梨ノ木では，最下部のC_1のみが分布する（第2図）。

松本盆地南部において，梨ノ木ローム層を不整合におおって，小坂田ローム層が分布する。洗馬の梨ノ木では，小坂田ローム層中に，下位より，Pm-1A，Pm-1B，Pm-2A，Pm-2B，Pm-3B，Pm-3Cと呼ばれる6枚の浮石層がはさまれ，良い鍵層となっている（酒井潤一・下野正博，1972）。

小坂田ローム層を不整合におおって，波田ローム層が分布する。波田ローム層中には，最下部に御岳第1スコリア(S-1)，中部に御岳第2スコリア(S-2)がはさまれる。

盆地内で広い分布を示す地形面は，波田面（波田段丘）および森口面（森口段丘）である。波田面は，塩尻市の桔梗ヶ原や鎖川左岸の朝日村古見から山形村，波田町にかけて，広く分布する。波田面を構成する地層は，波田礫層と呼ばれ，盆地周辺部で20～30m，盆地中央部では70～80mもの厚さを有し，粗粒な礫層より構成されているため，松本盆地の深層地下水と深い関係を有する堆積物である。



第3図 小曽部川右岸における模式柱状図
酒井・下野(1972)を一部改編

この波田礫層を削り込んで堆積した森口礫層が，森口面を形成しており，一般に，森口礫層は，数m～20mのうすい礫層である。地形的には，森口面は波田面より数m低く，波田面のまわりに発達することが多い。

発掘地点は，この森口面に対比される郷原面上にあり，この地形面は，発掘地点以外にも，小曽部川と鎖川にはさまれた岩垂原から今井にかけて，および，奈良井川右岸の太田，郷原，堅石にかけて広く分布する。

発掘地点より約300m西方の小曽部川右岩の郷原面において，酒井，下野（1972）は，次のような観察結果を報告している（第3図）。すなわち，下位より，(1) 厚さ3.5m(＋)の淘汰の良い細礫層，(2) 水成のPm-1A，Pm-2Aをはさむ厚さ2.8mの砂礫層，(3) Pm-2Bをはさむ厚さ0.9mの風成ローム

層（小坂田ローム層中上部）（(2)，(3) を合わせたものが中山泥炭層相当層），(4) 厚さ12mの淘汰不良の大礫層（波田礫層），(5)，(4) に不整合で，厚さ2.8mの森口礫層相当層，(6) 厚さ数十cmの波田ローム層上半部。この地点において，波田ローム層中には，御岳第1スコリアは観察されない。すなわち，御岳第1スコリアの層準は，波田礫層中にあり，森口礫層相当層は，御岳第1スコリアよりも上位にある（すなわち，新しい）。岐阜県加茂郡の木曽川ぞいにおいて，御岳第1スコリアと同層準である木曽川泥流中の樹幹は，26,600±1,600 ^{14}C 年 B. P. および27,800±2,000 ^{14}C 年 B. P. の年代を示す（Quaternary Research Group of Kiso Valley and K. KIGOSHI, 1964）。したがって，森口礫層は，上記の ^{14}C 年代よりはかなり新しく，ほぼ1.5万年前以降に形成されたものと推定される。ただし，発掘地点および前述の小曽部川右岸の露頭においても，風成でのる波田ローム層がうすく，数十cmの厚さしか有しない。これらの点からみて，本地域の森口面（郷原面）は少し後まで水の影響を受けていた可能性もある。

〈引用文献〉

松本盆地団研（1972）：松本盆地の第四紀地質の概観，地質学論集，第7号，297～304。

松本盆地団研（1977）：松本盆地の第四紀地質，地質学論集，第14号，93～102。

Quaternary Research Group of Kiso Valley and K., KIGOSHI (1964)：Radiocarbon Date of the Kisogawa Volcanic Mudflows and its Significance on the Würmian Chronology of Japan, Chikyu Kagaku, NO. 71, 1～7.

酒井潤一・下野正博（1972）：松本盆地南部と伊那谷における小坂田ローム層中の浮石層，信州大学理学部紀要，第7巻，2号，123～141。

酒井潤一・松本盆地団研・豊野層団研（1976）：松本盆地・長野盆地の形成過程，地学団体研究会第30回総会資料集，221～229。

（信州大学理学部　酒井潤一）

第2節　遺跡の歴史的環境

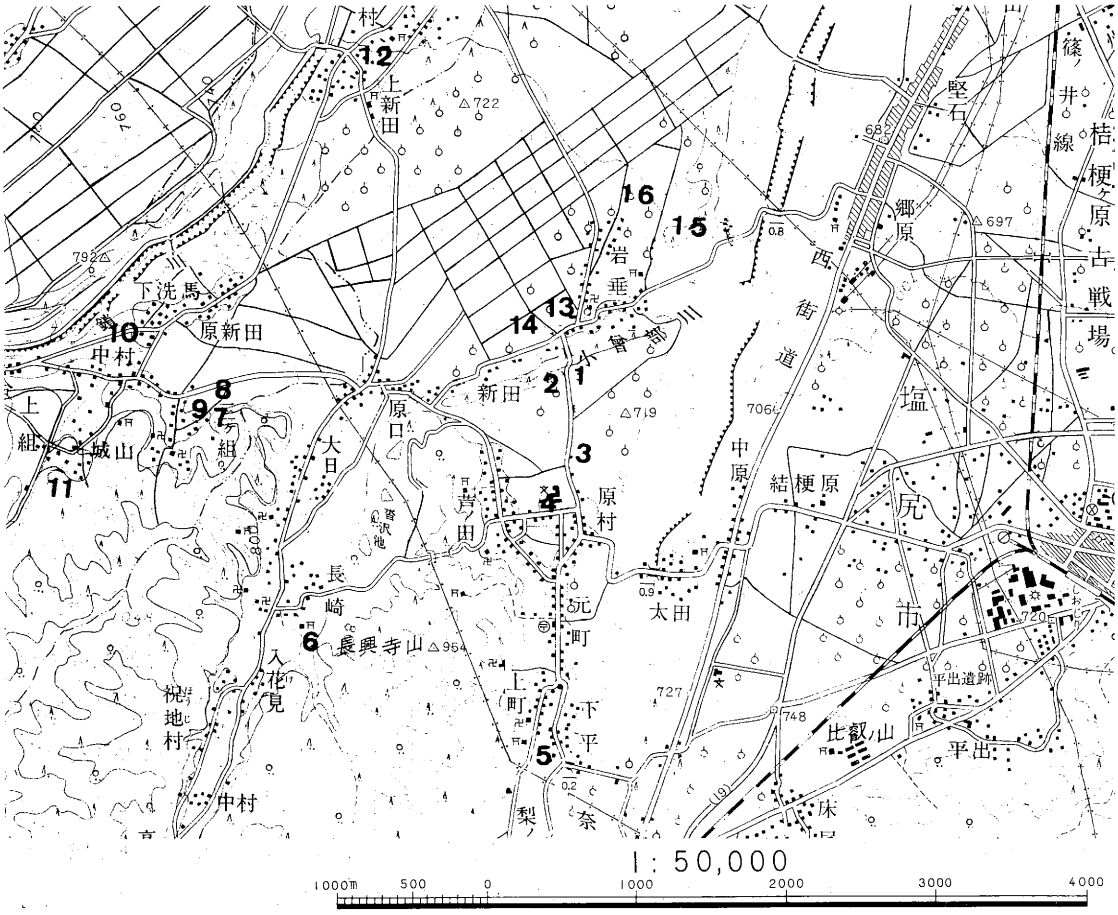
小段遺跡は奈良井川に流入する小曽部川の右岸にあり，河岸段丘上の遺跡である。今回発掘された西の地域も遺跡の存在が知られており，土取り等の折り縄文中・後期，弥生の遺物が出て前より注目されていた遺跡地である。発掘地点の南には「藤塚」と呼ばれる塚があり，古墳と報告され，墳丘は東西11.4m，南北11.5m，高さ1.6mの円墳とされている。又南の洗馬小学校校庭には「経塚」があり，一般に良く知られている。南の下平部落に存在する下平遺跡は奈良井川の河岸段丘上にあり，東西50m，南北100mの遺物包含地があるとされ，今までに発見されているものに，須恵器おろし皿1箇，須恵器甕破片若干が耕作中に採集されている。

小曽部川の上流になる長崎部落には小曽部川の右岸地域に縄文中期の土器片の出土が知られている。この上流地域は遺跡の発見がなされておらず，調査はこれからである。小曽部川の谷間の出口

の西側になる西洗馬地域は，下小曽部や上小曽部地区のように深い谷間をもたないが，遺跡はやや多く知られている。三ヶ組遺跡では縄文中期勝坂式の土器片，石斧が出土し，有望な遺跡とみられる。山鳥場遺跡では畑の耕作中に遺物が出土し，縄文中期・後期の土器片が得られている。大日遺跡からは縄文・土師の出土があり，上新田三村氏宅遺跡では宅地造営の際地表から約30cmから縄文中期土器片・磨石・凹石の出土があった。

小曽部川の左岸地域，小段遺跡の北，岩垂部落には狭溢な場所である上平村で縄文中期甕6箇，鉢1箇が出土し，出土地は東西50m，南北10m位とされている。また部落の水道工事の折にも道路より石棒等の出土が知られており，かくれた遺跡があるようであり，注意すべき地である。また岩垂部落の東奈良井川に面した岩垂原，権現堂と呼ばれている地域には，縄文中期土器・土偶・石匙・石鏃などの出土が知られている。

岩垂遺跡は畑地で縄文前期の遺物が多いとされている。縄文土器破片，石鏃282箇，石皿6箇，



1·2. 小段　3. 藤塚　4. 経塚　5. 下平　6. 長崎　7·8·9. 三ヶ組　10. 山鳥場　11. 大日　12. 上新田　13. 岩垂　14. 山ノ神　15. 権現堂　16. 岩垂

第4図　発掘地周辺遺跡分布図

石錐45，打製石斧，磨製石斧，石匕33箇，玦状耳飾5箇の出土が過去に報告されている。

この他発掘調査が実施された遺跡として岩垂山ノ神遺跡がある。昭和43年・44年にかけて松本県ヶ丘高等学校風土研究部によって調査され，縄文時代前期（諸磯期）の竪穴住居址5，ピット群，集石址が検出され，土器片・石鏃・石匙を中心とした石器類，玦状耳飾りなどの出土が報じられている（第4図）。

（小松　虔）

第3節　遺跡の概要

(1) 遺跡の要約

発掘調査地点は，小曽部川段丘崖より内奥170mの地点に位置する東西方向にABトレンチ（道路設置部分）を，これより90m小曽部川寄り，すなわち段丘崖より80mの東西方向にCトレンチ（配水管設置部分）を設け調査した（第5図）。

ABトレンチからはAB_{20}～AB_{22}に第1号住居址，AB_{23}～AB_{25}に第2号住居址，B_3～B_5に1号・2号小竪穴，A_5～A_6に3号小竪穴，B_{12}に4号小竪穴，AB_{18}～AB_{19}に5・6・7号小竪穴が，またA_{14}に1号集石，B_{14}に2号集石，1号住居址の上面B_{21}～B_{23}に3号集石，2号住居址の上面AB_{22}～AB_{25}に4号集石，そしてAB_{16}～AB_{21}にわたって不規則なピット群がそれぞれ検出された。

Cトレンチでは，C_2～C_4に3号住居址，C_5～C_6に5号住居址，C_7に10号住居址，C_8～C_{10}に6号住居址，C_{10}～C_{12}に9号住居址，C_{13}～C_{14}に7号住居址，C_{14}～C_{16}に4号住居址，C_{17}～C_{18}に8号住居址が，8号住居址より東側，C_{19}～C_{23}にかけて不規則な大小のピット群があり，6号住居址の上層，C_9～C_{10}にかけて5号集石がそれぞれ発見されている（第6図）。

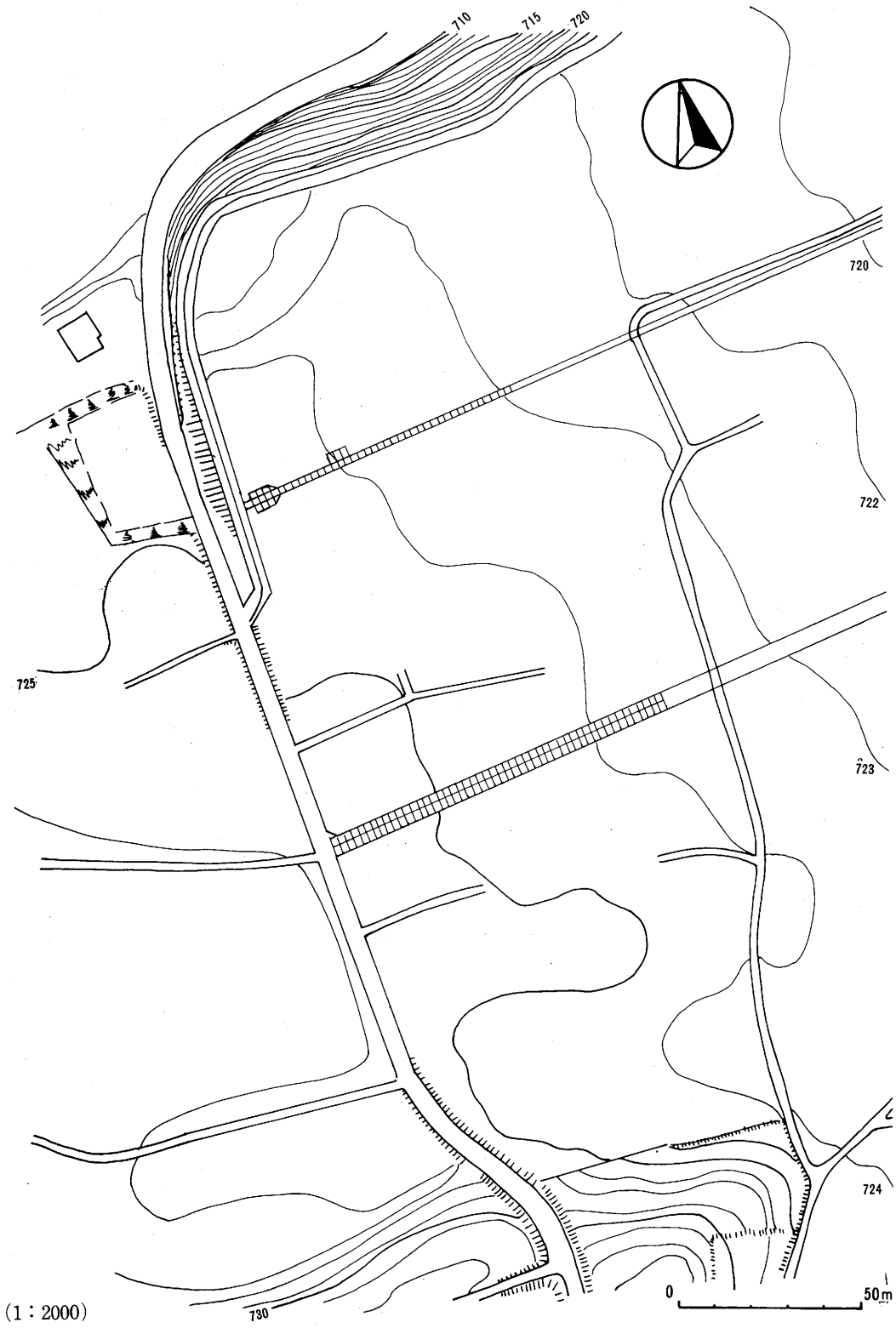
このように今回の発掘調査によって検出された遺跡は住居址10，小竪穴7，集石6，ピット群2がある。これらの遺構は時期が明確でないABトレンチの小竪穴の1部を除いて全て縄文時代中期に属するものである。

発掘された遺物は，全て縄文時代のもので，土器，土製品，石器がある。土器は微量出土した前期初頭の中越式等を除けば，中期中葉から後葉にかけてのものが主体を占める。土製品には土偶・土製円板・耳飾・有孔円板・小形土器がある。石器には，石鏃・石匙・打製石斧・凹石・石皿・磨製石斧・石錐・石棒その他がある。

発掘によって検出した遺構および遺物は以上のようであるが，この他に今回の調査においては出土が見られなかったが，以前同じ遺跡内から弥生時代の遺物（中期土器片）が出土したという記録もあり，小段遺跡の全体像を知るうえで見逃せない事柄である。

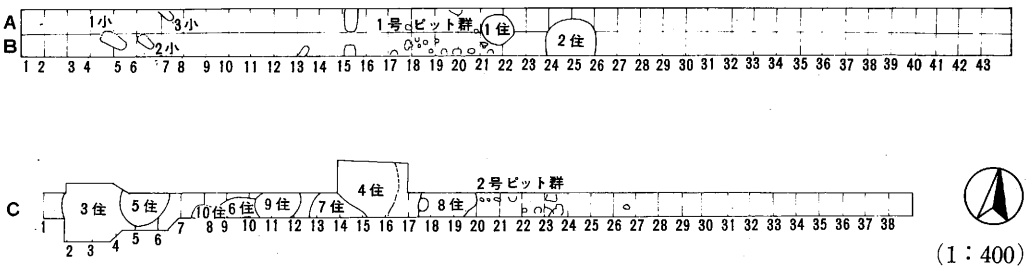
(2) 遺跡の層序（第7図）

調査地区での表土からローム層までの土層の状態を遺構の構築面や遺物の包含との関係に主眼をおいて，各層の特徴を述べてみよう。



(1：2000)

第5図　小段遺跡の地形



第6図　小段遺跡調査区全図

ABトレンチでは東で浅く，西へ漸次深くなっている。

第Ⅰ層：耕作土，20～30cmを計る。30地区付近では10cm前後と浅い。遺物の出土は僅少。

第Ⅱ層：黒褐色土，20～30cmで，集石，小竪穴などこの層中に存在する。遺物は若干出土する程度で多くない。

第Ⅲ層：ローム層

この他，A_2～A_6辺までは第Ⅲ層が明確でなく，砂礫混りのローム層となっている。

Cトレンチ

第Ⅰ層：耕作土，黒色のサラサラした土層で，深浅差はあるがおよそ10～30cm。遺物は余り含まれていない。

第Ⅱ層：黒色土，10cmから厚い所で40cmを計り，下位になるにつれ遺物は漸増する。

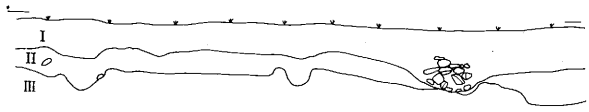
第Ⅲ層：褐色土，多くの遺物が出土し，5号集石，4号，5号住居上層の遺構などはこの層中に検出されている。

第Ⅳ層：黄褐色土，5，6，7号住居址の床面上をおおう覆土で，部分的に堆積する。

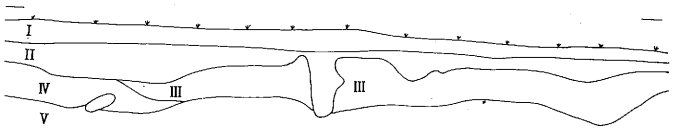
第Ⅴ層：ローム層

なお，4号住居址の部分ではローム層はごく薄く，ABトレンチA_2～A_6周辺と同様砂礫混りロームがみられた。

（小林康男）



ABトレンチ（A 12-14）層序（1：80）



Cトレンチ C 5-8（5号住居付近）層序（1：80）

第7図　ABCトレンチ標準層序

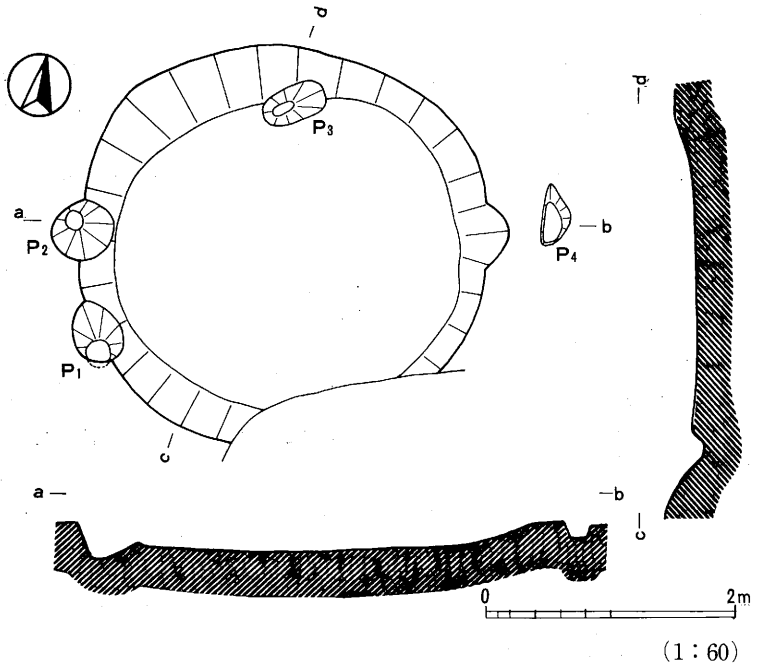
第Ⅲ章　遺　　構

第1節　A・B各トレンチ

芦ノ田小段遺跡のA・B各トレンチは，畑地構造改善事業による区画整理と，これに伴う農道施設に関連し，同遺跡の破壊が考えられるところから，調査のため設定されたものである。第5図に示す如く，Aトレンチは北側に，Bトレンチは南側に隣接しており，相互に密接な関係をもち，報告にあたっては両トレンチを区別する特殊性や，必要性もみられないところから，ここに一括して概観する。両トレンチは，畑地の西側を南北に走行する道路端に基点をおき，両トレンチ共2m幅に仕切って東側へ伸長させ，これを更に2m間隔に区切って，西の基点側を1区とし，以下順次東へ50区まで設定する。

現場は，西より東へ向い僅かながらの傾斜度を示す畑地であり，原野とは異なり，発掘そのものの作業を容易にした。両トレンチの層序は，第7図に示す如くで，第1層，黒色耕土，10～30cm。第2層，黒褐色土，20～30cm，以下第3層ローム層に移行していた。

このA・Bトレンチの発掘に依って検出された遺構は，多彩を極め，住居址として1号住居址，2号住居址の2件。小竪穴として1号小竪穴より7号小竪穴まで7件。集石として1号集石より4号集石まで4件。そしてピット群が1件等々所在した。また，これらの遺構の分布状態をみると，



第8図　第1号住居址

A・Bトレンチの21～25区に住居址が2件所在し，その西部地帯に小竪穴，集石，ピット群が集中し，東部地帯には，遺構の検出がみられなかった。このことは，当時の生活の場が推察されるところである。

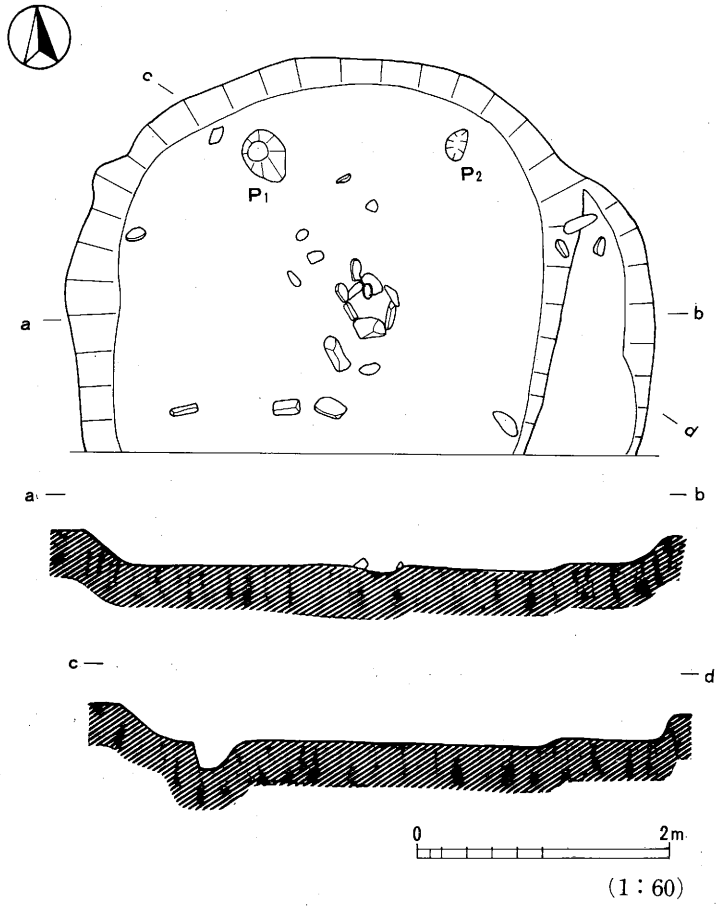
これら各種遺構に伴出した遺物は，別項記述の如き石器・土器であるが，どうした理由によるものか，土器類の出土は各遺構とも微量であり，完形を示すものなくしかも細片で，中には遺物皆無の遺構もあって，遺構の正確な所属年代を決定づけるに支障を及ぼるほどであった。

(1) 第1号住居址（第8図）

1号住居址は，A・Bトレンチの21区，22区にわたり検出される。規模は，東西方向約340cm，南北方向約330cmのほぼ円形を示し，竪穴の周壁は明瞭な落ち込みをみせず，ゆるやかな勾配をもって床面に続き，浅皿状を呈していた。しかし壁高は，東壁が24cm，南壁25cm，西壁20cm，北壁20cmを数える。床面は固い仕上げであるが，僅かながら中央部が凹む気配をみせた。周溝はなく，不思議なことに炉址が全く確認できなかった。柱穴とみられるものは，1号住居址の西に分布する，ピット群に所属するものを除き，西壁に約40cmの間隔をもって並列する，P_1，P_2があり，北壁にP_3，東壁の東に接してP_4が認められた。規模は，P_1が上面径40×50cm，深さ33cm。P_2が45×50cm，深さ43cm。P_3が30×53cm，深さ14cm。P_4が22×50cm，深さ14cmで，南部は3号集石のはり出しがあって，追求はできなかった。その他住居址内に付属する施設は確認できなかった。

(2) 第2号住居址（第9図）

2号住居址は，A・Bトレンチの24・25区を中心にして，1部23区にわたり検出される。竪穴の規模は，東西方向約463cm，南北方向は，北壁よりBトレンチの南端線まで約315cmを数えるものの，南部は完掘されず，正確な規模は不明である。壁高は，西壁が30cm，北壁が27cm。東壁は二段構えとなり，内側が10cm，外側が23cmを記録する。南壁は未掘のためつかめなかった。住居址の東部分は，第9図でみる如く，床面が10cmの段付となって高くなり棚状を呈していた。その全容は南部未掘部分があるため不明であるが，調査された範囲では，棚幅が50～76cm，長さは約2cmとなって以南に続いていた。棚面は平坦で，北部面には3個の礫があり，他に特別な付属施設は認められなかった。3個の礫は，15×10cm前後の大きさのものだった。住居址の床面は，多少凹凸があり，あばた状となって，こぶし大程度の礫8個，13×22cm程度の礫6個の存在を認め，比較的固い仕上げで，ほぼ中央部に炉址の所在をみる。炉址は，長さ28×幅11×厚さ13cm程度から，26×5×18cm程度のやや細長い石9個を方形状に組合せ，外法約45cm方形，内法約24cm方形の小づくりの炉を形成しており，深さ約14cmの浅い落ち込みをみせていた。内部に僅かながらの焼灰を認める。址内の北部に柱穴とみられるものを2ヶ所に検出する。P_1は，上面径32×46cm，深さ21cm。P_2は18×20cm，深さ8cmの浅いものであった。他に柱穴と考えられる



第9図　第2号住居址

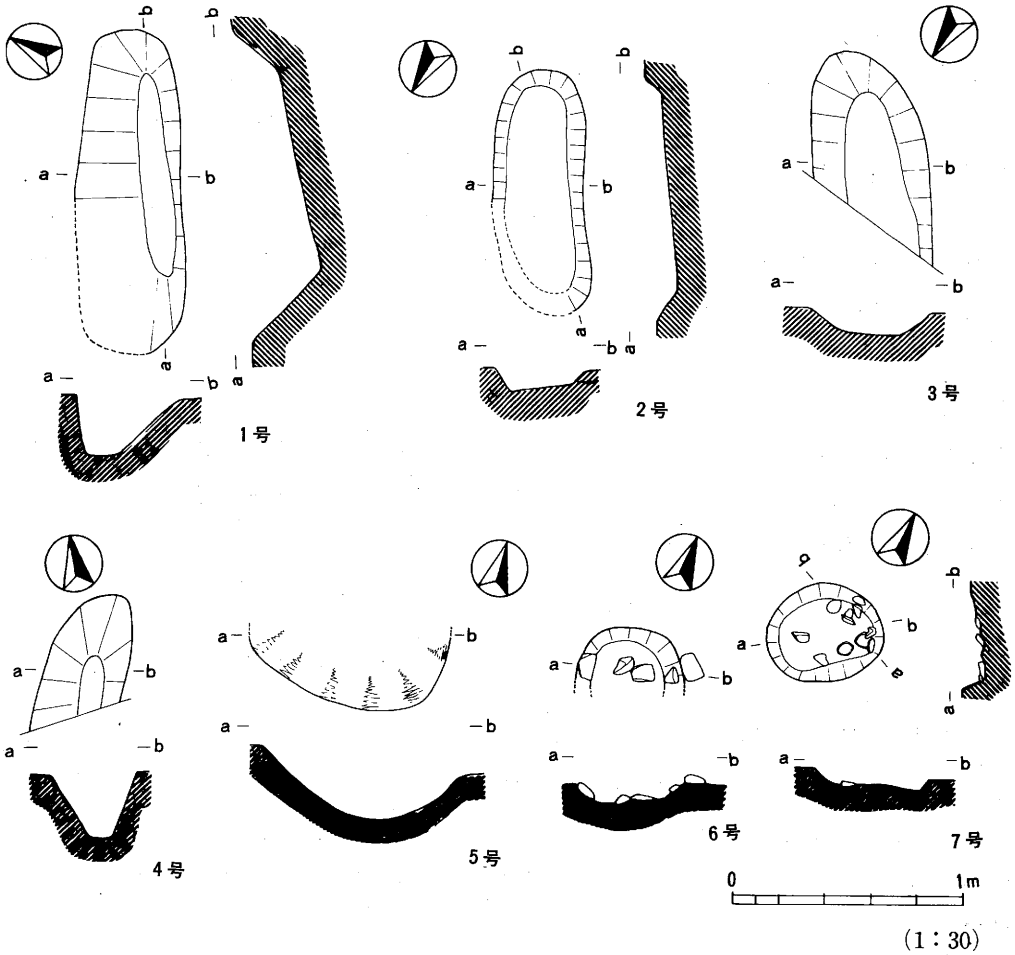
もの，周溝その他施設に関係したものは認められなかった。

(3) 第1号小竪穴（第10図）

1号小竪穴は，Bトレンチの3・4区にわたり検出される。規模は，北西～南東方向へ長軸をとり，その上面径は273cm，下面径は175cmを記録し，北西寄りの深さは63cm，南東寄りは上り勾配で立ち上がり38cmと高まる。これに対し直角に交叉する短軸は，南西へ北東方向へとり，その上面径は90cm，下面径は27cmで，交叉部分の深さは52cmであった。小竪穴内に遺物や礫等全く検出されなかった。

(4) 第2号小竪穴（第10図）

2号小竪穴は，Bトレンチの4・5区にわたり所在した。1号小竪穴の東に接して，方向を同じくし並列する。規模は，北南～南東方向へ長軸をとって，その上面径は210cm，下面径は172cmを数える。深さは北西寄りで18cm，南東寄りで13cmと1号小竪穴に比し浅くなる。また，短軸は，



第10図 小 竪 穴

長軸とほぼ直角に交叉する，南西～北東方向にかけてで，その上面径は80cm，下面径は55cmとなり，南西寄りで深さ20cm，北東寄りで10cmを記した。1号小竪穴に比し下面は幅広となる。遺構内より土器・石器等の遺物や礫等の検出は認められなかった。

(5) 3号小竪穴（第10図）

3号小竪穴は，Aトレンチの5・6区に及び検出される。1号・2号小竪穴と同様，その長軸を北西～南東方向にとる。しかし北西部はAトレンチの北壁以北の未掘部分に伸びており，その全容はあらいだされなかった。調査された範囲では，長軸の上面径は約160cm，下面径は約130cmであった。また，これと直角に交叉する短軸は，南西～北東方向で，その上面径は100cm，下面径は50cmとなり，南西寄りの深さが16cm，北東寄りが20cmであった。遺構内に土器片や石器・礫等は所在しなかった。

(6) 第4号小竪穴（第10図）

4号小竪穴は，Bトレンチの12区に検出される。長軸を南西～北東方向にとっており，南西部はBトレンチの南壁以南にのびていて，その全容はつかめなかった。調査された範囲では，長軸の上面径は約100cm，下面径は約50cmとなり，長軸とほぼ直角に交叉する短軸は，北西～南東方向を示し，その上面径は73cm，下面径は小竪穴の中央部に細まって15cmとなり，深さは55cmとやや深まる。1号～3号小竪穴とは，その長軸の方向を異にした。遺構内より土器・石器等の遺物や，礫の包含は全くみられなかった。

(7) 第5号小竪穴（第10図）

5号小竪穴はAトレンチの18～19区にわたり検出される。北壁以北の未掘部分に本址は及ぶため，やはりその全容をつかみ得なかった。発掘された範囲では，東西方向の長さが175cm，南北方向は60cm以上伸長することは確かであり，周壁より丸底状に凹む底部までの深さは65cmであった。また，壁の上面は，西壁より東壁の方が，約26cm低いつくりとなっていた。小竪穴内には，微量ではあるが縄文土器片の包含があり，礫等の混入はなかった。

(8) 第6号小竪穴（第10図）

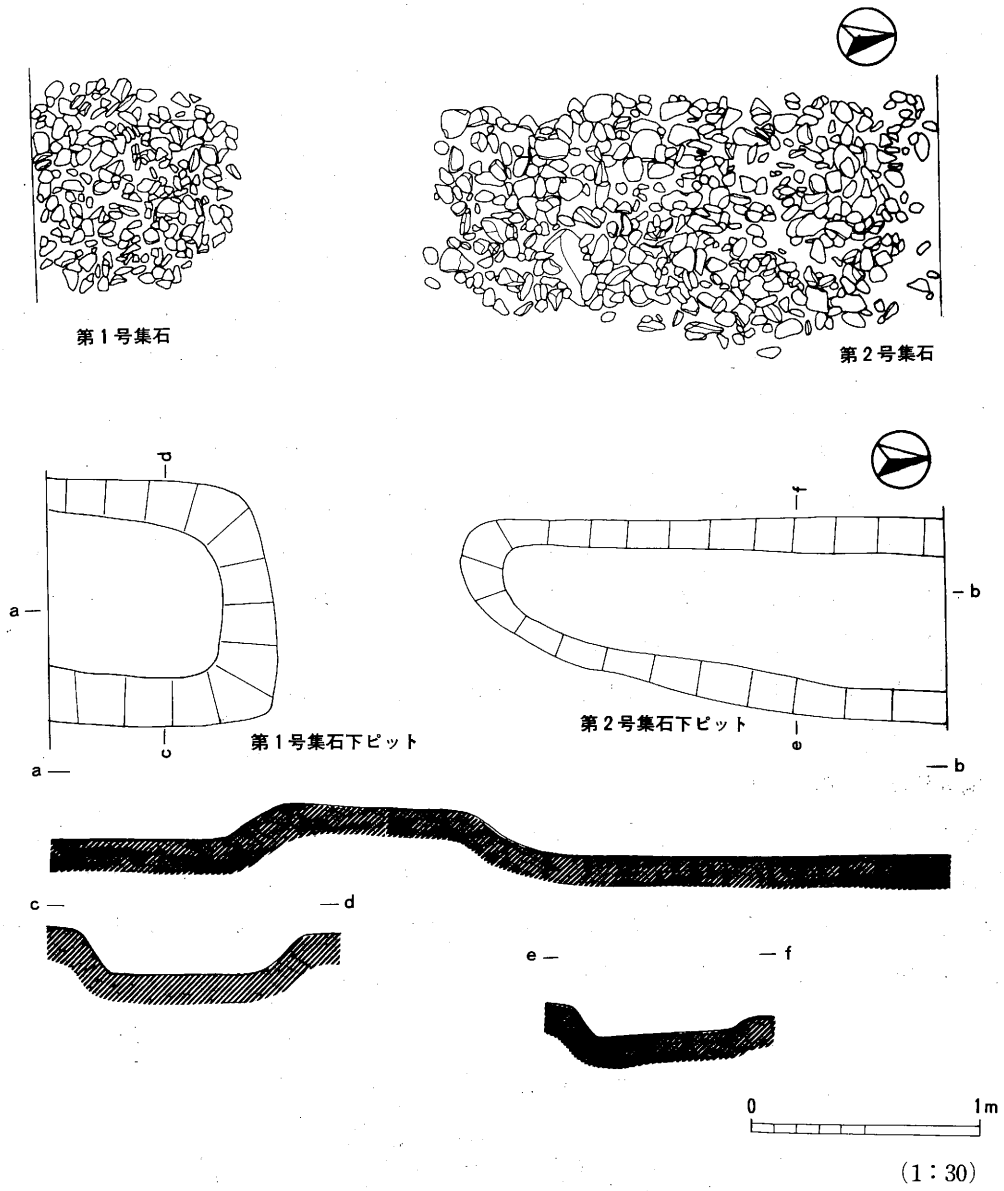
6号小竪穴は，Bトレンチの18～19区に及び検出される。5号小竪穴の南に近く所在し，7号小竪穴とは1m弱の西に隣接して発見される。南部がBトレンチの南壁以南にややかくされるが，東西方向の上面径は約95cm，南北方向もほぼ同様の数値を示すものと思われる円形小竪穴で，下面径も約60cmの円形を示していた。深さは約18cmでやや浅く，内部に20×15×5cm程度の石4個と，その東縁に同様の石1個が所在し，微量の土器片が検出される。

(9) 第7号小竪穴（第10図）

7号小竪穴は，Bトレンチの19区にその主体をおき，20区に1部及んであらい出される。規模は，東西方向約100cm，南北方向88cmの上面径を示し，下面径は東西方向83cm，南北方向58cmであり，落ち込みの深さは10～15cmと浅い円形づくりであった。小竪穴内には，11×6cmから15×10cm程度の礫11個が所在したが，土器・石器等の遺物は全く検出できなかった。

(10) 第1号集石（第11図）

第1号集石はAトレンチ14区に遺存した。集石は帯状の感があり，その輪郭は明瞭で，集合状態は濃密となる。南よりAトレンチの北壁以北に，230cm以上の伸長をみせ，東西の幅は，北寄りで約90cm，南寄りの最大幅は約115cmとなっていた。また，この集石の下部は浅い落ち込みをみせており，その底部まで，石がぎっしり詰め込まれていて，集石断面の厚さは約32cmを計る。落ち込みは，褐色土よりローム層内に形成され，規模は南北方向の上面径が，約180cm以上北へ



第11図 第1号，第2号集石

伸びており，下面径は同方向へ，約160以上北へ伸びていた。また，これと直角に交叉する東西方向の短軸は，上面径が約77cm，下面径が約45cmを記録する凹地となる。集石礫は，17×35cmの大石1個の他，鶏卵大からこぶし大の礫が大部分をしめ，14×15cm程度の石約20個が混在する。いずれも角のとれた河原石で，破砕された角礫とは異なり，調査された範囲では，千個以上を数える。

集石内より検出された遺物としては，石器として，縄文時代の凹石3個，磨石2個，凹石兼用磨石2個，打製石斧1個等々あげられる。しかし，土器・陶磁器類の出土は全くみられなかった。

(11) 第2号集石

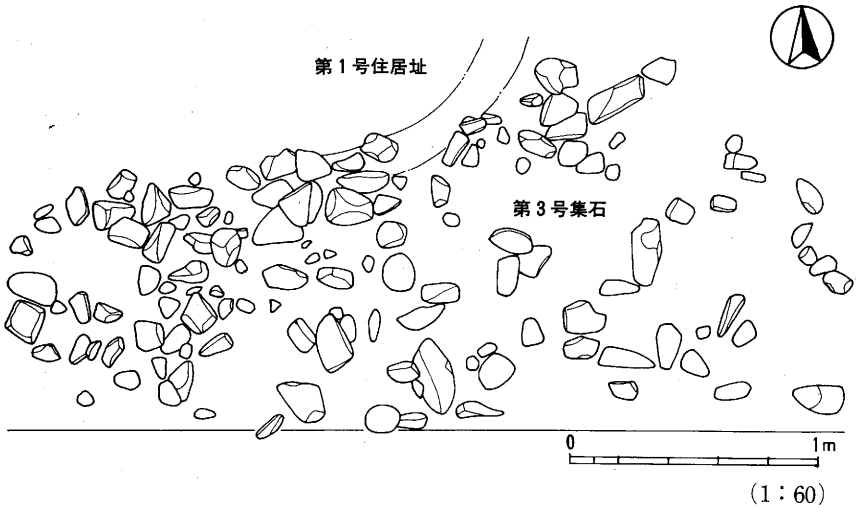
第2号集石は，Bトレンチ14区に検出される。その長軸は南北方向を示し，Bトレンチの南壁以南の未掘部分にわたって，90cm以上の伸長をみせ，短軸は東西方向で約95cmの幅をもつ。集石は，こぶし大以下の小礫が大部分をしめ，1号集石と比較して全般に小粒となる。集石断面の所見では，上面幅95cmで，東側の落ち込約20cm，西側の落ち込み約16cmを示し，この両側より舟底形を示す底部の最深部は約30cmとなり，この間に石礫の充満をみる。下部調査の結果でも，ローム層への落ち込みが確認される。落ち込みは，北より南への上面径が100cm 以上以南に続き，下面径も75cm以上以南へ伸びていた。また，短軸を示す東西方面の上面径は約105cm，下面径は約60cmとなっていた。

この2号集石の長軸は，Aトレンチ14区に所在した，1号集石の長軸線を南へ伸長した線上にあり，しかも同じレベル面に遺存し，両集石の近親性，同時性を感じさせる。しかしこれらの集石が，ただ，単なる畑地の礫を集めて排棄したものであるのか，あるいは何らかの目的をもって，集石されたものであるのか等，その意味するところは不明である。用材の礫は，いずれも角のとれた河原石で，1号集石と同様であり，500個以上を数える。

集石内の出土遺物は，土師器の細片2個の他，石器等の混在はみられなかった。

(12) 第3号集石（第12図）

第3号集石は，Bトレンチ21～23区にわたり分布していた。1号・2号集石とは全く様相を異にし，集石の礫が大形となり，確然とした濃密な堆積を示す集石ではなく，輪郭線は示しながらもやや不鮮明となり，集石中に空間を示す無石部分がある。また，集石内に円形・方形等特別な遺構を示すものも認められなかった。石の大きさは，6×11×18cm程度より，6×17×32cm程度の比較



第12図　第3号集石

的大形を示す礫を主体として，これに，こぶし大程度の石が混在していた。いずれも角のとれた河原石であった。分布は，Bトレンチ南壁以南に伸びる，未掘部分があるものの，発掘された範囲では，東西方向約340cm，南北方向は150cm以上で，確認された石は，大小合わせて約140個であった。これらの集石は人為的で，自然堆積とは思われないが，何の目的で，どのような遺構に付随するものなのかは不明である。集石内より，微量の縄文土器片が出土する。

⑬ 第4号集石（第13図）

第4号集石は，第2号住居址の直上に遺存しており，その分布はA・Bトレンチの24区，25区に主体をおき，一部，Bトレンチの26区に及んでいた。集石の規模は，東西方向約500cm，南北方向は300cmを数えるものの，南部は，Bトレンチの南壁より未掘部分に拡がるものと推察され，ほぼ500cm円形を呈するものと思われる。集石の用材は，角のとれた自然の河原石でしめられており，総個数は約400個。こぶし大程度の礫を主として，人頭大程度の石がこれに次ぎ，大は13×37×41cm程度の石，約10個が混在していた。集石内には，円形，方形等特別な輪郭を示すものは見

(1：40)

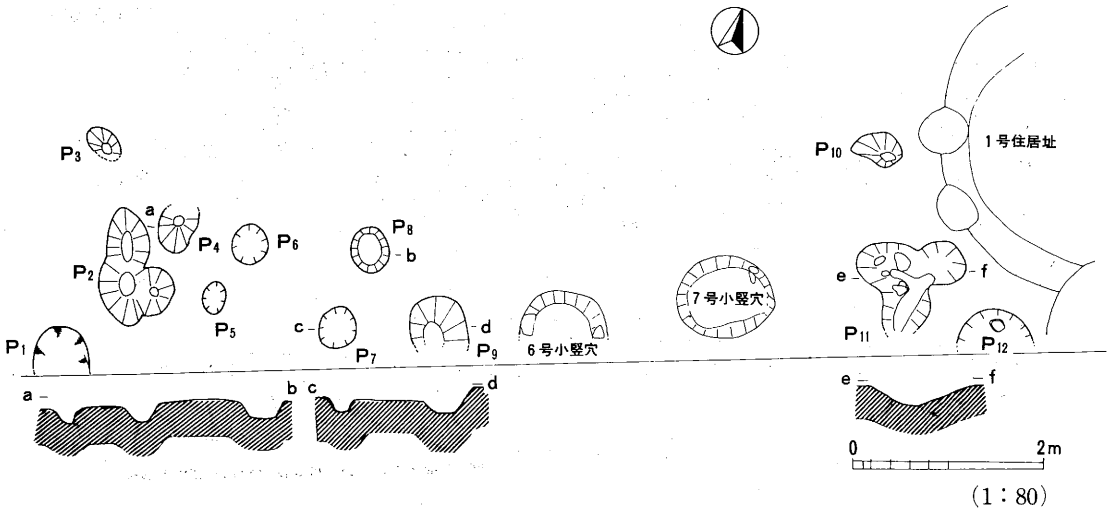
第13図　第4号集石

あたらなかった。集石内より微量の縄文土器片が出土する。

⑭ 第1号ピット群（第14図）

第1号住居址の西側に検出されたピット群は，主としてBトレンチの16区より21区に及んでおり，1部のピットがAトレンチ内に所在した。全般に柱穴状を示すものが多かったが，中には不整な形状をとるもの，土坑状のものなどがみられた。それらは合計12例を数える。これらのピットは，Aトレンチ内に2例で，他はBトレンチ内にあり，Bトレンチに南接する未掘部分にも分布するものと考えられるが，それらとの関連や，全容をつかむところまでにはいたらなかった。いずれも第3層のローム面に遺存する。なお，16～18区にかけてのピットは，千鳥状の並列が感ぜられた。また，ピット内からは石器・土器等の遺物出土は全くなく，P_{11}，P_{12}に礫が混入していた。以下，各ピットの形状や規模等について記述する。

P_1は，上面径が60×60cm，壁が垂直におりており，深さは28cmであった。P_2は，不整楕円形を示し，その上面径は長軸を南北方向にとって約125cm，短軸は東西方向に約80cmであった。落ち込みは三方に分かれて複雑となり，それらの下面径と深さは，13×33cm，-13cm。18×25cm，-25cm。8×8cm，-17cmであった。P_3は，上面径28×44cm，深さ15cm，下面径は10×10cmと皿状を示す。P_4は，上面径約38×55cm，下面径約10×10cmと細く集約し，深さは12cmと浅い。P_5は，上面径25×35cm，下面径5×7cm，深さ8cm。P_6は上面径40×40cm，下面径5×5cm，深さ5cm。P_7は，上面径40×45cm，下面径8×8cm，深さ15cm。P_8は，上面径40×50cm，下面径25×35cm，深さ17cm。P_9は，上面径約60×60cm余，下面径約20×20m余，深さ約13～24cmと一定せず，P_{10}は，上面径38×51cm，下面径17×10cm，深さ16cm。P_{11}は，不整三角形の土坑状を示し，内部に礫を含み，複雑となる。上面径は，東西方向約115cm，南北方



第14図 第1号ピット群

向約110cm。下面径の東西方向は約50cm，南北方向は約70cmとなり，深さは20cmであった。このピット内に，6×5×8cmから，15×15×28cm程度の石礫が5個まとまった状態で出現する。P_{12}は，その一部がBトレンチの南壁以南に及んでいるが，推定直径約83cmの円形土坑状を示しており，深さ24cmで，内部に9×12×18cmの礫が1個所在した。

以上が各ピットの規模，形状等であるが，この中，P_{10}～P_{12}は1号住居址の縁辺に隣接しており，その付属施設とも理解される。また，P_3～P_7は，いずれも上面径は広いが，下面径がいちじるしく集約して細まっており，いわゆる柱穴のあり方とは，その趣を異にしていた。

（大久保知己）

第2節　Cトレンチ

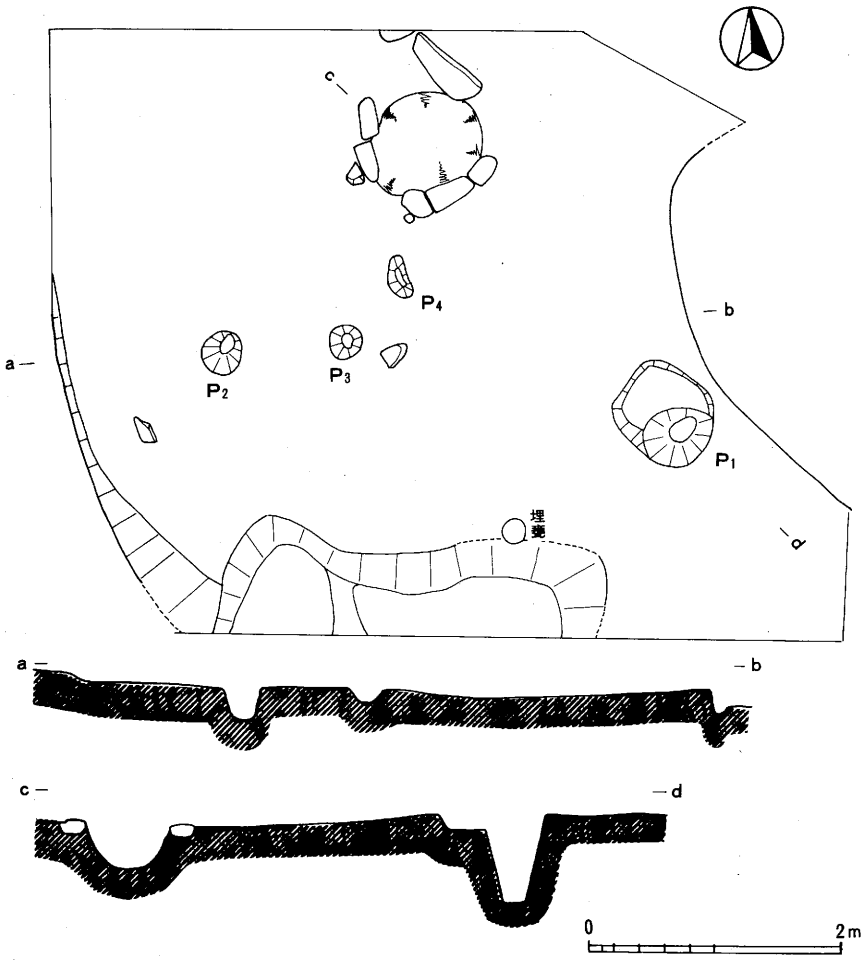
(1) 第3号住居址（第15図）

第3号住居址はCTの西端，2区～4区にかけて発見され，東側は5号址と重なり切られている。南側も他の遺構と重なり，壁はあきらかでなく，西から北側にかけては未掘である。最初掘られた2区～4区を中心に南側は2m，北は1m幅に拡張発掘されたが，未発掘部分のある住居址となってしまった。第3址の上部には遺構があったと考えられ，3号住居址に接した3区～4区では－40cmの黒色土層の下部に径10cm位の穴2個が110cm離れて発見され，拡張後の4区の南側の端でも径10cm位の穴が20cm離れて並んで発見され遺構の一部と推定される。1区のトレンチ上部にも角礫を混えた礫が多く散在していたが，用途は確認されずに終って，3号址の掘下げとなった。

3号址と掘下げ中のほぼ中央地表より，－55cm，北側の端，中央付近地表下－60cm，南西の隅地表下－40cmよりそれぞれ，焼土が発見され，中央は円形に，後者の2ヶ所は半円状で，未掘部分に伸びているらしい。土器等の出土もあり，生活遺構の一部と認められるが，確認できない生活遺構となった。また，南壁からはこれ等に関係すると考えられる出土品，磨製石斧1，－65cm，土偶頭部，－60cmが出土している。

最下部に発見された3号址はローム面を少し掘下げ，全体は確認できなかったが，石組の炉址はほぼ中央であるらしい。南側に出土した埋甕も南壁の近くであったとすると，大きさは東西5m，南北5.5m位の隅丸の方形住居址が考えられる。柱穴はP_1はやや大きい穴であるが柱穴としたい。P_2はよいであろうし，これと対比できる北側に柱穴が発見できなかったが，まだ掘り足りないのかも知れない。炉址は石組が完全であったと思われるが，胡桃の木の植樹があり，その抜根の時，根と共に北側の石組の一部が動いて位置が乱れたらしい。炉址は約1mの方形に近い形であったと推定される。南側の埋甕は2回埋没がなされたらしく，写真でみるように，甕の胴部が並んで発見されている。床面の上部で発見されているものより少し古式となるが，3号址の年代を決める甕である。3号址の南側は落ち込み別の遺構のようである。3号址の壁がのこっていない点をみると，3号址よりは新しい遺構の存在が考えられる。

（小松　虔）



(1：80)

第15図　第3号住居址

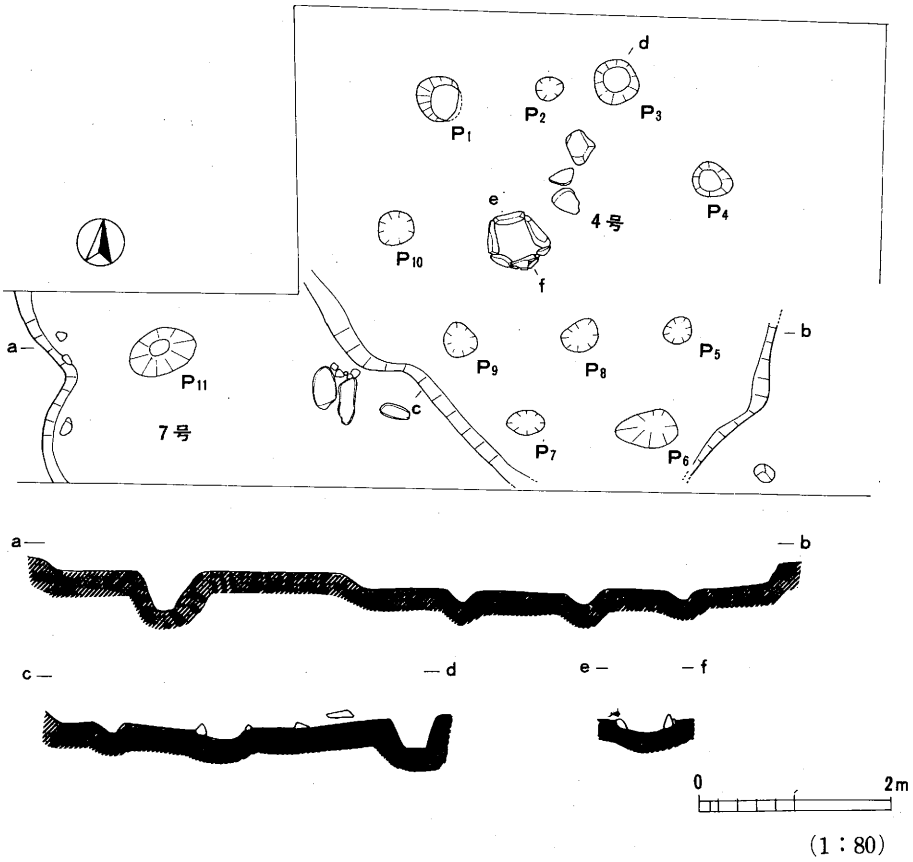
(2) 第4号住居址

4号址は C_{14}～C_{16} および北拡張区に位置し，遺構分布からみると東端地域にあたる。

4号址は上・下2つの住居址が重複して存在する。上層の住居址は地表下40cmの褐色土層中に炉址の石組みおよび焼土の検出により確認された。しかし，その規模，性格等は褐色土層中ということもあり，判然としなかった。一応出土遺物の状態から加曽利E期の住居址ではなかったかと推定される。

この上部の遺構面を掘り下げ，下層住居の覆土となると完形・半完形の土器が足の踏み場もない程に集中して出土した。その出土範囲は下層住居址の全域にわたるが，炉址上部周辺に特に著しく，床面から10cm程度浮き上って出土した。

住居址の平面形態は径5m前後の円形を呈すると推定されるが，壁が残されている部分が東壁の



第16図　第4号，第7号住居址

1部のみであるため判然としない。壁面はローム層をほぼ垂直に掘り込み，このローム層を掘り切って砂利面まで達している。このため壁面は余りきれいでない。床面は，砂利層中に作られていたため極めてもろく，凹凸が著しい。本遺跡の他の住居址は全てローム層中に床面が設けられていることを考えると，本址の状態は特異である。床面上には炉址とP_3との中間部分に40×30 cm，厚さ10 cmから30×20 cm，厚さ10 cm位の上面平坦の河原石3個が置かれている。作業台的な役割のものかもしれない。

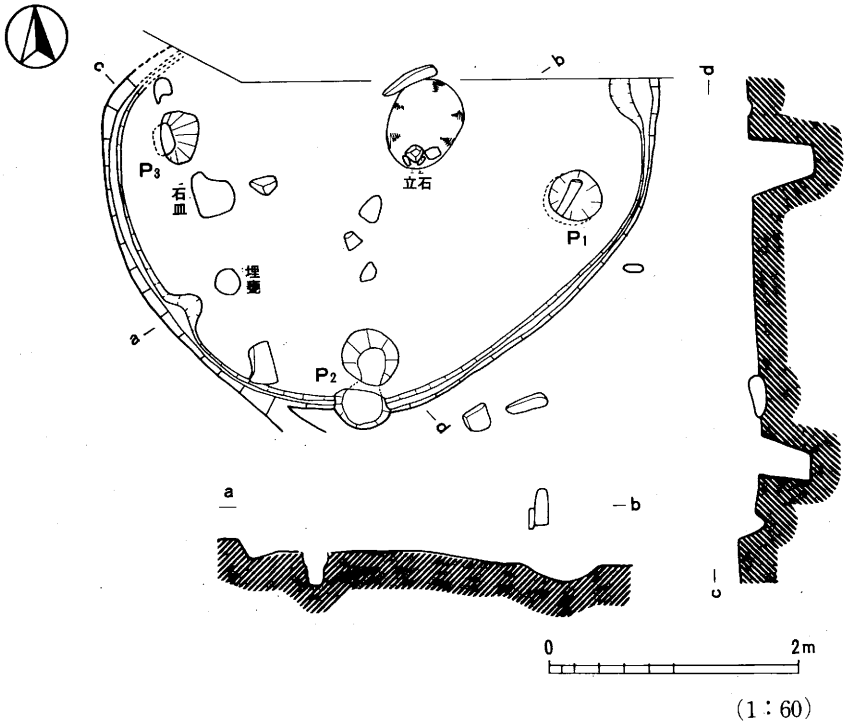
ピットは10穴あり，主柱穴と思われるものはP_1(−40)，P_3(−35)，P_4(−45) および深さは10 cmほどであるが，P_{10}，P_9，P_7，P_6，P_5の8柱穴であったものと思われる。深さの浅いものはあるいは柱穴掘り込みが砂利層にあるため良好に残らなかったのかもしれない。炉址はほぼ中央にあり，長さ40〜25 cmの石5個を五角形に組み合わせた石囲炉で，南側の炉石には背後に小さな石をかっている。炉址は床面より5 cmほど上に出ている。炉底はすり鉢状にゆるく掘られ，深さは16 cmを計る。内部には焼土は見当たらない。しかし炉石はかなり焼けており，ボロボロになっている。

本址の時期であるが，出土土器から中期勝坂期に位置しよう。　　（小林康男）

(3) 第5号住居址（第17図）

第5号住居址の範囲はCTの4区～6区にわたり発見され，トレンチも一部が拡張された。上層の地層状況より述べてみたい。最上部の黒色土の耕土は20～30cm位あり，この層位にも生活遺構があり，それとして，第36図の土器1～10までは黒色土中の出土，11～14まではその直下の褐色土中からの出土遺物であり，4区の－40cmに110cm離れて2個の径10cm位の穴が黒色土中に，穴の回りが固くはっきりと検出され，4区～7区にかけては敷石住居の遺構の一部とみられる石の配石らしい部分がみられた。上部であるため，耕作等により失われてしまっており，確認ができなかったのが残念である。褐色土層に入ってから40～60cm位は土器の出土も多く，5区の南側の壁に焼土が発見され，その西の壁よりには土器が多かった。そして中間の北壁付近に立石が発見された。立石は地表より－30cmに上部があり，砂岩質で，長さ35cm，径が13cm～8cmあり，下部がやや太く円柱に近い。これを支えるように，南側に長さ13cm，径3cm×7cmの薄い板状の石と，西側に長さ14cm，径6cm×13cmの石があり，柔らかい褐色土中の立石を固定したものとみられる。前述した，焼土や土器・立石を含めた住居址はこの層位では，住居址として確認はできなかったが，焼土が炉址とするなら，立石は住居址の北よりになり，床面上には20cmは優に現れていたと考えられる。立石の下15cmには5号住居址の床面があり，立石の下には5号址の土器とおもわれるものが顔を出している。この立石に関係した層位の土器は第35図，37～38図である。

最下部の5号住居址は地表下80～90cmにあり，西隣りの3号住居址の東側の一部を切っている。



第17図 第5号住居址

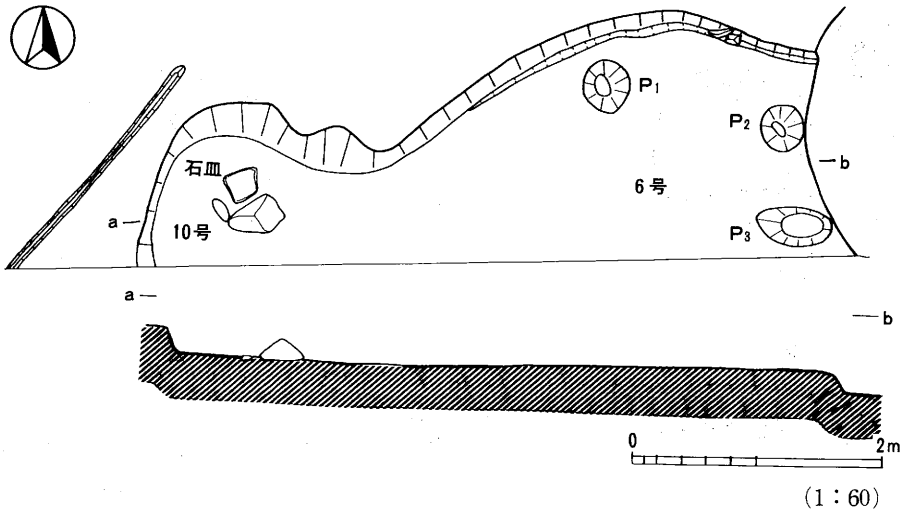
大きさは全部を発掘できなかったのではっきりしない点もあるが，東西4.1m，南北3.4mの隅丸方形の竪穴住居址で幅10～15cmの周溝があり，中央東寄りに炉址がある。柱穴はP_1，P_2，P_3の3ヶ所が発見されており，P_2は穴が2個並んで1個は周溝から壁にかけて掘られており，2個の中間には固い床面があり，2つとも5号址のものか，他の遺構のものもあるのか，確定できないが，現在は内側の穴を5号址の柱穴としておく。床面に発見された遺構等に，西側の壁近くに埋甕があり（第35図），その北P_3の柱穴近くに，石皿が伏せた状態で発見された。炉址は先に述べた立石の直下になり，炉の北側に1個石があり，石組が炉の回りにあったのかどうか今では，はっきりしない。炉址内より有孔土製品が発見された。また炉の西60cm位離れて石棒の折れた部分が発見された。住居址の時代は縄文中期末に入る時期であろう。上部から5号址までに3～4の住居址の重なりが考えられる。

（小松　虔）

(4) 第6号住居址（第18図）

本址は，Cトレンチ8区～10区に位置し，西側は第10号住居址，東側は第9号住居址が重複している。なお，南側に未調査部分を残している。切り合い関係は，第10号住居址とは明確ではないが，本址を第9号住居址が切っていることは明確である。

平面形は円形を呈するものと思われる。推定4cm20cmの径を計る。覆土は第II層である褐色土である。床面は平坦で，全面を良く踏み固められていた。壁はほぼ垂直に立ち上り，壁高は15～18cmを計る。周溝は北側部分に残っており，幅15cm，深さ7cmを計る。ピットはP_1（−17cm）・P_2（−39cm）・P_3（−15cm）の3本であり，主柱穴となると思われるものはP_1とP_2である。P_1とP_2は底部に小砂利を見せており，特にP_2は垂直に掘り込まれ，内部より土製の「耳飾り」が1



第18図　第6号，第10号住居址

個出土した。また，内部より拳大の転石が3個見られた。炉址等は確認できなかった。

出土遺物は，後述の土器と石鏃・打製石斧・凹石・磨製石斧の石器類が出土した。

なお，本址の時期は床面などより土器が出土していないので明確なことは分からないが，覆土中よりの土器などにより縄文中期後葉に位置するものと考える。（浅輪俊行）

(5) 第7号住居址（第16図）

第7号住居址は12，13，14区にかけて発見され，東は4号住居址と重なり，住居址の一部が発見されたのみである。

13区では上部の褐色土層直上には3～4区でみられたような径10～11cm，深さ35cmと50cmの穴が2個発見され，間隔は110cmで上部の遺構に関係があると考えられる。7号址は，ロームを掘り下げて造られているが，住居址としては南に伸びているらしく，遺構の一部として，P_1の柱穴と見られる穴，その東4号址の近くに30～40cm×15～25cmの石が3個と小石が5個ほどかたまって出土している。土器も縄文中期相当の土器で見るべきものは無い。

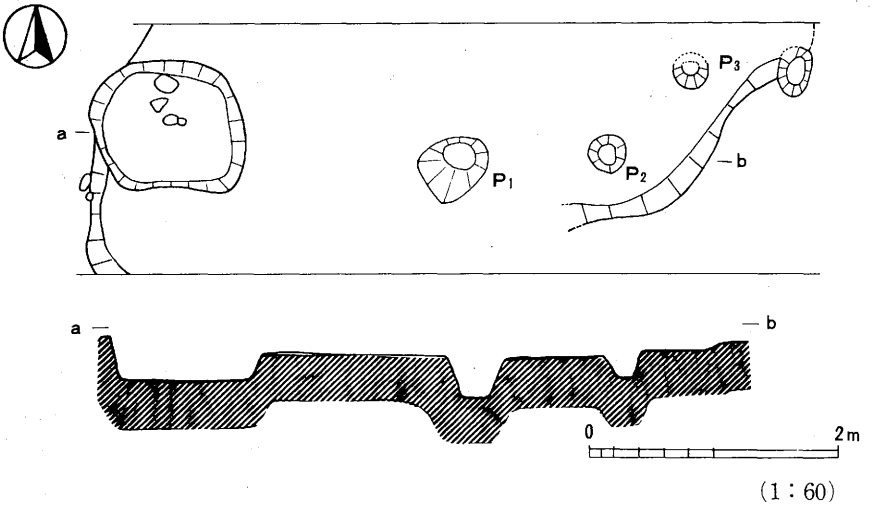
（小松　虔）

(6) 第8号住居址（第19図）

本址はCトレンチ17区～19区に位置している。南北両側部分は未調査である。

平面形は円形になると思われる。東西5mを計るが南北は不明。覆土は褐色土である。

床面は，やや傾斜を持っているが，平坦でありやや軟らかな状態である。壁は西側と東側一部に見られる。西側は明瞭に立ち上がり，壁高14cmを計る。東側はなだらかに立ち上がり同じく14cmを計る。ピットは，P_1（−30cm）・P_2（−24cm）・P_3（−22cm）の3ヶ所を確認した。主柱穴は



第19図　第8号住居址

P_2・P_3の2本であろう。

西側に不正円形の小竪穴があるが，本址に付属するものと思う。底面の大きさは100×110 cmで，平坦である。プラン確認面は120×140 cmで，小竪穴の形は袋状を呈していた。床面を20 cmほど掘り込み，底部に拳大～人頭大の石が散在していた。他に施設はない。

本址からは，後述の土器と石鏃・打製石斧・凹石・磨製石斧が出土した。

時期は出土土器よりして中期中葉勝坂期であると推定される。

（三村　肇・山越正義）

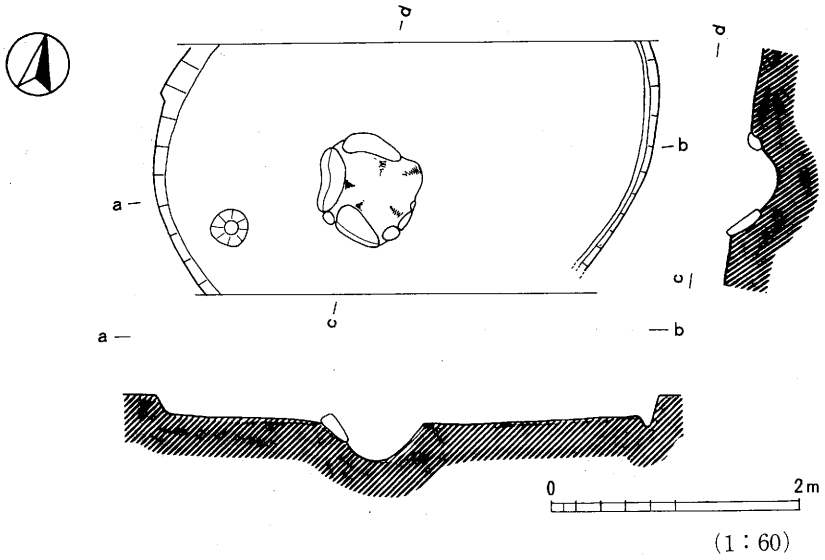
(7) 第9号住居址

第9号住居址は10区～12区にかけて発見され，上部から遺物も出土しているので，上層の出土状況より述べてみたい。

10区，11区の地表下23 cm～25 cmの黒土層にはかなりの土器や石器が出土し，石の多いことより敷石住居址があったのではないかと考えられるが，浅いため，耕作に荒されて住居址と認めることはできなかった。

11区，12区の－30 cm～－40 cmにかけては褐色土中に縄文土器や石器が多くあり生活の遺構のあとと考えられ，12区は－50 cmまで縄文土器の出土が多い。最下層の9号址は，ローム層を14 cmほど掘り下げて作られ，壁に沿って細い周溝がある。ほぼ中央に石組の炉址があり，炉址の西側に柱穴が1個発見された。トレンチ発掘のため図上復元をしてみると径4.20 mの竪穴住居址になるらしい。縄文中期中葉の出土土器が多いことから住居址もその時期と考えられる。

（小松　虔）



第20図　第9号住居址

(8) 第10号住居址（第18図）

本址は，Cトレンチ7区～8区に位置し，東側が第6号住居址と重複している。南側部分は未調査。本址を一戸の住居址とするには若干問題がありそうである。なぜならば推定住居址面はあまりに小さく第6号住居址との切り合いも判然としないからである。だからして本址を第6号住居址の張り出し部分とみる意見もあるが，調査時点では，確証をつかむことができなかった。ここでは一応一戸としておきたい。

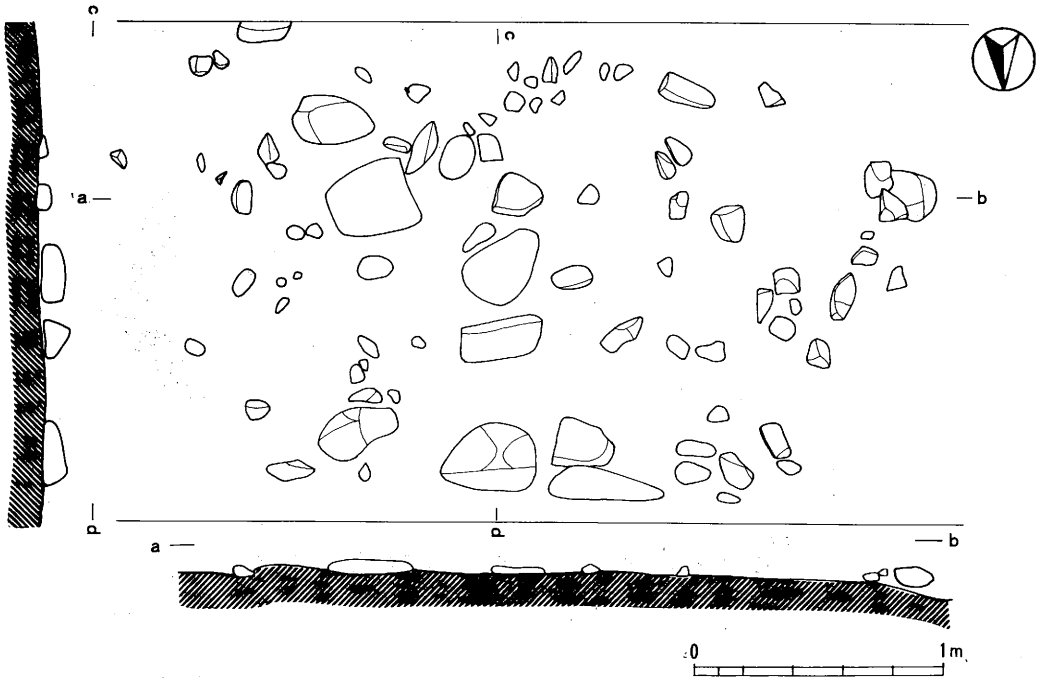
平面形，規模等は判然としない。

床面は一部残るもあまり良くない。壁は西・北側部分が判明しており，西壁は明瞭に，北壁はややなだらかに立ち上る。壁高は20～30cmを計る。床面に（50×35・40×35・25×10cm）の3個の石を残すが，内一つは石皿である。出土遺物は後述の土器と打製石斧・凹石・石皿・砥石等の石器が出土した。

時期は第6号住居址と大差ないものと思われる。（浅輪俊行）

(9) 第5号集石（第21図）

本址は，Cトレンチ9区～10区に散在していた石をさすものである。石は挙大から40cm平方くらいまでのもので転石が多い。南北両側に未調査部分を残している。石は第I層（黒色土）より第II層（褐色土）にあり，第II層に食い込む状態であった。覆土よりは石器・土器と共に炭化物も少



（1：60）

第21図 第5号集石

量ではあるが併出している。これらの石は人間の所産と思われるが，性格は不明である。石の下部よりは遺構の性格を決定するものは見出されなかったが，その下位より第6号・9号の2つの住居址が検出された。本址よりは後述の土器及び打製石斧・磨石の石器が出土した。

本址の時期決定は，第48図20の小型土器をもってしたいが，縄文時代中期の後半と考える。

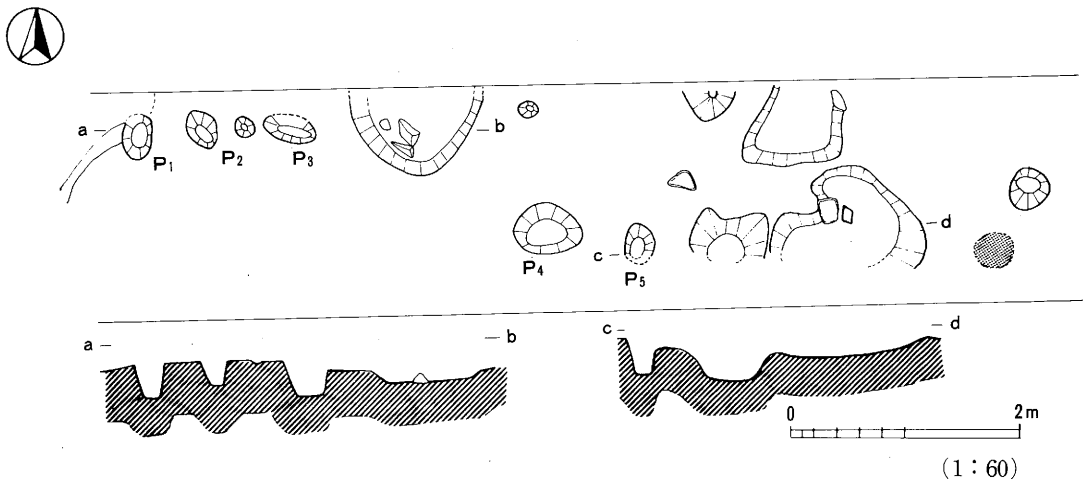
（浅輪俊行）

⑽ 第2号ピット群（第22図）

本ピット群とは，Cトレンチ20区～23区にあるピットを指す。これらは20区の8号住居址にかかるものから21区のものまでと，22区～23区にあるものまでの2種に分けられる。これら2種のピット群の覆土は褐色土である。

20区～21区のものはほぼ円形で，40×30cm，深さ30cmのものが3個（P_1・P_2・P_3），内部に拳大の石を3個含む東西120cm，深さ11cmの小竪穴とがほぼ東西に一直線にならんでいる。また21区には60×50cm，深さ30cmのもの（P_4）が見られた。

22区～23区までのものは，30×30cm，深さ30cmのもの（P_5）と，ピットと呼ぶには問題がありそうな100×80cm，深さ20cmの不定形の掘り込みが組み合わされている。ピット群上部の第Ⅰ層（黒色土）・第Ⅱ層（褐色土）にはそれぞれ南北105cm，東西55cm，南北80cm，東西80cmの土器片，打製石斧を噛む拳大から人頭大の円礫による集石が見られる。また24区からは，50×50cmの焼土が南壁面にそって検出された。当初その不定形な形状と乱列の様相から，遺構に伴う構築物とは認め難く，危惧の念を抱いたが，30×30cmのピットより凹石が底壁より10cm 上部で，壁側面をずり落ちたような状態で出土し，なお60×30cmのピットからは後述第　図7の底部破片土器，30×40cmのピットから石鏃が1点出土した。本ピット群の深さは20～40cmで遺物を含有するピットは不定円形である。時期は22区の人頭大扁平礫を被うようにして出土した大形



第22図　第2号ピット群

土器片（井戸尻式）をもって当てる。

（三村　肇・山越正義）

7

第Ⅳ章　遺　　物

第1節　土　　器

(1)　ABトレンチ

1）第1号住居址（第23図1～4）

1号竪穴住居址内出土遺物の中，土器片は皆無に等しく，僅かに第1図1～4に集録された細片を数えるにすぎなかった。しかも4片とも土器形式を異にし，本址の所属年代を決定づけるところまでゆかなかった。

採用土器片の中，1は，近くの塩尻市宗賀区平出遺跡で報告された，縄文中期初頭土器第三類Aに分類されたものと同類で，半截竹管による，平行沈線文が垂下している頸部辺の破片である。2は，平縁口縁が肥厚しながら外に開き，口縁部の区画帯内に，深い連続刺突文を何条も施している。縄文中期前半の平出第4類Aに相当する。3は，整然とした平行沈線文を横位に引き，その下部に同様の平行沈線文を密に垂下させており，縄文中期中葉の，勝坂期の特徴的な耳状小突起が付加されている。器厚は0.5cmと薄手である。4は，口縁部に無文帯をおき，横走する沈線と，沈線描出による凸レンズ状の横位連鎖文がめぐっている。器壁0.4cmの研磨された精製土器であり，暗褐色を呈する。縄文晩期所属とみられるが，類例をあまり見ない。

2）第2号住居址（第23図5～29）

2号竪穴住居址内出土遺物の中，土器は，第1図に示した5より29までが該当する。やはり1号住居址同様，址内出土の土器として，完形品は皆無，しかし出土量少なく，活用し得る資料もまた，僅かであった。報告にあたり，これらの土器片を分類整理し詳述したい。

○第1類土器（5～12）

縄文中期初頭に位置づけられるもので，本類をさらにa，bに2分類する。

a類：6，9，10，12が含まれ，縄文を地文とし，浅い平行沈線文等が併用されるものをまとめた。6は，器厚0.5cmとやや薄く，縄文を地文として平行沈線が施され，部分的に格子状を呈する。頸部辺の破片とみられ，その屈曲部に横走する隆帯があって，その上面に縄文の転載がみられる。9は，縄文地文に浅い平行沈線が引かれているが，胎土に輝雲母を含み器厚0.9とやや厚い。10は0.5cmと薄手となり，平行沈線と荒い隆帯上に，縄文らしき転載をみる。12は，平行沈線が縦方向に密となり，横方向には疎となって格子状となる。

b類（5，7，8，11）：平行沈線が縦方向に施文された一群で，平出第3類Aに相当するものである。5は，平縁口縁が外反し，平行沈線がややあらく引き下げられ，頸部への肥厚部に太い刺突状の押圧痕が横に点在する。7，8，11は，平出第3類Aに特徴的な平行沈線が施される。

第23図　A・Bトレンチ出土土器

○第2類土器（13～20）

縄文中期前半に所属する，平出第4類A・B式，関東地方の阿玉台式等に対比されるものをまと

めた。更にこれらを施文のあり方から，a, b, c に3分類した。

a 類：刺突面が三角状を呈する，特徴的な連続刺突文の施された1群である。13, 14, 19 が含まれ，13, 14 は平縁口縁部で，14 は壁調整をよくし，口唇部が内そぎとなるが，共に横位楕円区画内を，連続刺突文を密に施して充てんしている。19 は器厚 1 cm と厚平の胴部破片で，器全面を連続刺突文でみたす。

b 類：竹管の背位連続爪形文の施されたものを一括した。15～18 が該当し，15～17 は隆帯に沿ってその両縁に，細かなやや浅い連続爪形文を走らせており，15 には隆帯上に刻目を付している。18 は平縁口縁部に沿って，強く太い連続爪形文を2条横走させている。

c 類：20 の1例のみで，平行沈線文と連接する押引状文が，横位に併用されていて，施文のあり方を異にする。

○第3類土器（21～29）

縄文中期中葉に位置づけられる1群をまとめた。21 は隆帯による区画内に，整然とした平行沈線文がみたされ，22, 23 は，隆帯や粘土紐貼布による区画の上下に，縄文が施され，24 は地文の縄文に平行沈線が垂下する。25～28 は，器全面に中位の縄文が施文される。29 は底部で，底径約 11.6 cm，器厚 0.8 cm，無文で器の立ち上りは，ゆるく外傾している。

3）第5号小竪穴（第23図30～33）

5号小竪穴内出土土器で，活用でき得る資料は，僅か4例にすぎなかった。この中，30 と 33 は土器底部で，共に焼成よく黄褐色を呈し無文である。30 は底部径が約 13.6 cm，器の立ち上がりは急となる。底部厚が 0.9 cm であるのに対し，器壁厚は 1.2 cm と厚手である。33 は底径が約 11.2 cm，器の立ち上りは，外傾しながら無理のない円滑な立ち上りをみせ，器厚は 0.8 cm の中厚手である。31 は，器厚 0.7 cm で焼成よく茶褐色を呈し，竹管による背位の連続爪形文を歯車状に施している。平出第4類 B に相当する土器片である。32 は，器厚 0.7 cm，暗褐色を呈する胴部破片である。綾杉状の沈線文が施され，縄文中期末の曽利5式に対比され得る。

4）第6号小竪穴（第23図34）

第23図34に示す縄文土器片と，図示しなかった土師器の細片1個，他無文土器片2個等々であった。34 は，0.5 cm の薄手土器で，焼成はよいが，灰白色を呈する胴部破片である。箆描文がまとまった構図をもたずに，任意自在に表出されるが，縄文前期初頭の木島式系土器に属するものであろうか，類例を見ない。

5）第4号集石（第23図35～37）

4号集石内出土土器も，活用し得るものは僅かに3例であった。35 は結節状浮線文が密接し，半截竹管の横位連接押圧による，波状沈線が付加される。36 は器全面に縄文施文となり，37 は整っ

た平行沈線文の施された，いずれも0.7cm位の中厚手土器片である。

6）第5号集石（第23図38～46）

5号集石遺構内の出土土器の中，活用し得る資料は第23図にあげた38～46までで，必ずしも資料的に満足のゆくものとは言えなかった。施文のあり方から，これらをa～d類に4分類し，報告にかえたい。

a類：38，39が含まれる。38は，やや大形の波状口縁部破片で，器厚約0.7cmであるが，口唇部が肥厚して内湾する。波状の頂部は突起状の二山を形成し，口唇肥厚部上や，口縁部の渦巻状隆帯間に，竹管背位連続爪形文を施す。39は，頸部辺の破片で，縦横に整った区画をとるらしく，かなり深い太い爪形文を，密に連続させている。2号住居址出土の18や，5号小竪穴の31と類を同じくするものである。

b類：40，41，42が該当し，a類より爪形文が細く浅く施文される類である。これらは，2号住居址出土の第2類B，15，16，17と施文を同じくしている。40，41は，隆帯上に刻目をもち，その隆帯の両縁に細かな連続爪形文を施している。42は，0.5cmとうすい小形土器の胴部破片であるが，極細の浮隆線によって，方形状に区画された内部に，微細な連続爪形文をめぐらし，空間部全面に斜行する沈線文をみたしている。

c類：44，45の2例で，縄文の施される類である。45は器厚0.4cmと薄く，黒褐色となる。縄文を地文とした上に，平行沈線を併用している。2号住居址出土土器の第1類a式と同類である。

44は，平縁口縁部が肥厚し，器厚1cmとなり，全面に縄文施文となっている。

d類：その他土器を一括した，43，46がそれで，43は，沈線の上下に太い連続爪形文と縄文を施している。46は，平行沈線と細い蛇行沈線が垂下している。

7）遺構外出土土器（第24図47～65）

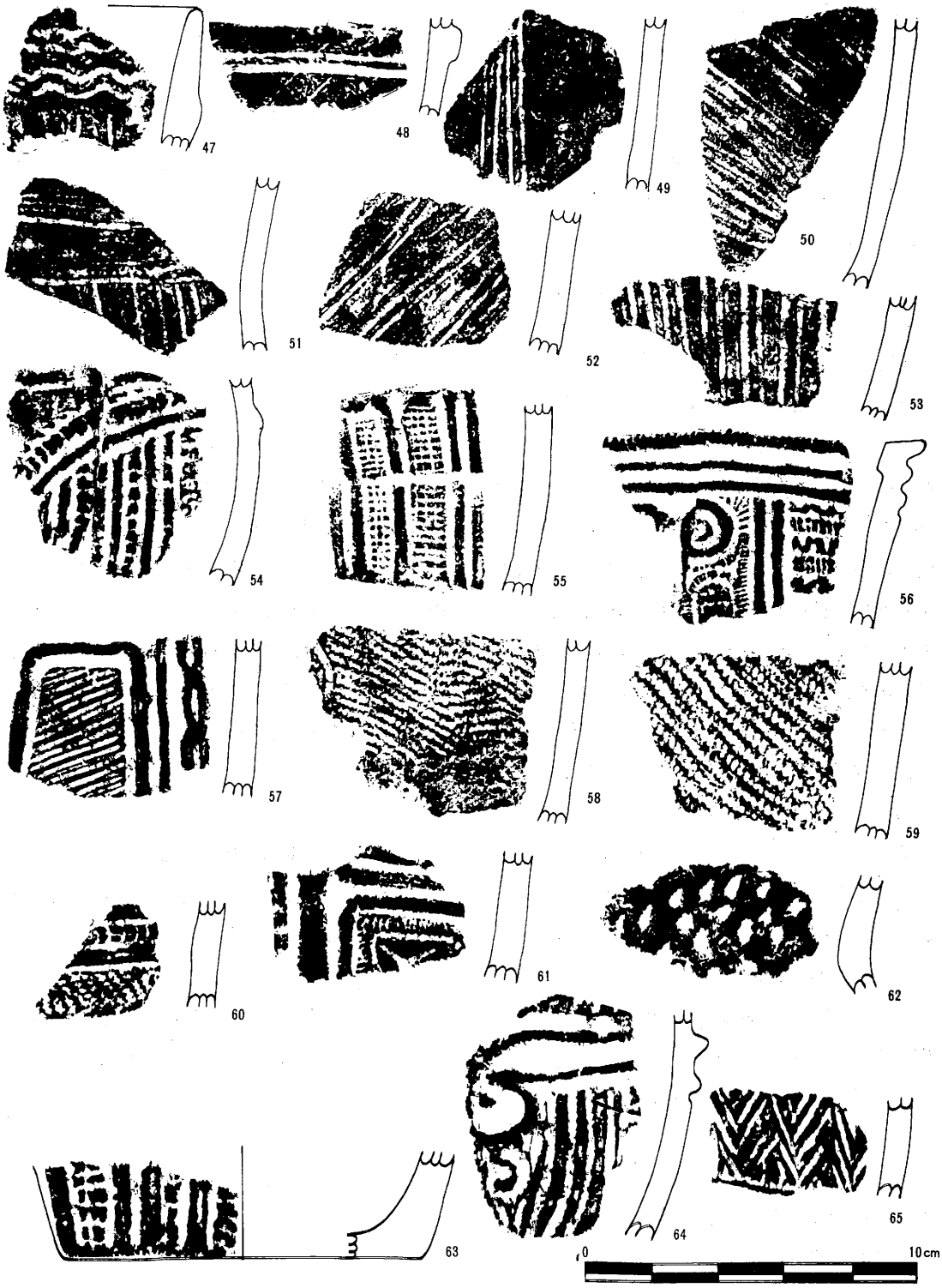
A・Bトレンチ内の遺構外出土遺物は，遺構内に於ける遺物同様，その量は極めて稀薄であった。その中で，石器は僅かに石鏃1，石匙1，打製石斧2，凹石1を数えるにすぎなかった。また，土器もようやく活用し得る資料として，第24図に集録した47～65をあげる程度であった。しかしこれら土器片は，A・Bトレンチ内に検出された，各種遺構と何らかの関連をもつと思われるので，ここに採用資料を分類整理し，以下，報告にかえたい。

○第1類土器（47）

47は，Aトレンチ28区出土である。平縁口縁部に縄文を地文として，その上面に2条の横走するコンパス文様が描かれ，頸部以下の器に肉厚がみられ，平行沈線が縦に施文されている。繊維の含有はなく，焼成よく茶褐色となる。

○第2類土器（48～53）

沈線文施文土器を一括し，更に2分類した。



(1：2)

第24図　A・Bトレンチ出土土器

a類（48, 49, 51, 53）

本類は，縄文中期初頭に位置づけられる，平出第3類Aに相当するものを取扱った。48は，Bトレンチ27区出土，器厚0.6cmと薄く，横走する隆帯と平行沈線があり，その下部に，斜格子状の細い沈線が施される。胎土に輝雲母を含み，焼成はよい。49は，平行沈線が縦方向に引かれるが，無文地を大きく残し，53は全面に施文され，51は，53と共に胎土に多量の輝雲母を含有し，整然とした横走と縦走の平行沈線が引かれている。

b類（50, 52）

本類はa類より後出するものとみられ，50は右傾，52は左傾する沈線が，密に施文されている。共に焼成よく0.8cmの中厚手土器となる。

○第3類土器（54～57・63）

縄文中期初頭所属の，竹管文の駆使されたものをまとめた。いずれも，A・Bトレンチの27，28，29区出土である。54は，半截竹管による浮隆線区画文帯をつくり，その区画帯内を，同種の浮隆線並列によって充てんし，更に2本おきにその浮隆線上を，結節状の押引文を施して加飾している。55～57・63は，共に浮隆線による区画帯を設け，その内部を完全施文する類である。55，63は，内部に格子状の沈線がみたされ，57は斜行沈線が引かれるが，太い浮隆線上を連続押圧して，その中心部に刻目を入れている。63は底部で，その底部径は10.8cmとなり，器の立ち上りはやや急である。器壁は1cmと厚いが，底部厚は0.8cmとうすくなる。56は，平縁口縁部破片であるが，内壁の縁を肉厚とし，口唇上に1cmの幅広い面をとっている。整然とした浮隆線を3本横にめぐらし，その縁どりの浮隆線上に，細かな刻目を付す。頸部にかけては，浮隆線による直線，渦線を配し，微細な爪形文，刺突文を加えて文様に変化をつけ，加飾している。

○第4類土器（58, 59, 60）

縄文施文の土器をまとめた。58は，器厚0.6cm，59は0.9cm，共に茶褐色となり焼成はよい。いずれも中位の縄文が全面に施される。60は，黒褐色となり，浮隆線が3条横走し，以下に縄文を施す，1部の浮隆線上は浅い爪形文を施している。

○第5類土器（61）

61の1例のみである。A・Bトレンチの9区より出土し，器厚0.8cmで，暗褐色を呈する胴部破片である。縄文中期中葉の勝坂期の土器片で，浮隆線区画の内部に，細かな連続爪形文をめぐらし，特徴的な三叉陰刻文を施している。

○第6類土器（62）

62が含まれる。Aトレンチ28区出土で，黒褐色となり，器厚0.7cmである。縄文中期曽利式並行土器の胴部破片で，左へ斜めの刺突文が全面に施される。

○第7類土器（64）

64が本類である。Bトレンチ7区より出土し，暗褐色で器厚0.7cmの頸部辺の破片である。縄文中期後半の曽利3式相当土器で，隆起線による渦文や，直線が配され，縦方向に平行沈線を施文

している。

○第8類土器（65）

65が該当する。Aトレンチ28区出土で，茶褐色，器厚0.7cmである。縄文中期末の曽利5式に対比される土器で，連続綾杉文が器の全面に残される。

（大久保知己）

(2) Cトレンチ

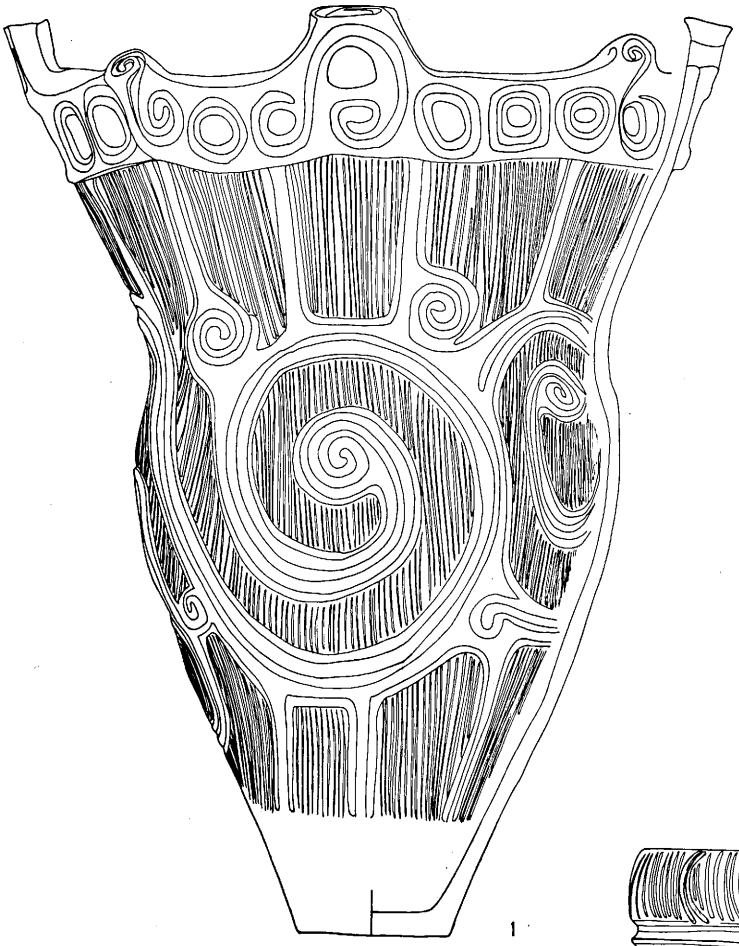
1）第3号住居址（第25図～29図）

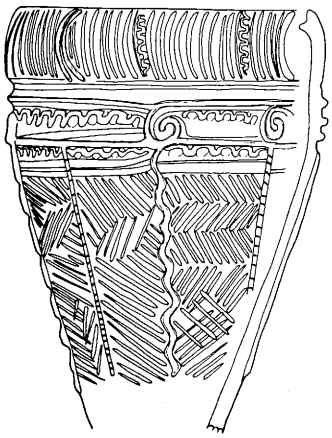
第3号住居址の土器は，下部のローム面までに上部で敷石住居址の散乱したような礫の散在があったり，黒色土層中に焼土が深さを違えて発見されているなど，遺構の重なりが推定されていたが，これを裏付けるように土器の出土も入りまじって，すっきりしない状態にあり，長時間かけて調査したい場所であった。

器形の判明する土器は第25図1・2の2点のみである。1は床面上から出土し，2は黒色土下層から出土した。

1は口径46cm，底径9.5cm，器高58cmで，口縁は内湾気味に開き，胴部中位が張り出す甕形を呈する。最大径は口縁部にあり，底部は非常に小さい。口唇部には橋状把手を4単位付し，この把手間に渦巻文による小突起を配している。口縁部文様帯は渦巻文が24単位つけられている。胴部文様は，口縁部文様帯から隆帯が垂下し，その末端が渦巻文に接合する。胴部中央には大きな渦巻文が描かれ，相互に隆線によって結合されている。地文は半截竹管状工具による平行状線文により埋められている。色調は胴上半から口縁部にかけて灰白色を呈し，胴下半部はススが付着し黒色をなしている。加熱使用が激しかったためか非常にもろい。

2は器形は口縁部が内湾する鉢形土器で，口径18.5cm，現在高26.5cm。底部を欠く。口縁部文様帯は沈線によって胴部文様帯と区分され，2条1対の隆帯がくの字状に4単位つけられ，その間に刺突による縦位の蛇行文が施文される。他の部分は沈線文によって埋められている。胴部文様は上部に隆帯による渦巻文を6単位配し，渦巻文の単位間は刺突による蛇行文と沈線が施文される。その下部は直線縦位の隆帯文と蛇行する隆帯文が交互に施され，その間に粗い横位の綾杉文がつけられ，下半部は乱れて斜行ないしは格子状の沈線文となっている。色調は灰白色で焼成は悪い。黒色土下層（－40）より出土。次に破片をみると第26図1～10までは黒色土層中の出土であるが縄文後期の土器が多いが8，9はやや古く9は口縁部近くで飾りがついている。11～17，20は2区～3区のトレンチを南に拡張した時－45cm付近に出土したもので，12，14，16，17，20は勝坂期の土器である。15，16は加曽利EII式の土器である。21，24，25は中期後半の新しい土器で，22，23は後半初め頃と見られる。第27図の土器も中期後半の土器が多く，19，23～27はやや古く中期中頃と思われる。23，24は同一の器体の土器とみられ，他にも小片が少しあるが接着はできない。21，22も他に同一の破片があるが接合はできぬ。中期中頃の土器か。第28図の1～9までは2～3区の





0

(1：2)

第25図　第3号住居址出土土器

(1：3)

第26図　第3号住居址出土土器

(1：3)

第27図　第3号住居址出土土器

(1：3)

第28図　第3号住居址出土土器

(1：3)

第29図　第3号住居址出土土器

−20～60 cmの土器で縄文後期の土器が多いと見られる。10は3号址床面直上に近い土器である。11, 12は縄文前期末の土器である。14～26の中に厚手の他の土器と少し違った15, 19, 20, 26があるが時期は中期後半と思われる。第29図の1～5は−50～60の出土で，5の無文の類は他にも若干あるが接合はできない。6～13は，−80～90 cm出土の土器で床面上出土となるが，埋甕の綾杉文をもつ加曽利EのII式の時期に平行する土器は目立つものがなく，上部からの混入も考えねばならない。　（小松　虔）

2）第4号住居址

第4号住居址上層（第30図）

4号址上層住居址覆土から出土したもので，各時期の土器片が混在して出土している。量的には余り多くない。

1は薄手の口縁部破片で，格子状に沈線文が施されている。焼きは良い。前期初頭の中越式に属するものであろう。2～12までは中期中葉に属するものである。2～6は山形口縁ないし波状口縁部の破片である。文様は2, 3, 6のように口縁頂部から刻目を有する隆帯が垂下し，その両側に方形ないし楕円形の区画文が施文される。4, 5も同様と考えられる。区画文内には縦位の沈線，刺突文，刻目文などが施されている。7, 9, 10は平縁口縁を有するものである。7は口唇部に波線が施され，口縁下に2条の沈線が横走する。9, 10は口縁部に蛇行する隆帯がめぐり，頸部以下には，9は刺突文が，10は隆帯を指頭で押圧しその中に刻みを入れた文様がまじっている。10は浅鉢形の土器

(1：3)

第30図　第4号住居址上層出土土器

で第33図-16に類似する。11，12は縄文施文の土器で，11はコップ形を呈する。12は口縁部に無文部をおき，その下に沈線を1条めぐらし，以下縄文が全面に施文されている。縄文は，粘土が堅くしまった後に施文したためか，あるいは施文後磨耗したものか，余り明瞭でない。第33図-12に類似した土器である。

13～22は中期後葉の土器である。13は隆帯によって方形の区画がなされ，その中は縄文によって充塡されている。14は口縁部に隆帯の渦巻文が配され，その末尾は2条の隆帯に結合している。そして空白部は斜行の沈線によって埋められている。16，17も隆帯の渦巻に沈線が組み合った文様の土器である。15は口縁部に沈線によって楕円区画が作られ，その内部が沈線で埋めている。18，19は隆線と沈線が施され，20は蛇行する沈線に細かい縦位の沈線文が施文されている。

4号址上層出土の土器は量的にみると13～22のような中期後葉，加曽利E期のものが主体を占めている。

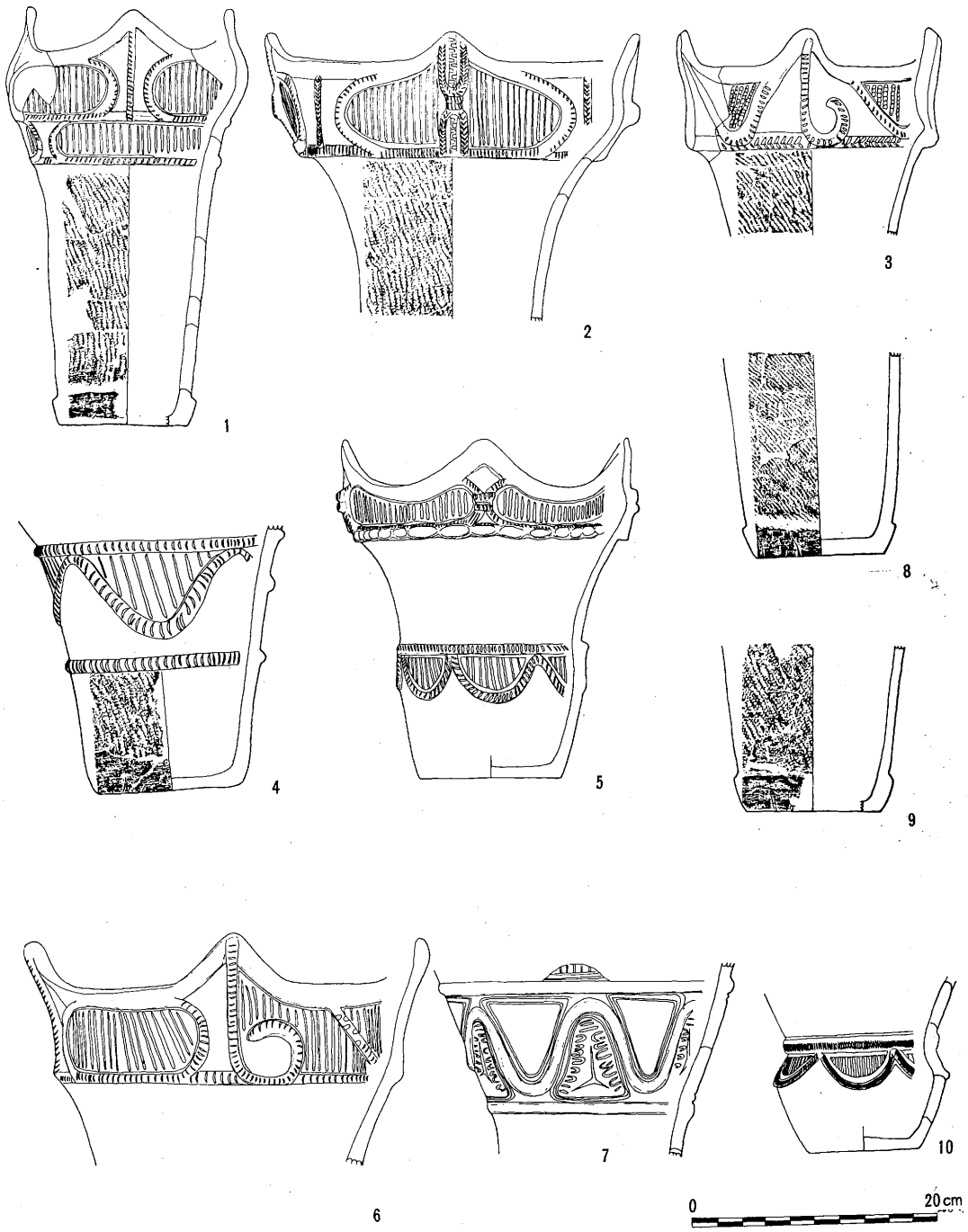
第4号住居址地下層（第31図～34図）

褐色土中に存在した住居址の下から4号址床面までの間に出土したもので，遺構の項でも触れたが，床面より10cm前後浮いて出土したものである。

1：口径19cm，底径10cm，器高34cmの深鉢形土器で，2対の山形口縁を有し，底部は屈折底をとる。頸部まで徐々にゆるく開き，口縁部はふっくらと開いて内湾している。文様は口縁から上胴部にかけて区画文がめぐり，それより下，屈折部まで縄文が施文されている。上胴部は2段の楕円区画文からなり，隆線の上には刻文が施されている。区画内は同一工具によって縦方向の平行沈線文によって充塡されている。この楕円区画文は上段4，下段は2ないし3あるものと思われ，上段の区画文間の空白部には山形口縁頂部から刻目を施した隆線が1本垂下している。色調は黒褐色を呈し，焼成は良い。

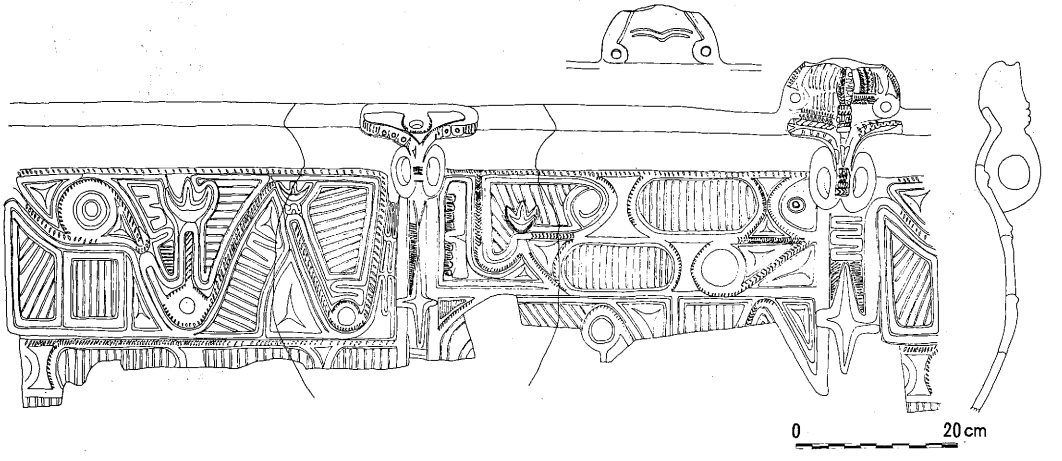
2：胴部下半を欠くが，器形は胴上部より大きく開き，口縁部付近でやや内湾し，2対の山形口縁を有する大形深鉢形土器である。文様は口縁部に集中する。頸部に隆帯が一巡し，胴部の縄文施文部と区分されている。口縁部文様帯は隆帯による大きな球根状の区画文，4単位により構成される。この区画文の中央には山形口縁の頂部から3本の隆線が真ん中で一度集約して垂下し，頸部の隆帯に接合している。両側の隆線上には刻目が，中央の隆線には交互の刺突文が施されている。区画内は縦位の沈線により埋められている。区画文と区画文との中間部分には刻目を有する隆線が1本垂下する。色調は黒褐色で焼成は良好。口縁の1部にススの付着が認められる。

3：住居址中央部から出土した破片と，そこより140cmほど北側に離れた場所から出土した破片が接合した土器である。胴部以下を失っているが，器形は4単位の山形口縁で，口頸部で一旦内湾した後，外に張り出し，以下は徐々に縮まり底部に至るようである。1と類似した形態であろう。文様は胴部との境に，刻文を有する隆帯を1条めぐらし，これに接するように口縁から三角区画状の隆帯を配している。この区画文の中間部分には山形口縁の頂部から隆帯を垂下させ，その末尾を渦巻状にくねらせている。ともに竹ベラによる斜めの刻みが施されている。三角区画文内は押引文



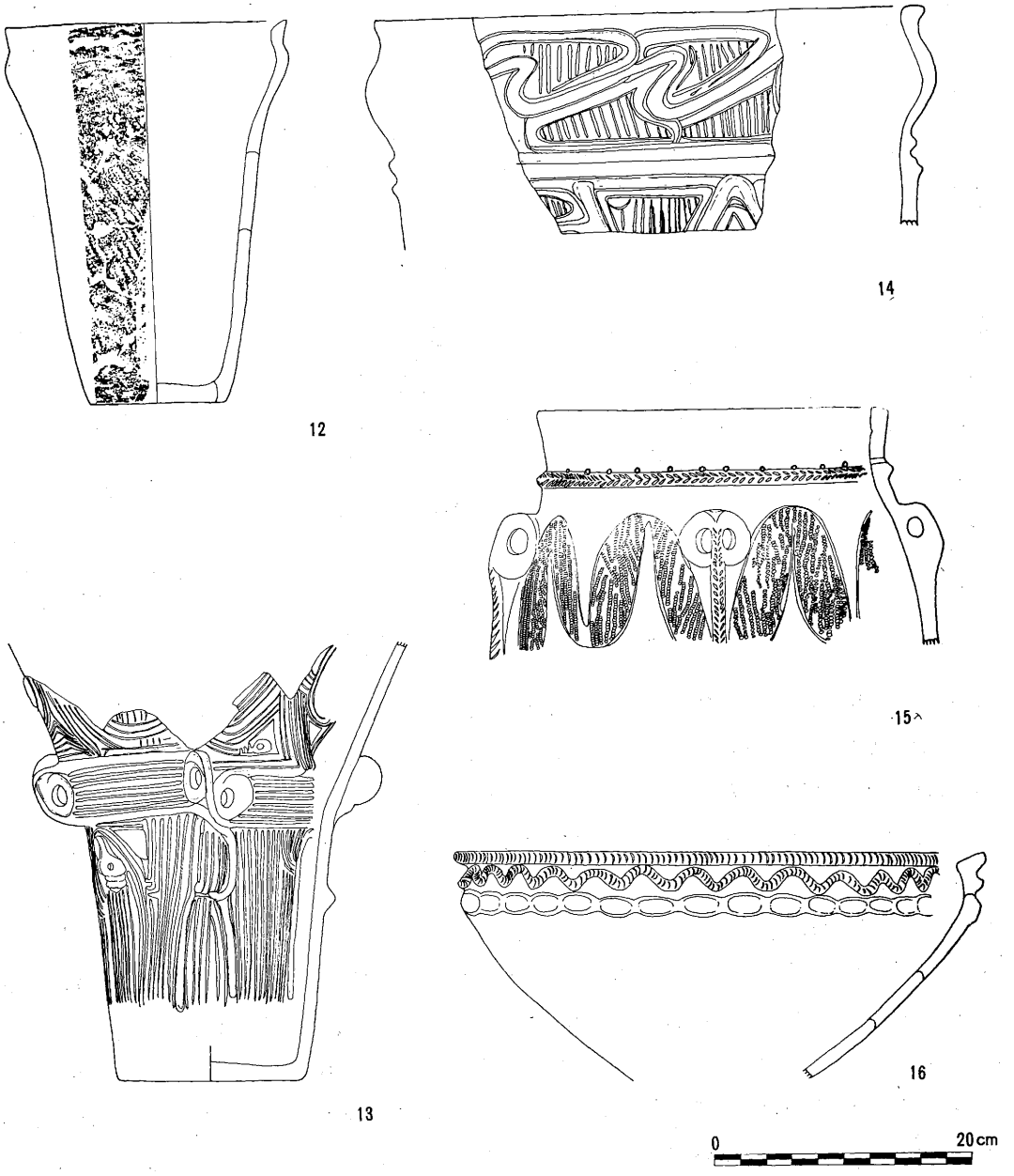
(1：3)

第31図　第4号住居址出土土器



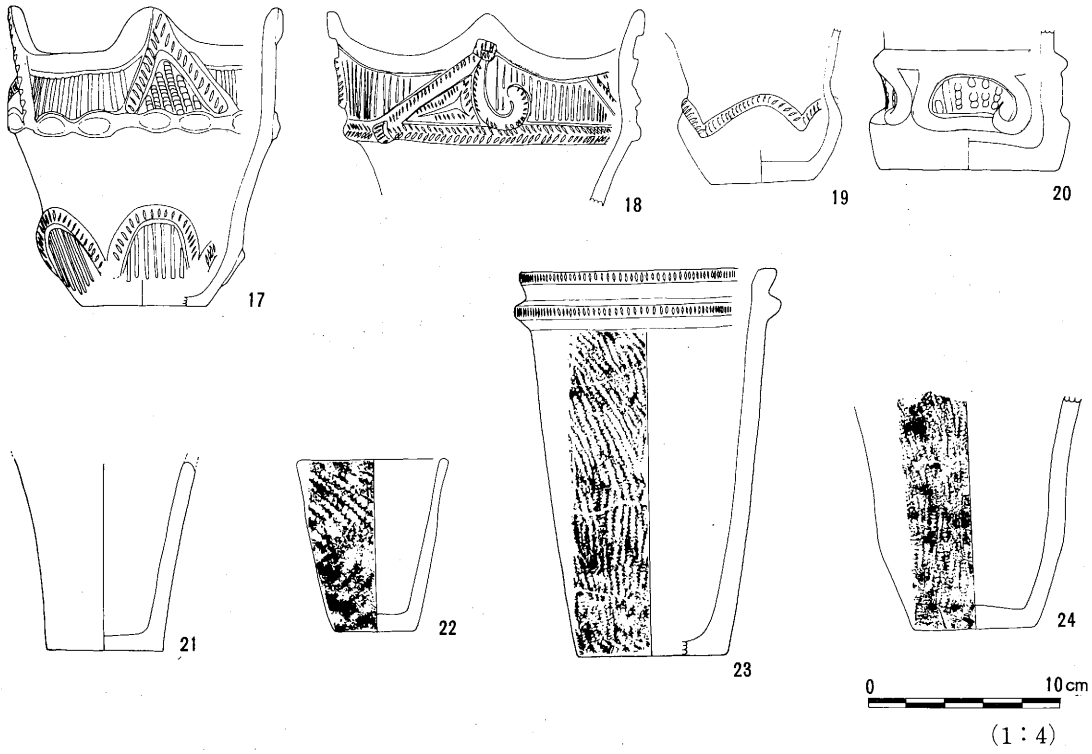
(1：3)

第32図　第4号住居址出土土器



(1：3)

第33図　第4号住居址出土土器



第34図　第4号住居址出土土器

により埋められている。胴部以下は縄文が施文され，暗褐色に焼きあげられた，堅い土器である。内面には口縁部を中心に焼けこげがかなりみられる。現在高17.5cm。

4：口縁部を欠く胴下半部の土器である。胴部に2本の隆帯が横走し，その間に隆帯によって三角区画文が作られている。区画内はやや斜行する平行沈線が描かれる。隆帯上には爪形文が施文されている。胴下部には縄文が施され，底部付近は無文となっている。茶褐色で焼成は良い。直径11.5，現在高21cm。

5：口径23.5，底径11.8，器形27.5cmの口縁が4単位の波状をなすずんぐりとした深鉢形土器である。胴部より外反し，口縁部でやや内湾気味となる。文様は，口縁部文様帯と胴部文様帯に分けられる。口縁部文様帯は，波状口縁の頂部下にX字状の隆帯をおき，胴部との境に粘土紐を指頭で圧痕した文様が横走し，この両者の文様によって楕円状の区画文4単位が作り出されている。隆帯および指頭圧痕文の上面には竹ベラによる刻文が印され，区画内は縦の沈線でうめられている。胴下半部の文様はいわゆる櫛形文が6単位めぐり，隆帯上には刻み目が，区画内は沈線が施文されている。焼成は良い。

6：口径33cm，4単位の山形口縁を有する大形深鉢形土器である。文様は口縁部に集中し，2単位の文様構成をとる。山形口縁頂部から隆線が垂下し，その末尾は渦巻文となる。この渦巻文に接するようにして1条の隆帯が頸部を1巡する。渦巻文の左右には楕円区画文と方形区画文がそれぞ

れ配され，楕円区画内には斜行する沈線が，また方形区画内には縦位の沈線が充塡されている。渦巻および頸部の隆帯上には連続爪形文が，方形区画文を作出する隆帯上には刺突文および爪形文が施されている。頸部以下はヘラによって丁寧に研磨されている。形態的には5と類似したものであると推定される。色調は赤褐色を呈し，焼成は非常に良い。

7：口縁部および底部を欠く深鉢形土器の胴部破片である。胴部文様帯は上下2本の隆帯が一巡して区画され，1本の隆帯と横位に蛇行させることによって三角区画文を作り出している。区画内は2条の沈線によって更に区画され，底部側の三角空白部は三叉文と半截竹管によるU字状文が施文されている。暗褐色を呈する。

8：大形深鉢形土器の胴下半部の破片である。胴部には全面に縄文が施文され，底部は屈折底となっている。色調は赤褐色を呈し，焼きは良い。底部から10cmほどから上部は全周囲にわたってススが付着し，黒色となっている。現在高16cm。

9：8同様深鉢形土器の胴下半部の破片である。胴部には全面に縄文を施文している。底部は屈折底となっている。黒褐色で焼成は良い。1～3に類似する土器の底部であろう。現在高14cm。

10：深鉢形土器の胴下半部である。胴下部には6単位の櫛形文が配され，隆線上には刻み目が施されている。破損部上端面にはススがこびりついている。色調は赤褐色を呈し，焼きの良い土器である。

11：口径31cm。口縁部はくの字状に内屈し，大きな顔面状把手が付けられている。胴部はゆったりとふくらみをもたせている。口縁部には無文帯をおき，顔面把手と思われる大きな突起がつけられて変化をつけている。文様は1対のミミズク把手を中心にして異なった文様構成をとっている。図正面のミミズク把手上部には，口縁部に隆帯による円文および竹管工具による円形刺突文・刻文がつけられ，右端の把手上部には，蛇体文を中心にして左に沈線文，右に各種の刺突文を施文している。この内側は眉と思われる沈線が2本描かれ，顔面把手の一種であることがわかる。耳にあたる部分は耳栓をはめこんだように円形を呈し，孔が貫通している。胴部文様は非常に複雑であるが，左側の部分は三角区画文を中心とし，右側は楕円区画文を中心として施文されており，それぞれの区画文間に同心円文，三叉文および勝坂式に応々みられる三本指で表象された人手が配されている。三角区画文内には斜行・横走する平行沈線が，楕円区画文内には縦位の平行沈線が充塡されている。胴部下半部は失われていてはっきりしないが，この三角区画文と楕円区画文がそれぞれ入れ変わって施文されているようである。赤褐色を呈し，焼成は非常に良い。

12：口径21.5，底径10.5，器高29.5の深鉢形土器で，口頸部で一旦すぼまるキャリパー形を呈する。文様は，口頸部のくびれ部分より上は無文で，これより底部まで全面に粗い縄文が施されている。赤褐色を呈する。内面胴下半部に炭化物の付着が顕著である。

13：赤褐色で胎土は細密，硬い焼成の土器である。器形は口縁部が大きく外反する鉢形土器である。文様は底部周辺に無文帯を有する他は器面一杯に施文する。頸部にミミズク把手を2対付し，それを横走する隆線文によってつなぎ，口縁部文様帯と胴部文様帯とに分けている。口縁部文様帯

は隆線を同心円状に描き，その空白部を円形文によって埋めている。胴部文様は，ミミズク把手より隆線による楕円文が2連垂下し，この文様の中間部にミミズク把手の退化した突起が付されている。その他の部分は隆線が縦位に配されている。

14：推定口径44cmの大きな鉢形土器の口縁部破片である。文様は口頸部を一巡する2条の隆帯によって分けられる。口縁部文様帯は隆帯によるくずれた渦巻文が大きく蛇行することによって，2段の三角区画文を作り出している。区画内は斜行ないし縦位の沈線によって埋められている。胴部文様帯はその1部しかうかがえないが，隆帯による三角形および楕円形の区画文が施文され，その内側には沈線文が充塡されているようである。黒褐色で焼成は良好。

15：有孔鍔付土器の破片で，形態は平滑の口唇部に直立する口縁がつづき，口縁下部に粘土紐を貼付けて凸帯状の鍔をめぐらし，この上部にほぼ2cm間隔に器内に貫通する小孔をあけている。鍔状凸帯上には稜杉状の刻み目がつけられている。胴部文様は2対のミミズク把手を配し，このミミズク把手から刻文のある隆帯を垂下させて器面を4つに分けている。この空間には沈線によって縁どりされた楕円形の擦り消し縄文が4連蛇行して施文されている。赤褐色に焼きあげられた器壁は緻密で堅い。

16：器形は口縁部が内湾して立ち上がり，平縁の浅鉢形土器である。底部を欠く。文様は口縁部に集中し，3条の隆帯文が横走している。口唇部には隆帯上に連続爪形文が施され，2段目には蛇行する隆帯にやはり連続爪形文が印されている。3番目は粘土帯を指頭で圧痕した連鎖状隆線がめぐっている。色調は淡褐色で，非常にもろい。口径41cm。

17：口径14.5，底径6.5，器高16cmの鉢形土器である。器形は2対の山形口縁を付し，底部から徐々に開き，口縁部になり直立する。文様は口頸部と胴下半部とに集中している。口縁部文様帯は胴部との境に粘土紐を指頭で押圧した文様が横走し，この文様に山形口縁頂部から2本の隆帯が斜めに下り接合し，三角と方形の区画を作り出している。三画区画内には半截竹管による押引文がやや斜めにつけられ，方形の区画内には沈線文が施文されている。胴下半の文様帯は，刻み目のある隆帯がめぐり，その内側は平行沈線によってうめられている。ちょうど櫛形文の逆の文様である。色調は茶褐色で焼きは良い。

18：4単位の波状口縁をなす小形鉢形土器の頸部である。文様は口頸部に刻文を有する隆帯が横走し，無文部の胴部と区画される。波状口縁頂部下に粘土粒を貼付けて突起とし，それより隆帯による渦巻文が下がり，左斜めにも隆帯が走り三角区画部を作り出している。三角区画内には三叉文と刺突文が施文され，他の区画内は縦の沈線文が充塡されている。茶褐色を呈し，焼成は極めて良い。

19：7号住居址との重複部分から出土したもので，一応4号址に含めて記述するが，その帰属は明確ではない。胴部がくびれた小形鉢形土器で，胴部のくびれ部に波状を呈した隆線が1条施されている。隆線上には刻み目がみられる。黒褐色を呈し，堅く焼かれ，製作は非常に良い。

20：小形鉢形土器の底部である。文様は屈折部より上にあり，隆帯による楕円区画文が4単位配

されている。楕円区画文を構成する隆帯は右端で粘土紐をくねらせて逆「の」字形にしている。区画内は沈線および刺突文で埋められている。赤褐色を呈し，焼きは堅い。内面には全面にかなり厚く炭化物が付着している。

21：底径6cmの小形鉢形の底部で，文様はなく整形のためのヘラ削りの痕が残されている。上端の割れ口は研磨されたようになっており，あるいは破損後，再生して使用したのかもしれない。

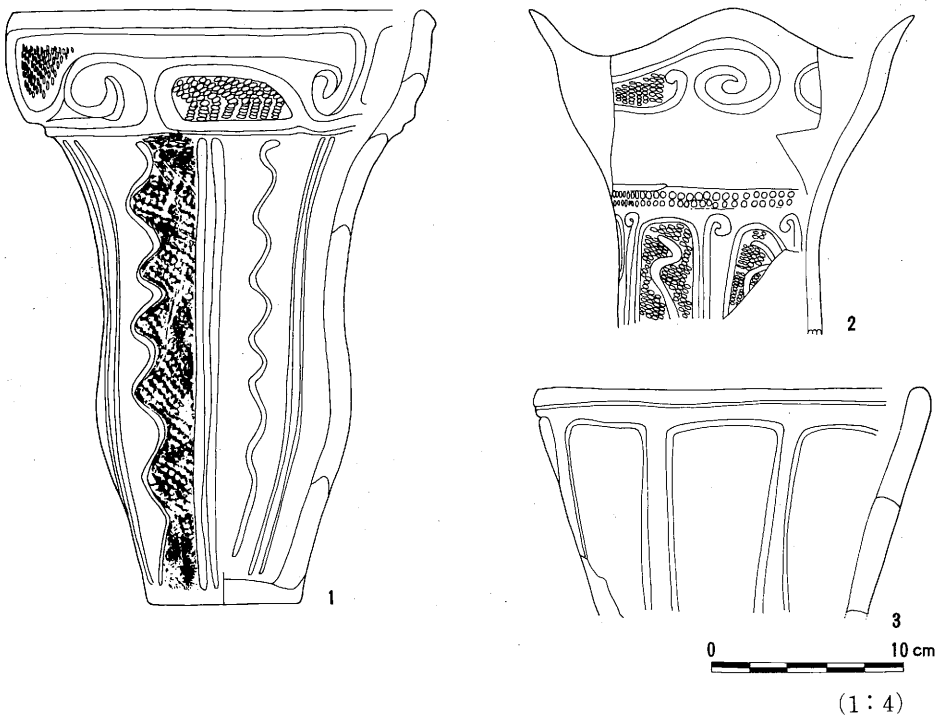
22：口径8cm，器高9cmを計るコップ形土器である。口縁から胴上半部にかけて縄文が施文される。黒褐色で焼成は余り良くない。表面の1部にススがみられる。

23：東壁上および1mほど離れた床面上から出土したものが接合したもので，口径13.5，器高20.4cmの小形鉢形土器である。口縁は平縁で，文様帯は口縁部に集約している。口縁に2条の隆帯がめぐり，隆帯上には竹管による刻み目が施されている。胴部以下は全面に縄文が施文されている。黒褐色を呈する。

24：小形鉢形の底部で，全面に縄文が施文されている。底径6.5，現在高12.5cm。黒褐色を呈する。

（小林康男）

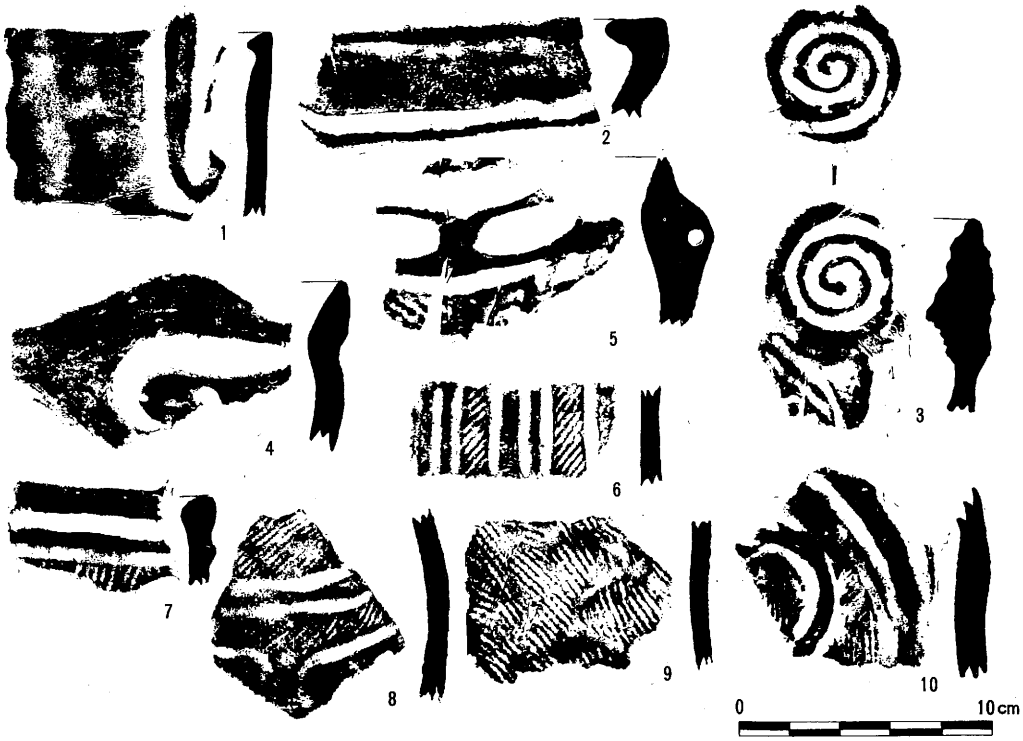
3）第5号住居址（第35～39図）



第35図　第5号住居址出土土器

(1：3)

第36図　第5号住居址黒色土層，褐色土層出土土器



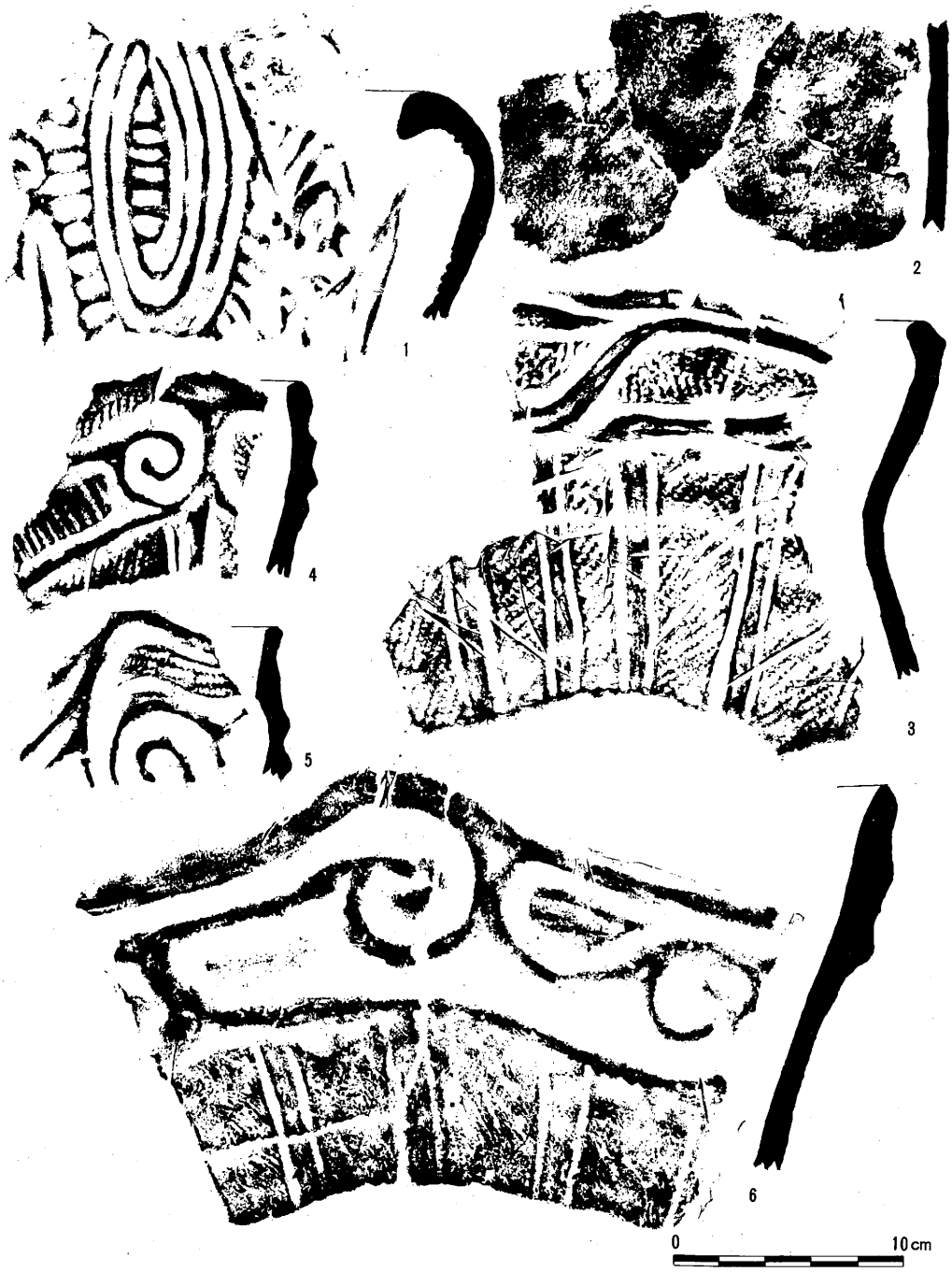
(1：3)

第37図　第5号住居址褐色土層出土土器

上部の黒色土層中の土器は第36図1～10までがそれで，縄文中期末の土器で厚手である。10は底部であり，高台をなす一部である。11～15は黒色土層の下，褐色土上面の土器である。黒色土層内の土器とあまり変化は見られぬ。第37図は褐色土層内に入ってからの土器であるが上部の土器に比してあまり変化はないが口縁部の飾りがやや目立つ。3，5がそれにあたる。第35図23も褐色土層内の出土である。深鉢形の口縁部破片である。口縁には横位の沈線を1本めぐらし，冂状の沈線を胴下半まで垂下させている。外面は黒色，内面は茶褐色を呈し，焼成は余り良くない。推定口径21cm。

2は胴部から外反する器形で大きな波状口縁である。文様は口頸部に無文部を置き口縁部には沈線の渦巻文が施文され，その末尾は楕円区画文の一部を構成している。胴上部には円形の刺突文を2段めぐらし，その下部より蕨手文を配し，中間に冂状の沈線文とその中に蛇行する懸垂文を施し，空白部は縄文により埋められている。

第38図は褐色土中の下部になる土器もあるが，1などは古式の加曽利Eの口縁の残りであると見られる。破片も大きくなり，口縁の波状も目立つが縄文中期の後半の土器であろう。第39図の1～3は立石の下の土器である。下の床面上の土器と類似している。4～26は5号址の床面上の土器である。4～10などは古い文様を持っており，10以下の土器とは合わぬ感もするが，この住居址の特性か，5号址の廃滅後の埋土の中に混入していた土器かも知れない。第35図-1は埋甕として設



(1：3)

第38図　第5号住居址出土土器

(1：3)

第39図　第5号住居址出土土器（1～3,：立石下部，4～28：床面直上）

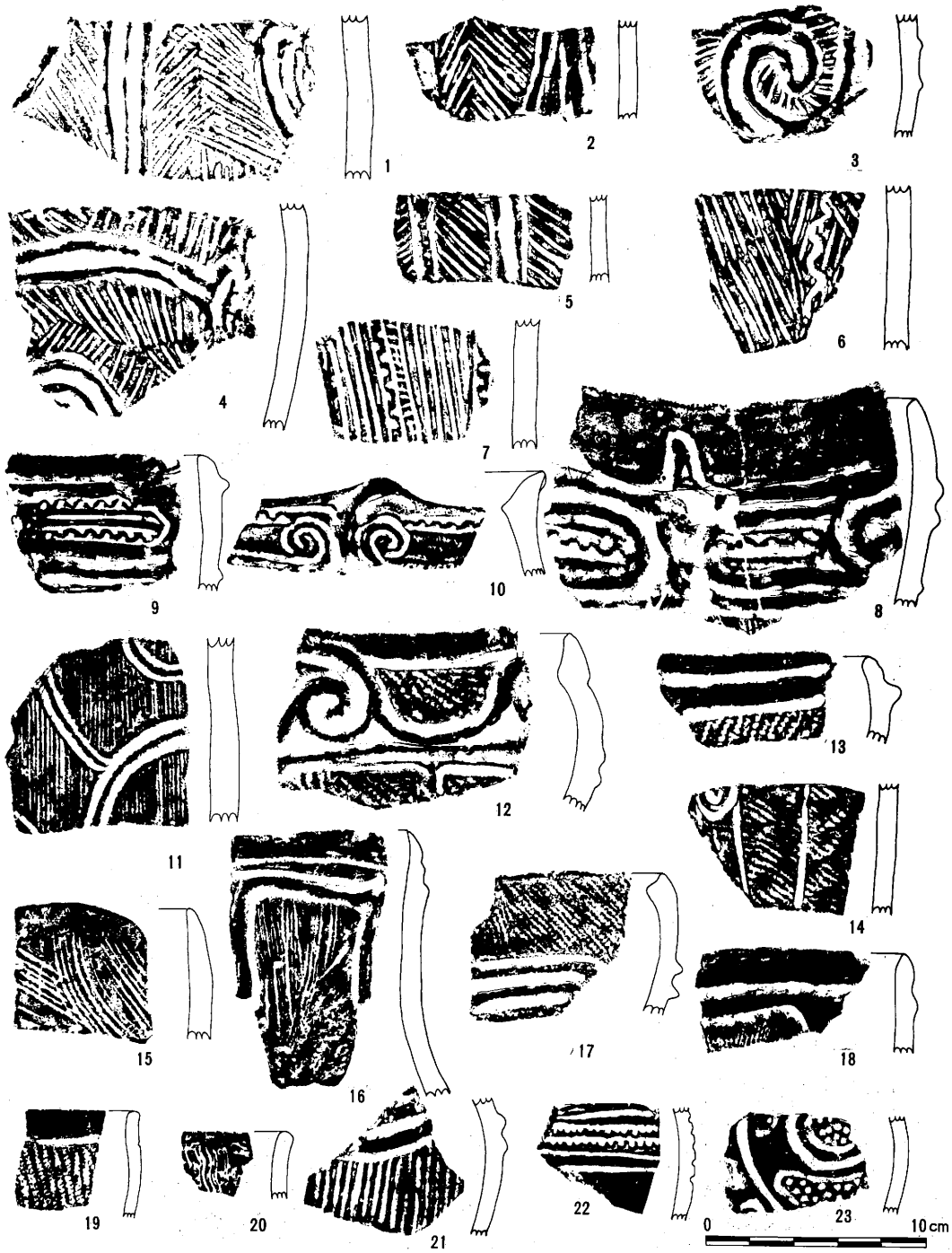
置されていた土器で，口径22.2，底径8，器高31.3cmのキャリパー形の退化した深鉢形土器である。口縁部には隆帯による渦巻文を6単位配し，渦巻文の単位間は隆帯によって楕円状に区画される。区画内にはRLの縄文が施文されている。胴部も同様の縄文を地文とし，縦位の沈線と蛇行する沈線とを施文している。色調は黒褐色を呈し，外面胴部上半部全面にススの付着が認められる。

5号址の土器は完形のものは埋甕のみであるが，埋甕よりする時縄文中期後半になり加曽利E II式や大木II式に類似した口縁部をみ，住居址の時期もこの時期となる。

（小松　虔）

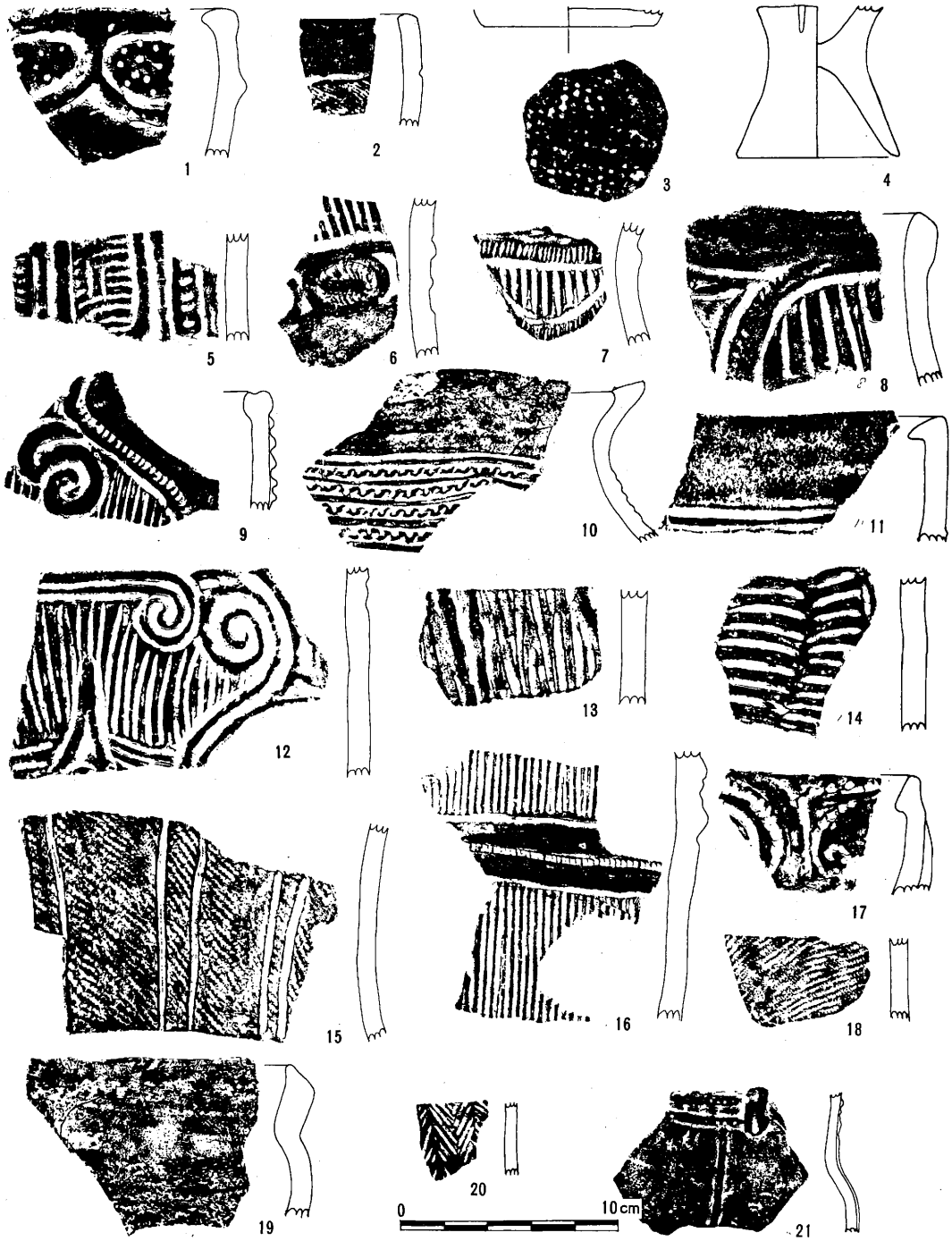
4）第6号住居址（第40図，第41図1～4）

ここで述べるものは全て覆土出土のものである。1，2は直線・曲線的な隆帯を垂下させ，隆帯間に綾杉状及び斜めの沈線を施している。焼成は良好である。3は渦巻状の隆帯と沈線の構成である。4は曲線的な隆帯と綾杉状の沈線の構成である。5は焼成良好。6は斜の途切れ途切れの沈線を綾杉状に配し，その上に垂下する波状の沈線を施している。胎土に少量の砂を含む。7は直線的な平行沈線を縦に施し，中央の沈線に交互刺突と横位の刻目をつけている。焼成は良好。1～7の色調は1が黄褐色で，2～7は赤褐色である。8は焼成良好な口縁部である。5cmの無文帯の下に隆帯の構成を持ち，口縁内面には一段の凸帯を巡らしている。無文帯には隆帯より上る形の逆「V」字形の沈線を施している。無文帯の下は横走する隆帯を配し，隆帯間に隆帯によって横位の楕円区画を作ったり，縄目状の隆帯を貼りつけている。楕円区画内には，ほぼ中央に隆帯を配し，その上に交互刺突を施している。隆帯の下は縦の沈線を施している。9も焼成良好な口縁部である。8と同様な区画内に五本の平行沈線を横走させ，上から一段目と四段目の盛り上がりの横走する部分に交互刺突を施している。色調は茶褐色を呈する。10は渦巻状沈線と刺突による文様構成で，口唇は「冂」状を呈し，内側に一段の凸帯を持つ。11は垂下する細かな平行沈線とやや太目の二本の曲線的な平行沈線の構成である。焼成は不良，色調は赤褐色で胎土に多量の砂を含む。12の外面は火熱を受けたためかボロボロしている。渦巻状と横位の隆帯とで口縁を区画し，区画内に縄文を施している。区画下は「冂」状沈線を配し，中に縄文を施している。口縁内面には一段の凸帯を巡らし，横位の整形痕が認められる。胎土にやや大粒の石を含み，外面にスス状の炭化物の付着がある。13は焼成良好な口縁部。口縁に沿った二本の沈線とその間に隆帯を配し，沈線下に縄文を施している。14は渦巻状と垂下する沈線及び縄文の文様構成である。15は焼成良好で，口唇がやや尖っている。数条ずつの平行沈線を斜めに曲線的に施している。内外面にスス状の炭化物が付着している。16はやや小型の土器口縁である。口縁に沿って二本の平行沈線を施し，その下に隆帯による「冂」状の区画を作り，区画内に数条ずつの平行沈線を縦と斜めに施している。胎土に砂を多量に含む。内面に整形時の擦痕が見られる。17は口縁部に縄文を施し，その下に横走する二本の平行隆帯を巡らしている。焼成は不良。胎土に石英砂及び雲母を含む。18は焼成が極めて良好な口縁である。口唇下2cmに太めの沈線と横走する曲線的な隆帯を配し，その下に細平行沈線をやや斜めに施してい



(1：3)

第40図　第6号住居址出土土器



(1：3)

第41図　第6号・第10号住居址出土土器（1～4：6号，5～21：10号）

る。19は小型の土器になろう。口縁部がやや「く」字状になり，1.5cmほどの無文帯を残し，その下の単節縄文帯とは横走する一本の沈線でくぎられている。器厚は4mmを計る。焼成はやや不良。20は口唇が「冂」状でやや肥厚し，口縁部に若干の間をおいて波状の平行沈線を垂下させている。21は隆帯と爪形文及び竹管による縦の沈線から構成される。22は焼成良好。五本の平行沈線を横に巡らし，2・3本目の沈線に下方よりの刺突列点が施している。外面を少し研磨し，内面に横位の整形を加えている。23は曲線的な沈線で区画し，区画内に円形刺突を施している。第41図1は口縁部が内側に張り出し，口唇より横に楕円隆帯区画を配し，区画内に第41図23と同様な円形刺突を施している。以下は無文帯で外面全体にスス状の炭化物を見る。第41図2は第40図20と同様な口唇形状を示す。無文帯を残し，1本の沈線を巡らした以下に細斜縄文を施している。焼成は良好。第41図3は網代底で，磨滅が激しい。焼成は不良。第41図4は底部高台残部であり，高さ7cmを計る。焼成は良好，色調は黄褐色，胎土に砂粒を多量に含む。施文は垂下した沈線の残部が認められるだけである。

以上であるが時期的には縄文中期後葉から後期初頭までのものを含んでいた。　（浅輪俊行）

5）第7号住居址（第42図）

（1：3）

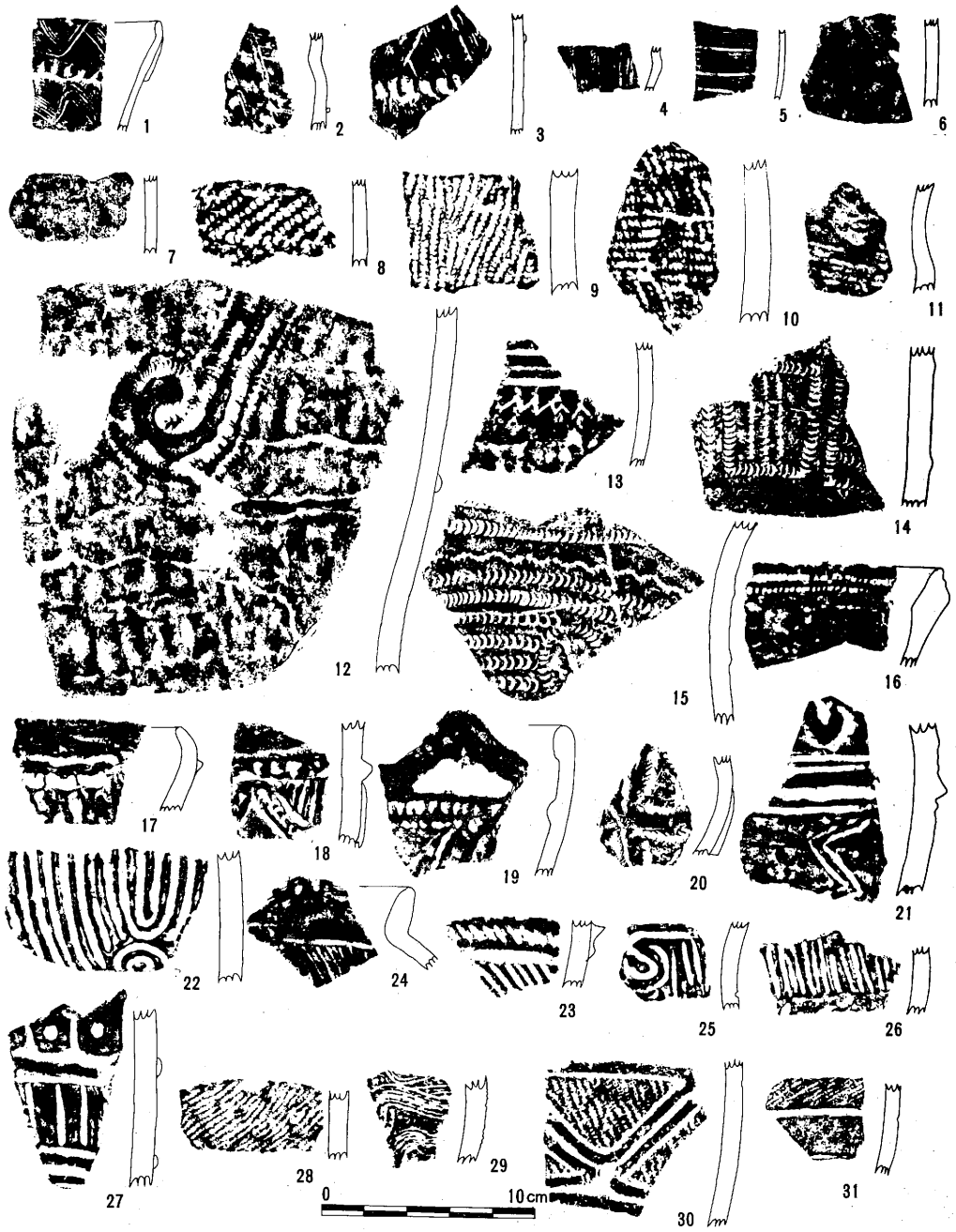
第42図　第7号住居址出土土器

この住居址は一部しか発掘されておらず，従って土器も少なく，住居址の時期まで決めるには資料不足であるが，得られた土器よりみる時縄文中期後半となり，土器も懸垂文の渦巻が崩れており，磨り消し縄文があるなど中期としては時期が下がる。

（小松　虔）

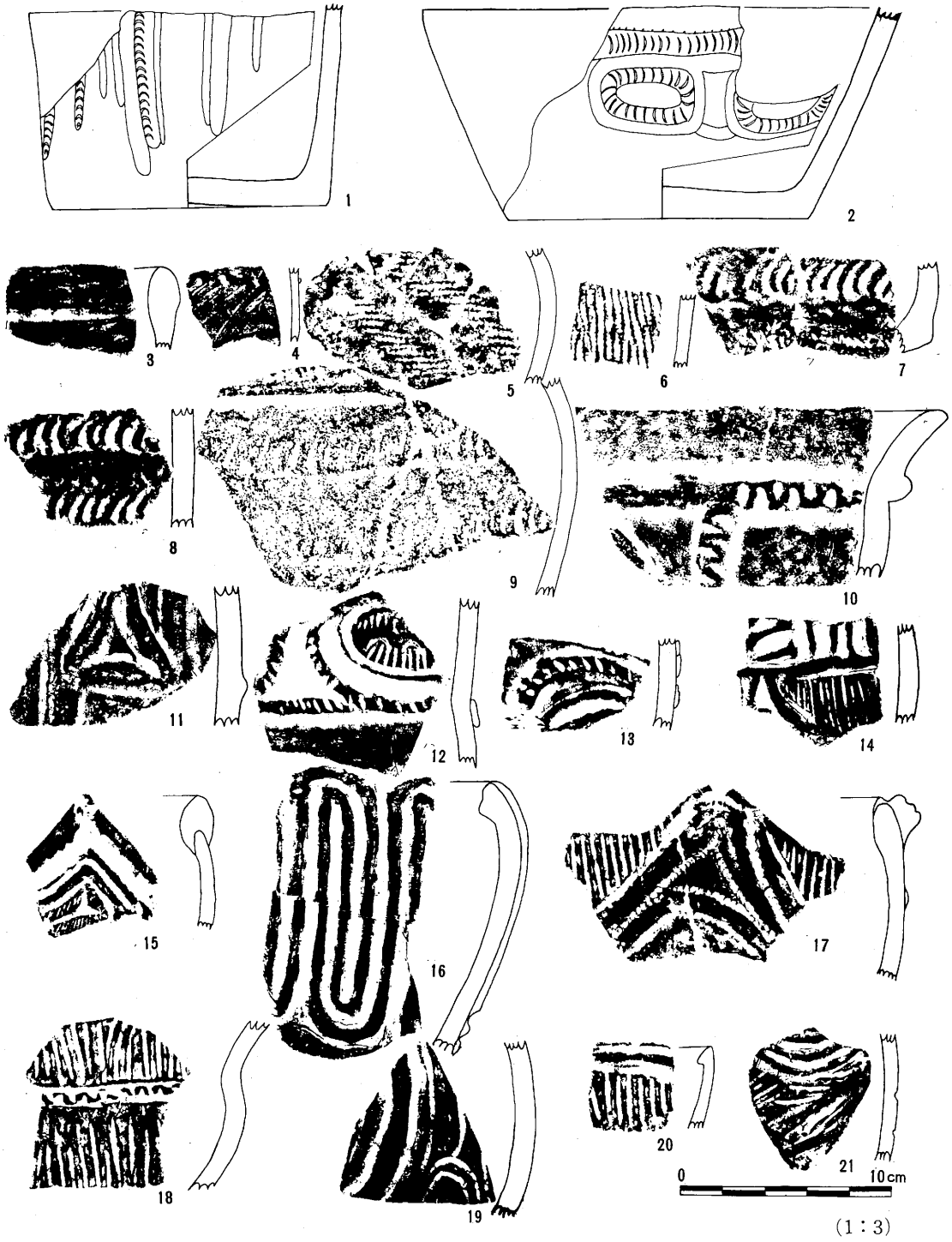
6）第8号住居址（第43図，第44図1～3）

1～7までは器厚3.5～5.5mmを計る薄手土器で色調は黒灰色である。1はほぼ中央に整形時の盛り上がりを残し，刻目のついた圧痕を巡らし，上下に数条の波形平行沈線を施し，焼成は不良である。2は明瞭ではないが下部に刺突を施し，上部に数条の擦痕を斜めに施し，焼成は良好，胎土には少量の石英砂を含む。3は1の施文と同じであるが胎土，焼成は2と同様である。4，5は斜め擦痕を全面に施し，焼成は良好で5はこの1～7の中で最も薄い3.5mmである。6，7は無文であるが斜めの整形痕が見られ，共に焼成は良好で，6はこの1～7の中で最厚で5.5mmを計る。8，9は繊維土器であり，8は口縁部から下方に羽状縄文を全面に施し，9は斜縄文を施す。焼成は共に良好で，器厚も1.3cmと変わらない。10は無節の縄文を施し，焼成はやや悪く両面褐色で，少量の砂粒を含む。11は単節斜縄文を施し暗褐色を呈し焼成は良好で，胎土に砂粒を含む。12は「J」字状隆帯に沿って二列の爪形文を配しているが，爪形文は内側は外側に比較して長い。内面に整形時の縦位指痕が見られ，固く焼き締まり，内外面共に暗褐色を呈し，雲母，石英を含み器厚は1cmを計る。13は破片中央部に連続山形文を配し，上部に3本の平行沈線を施してある以外は全て12と同一であるが，内面にスス状の岩化物の付着が見られる。14，15は同一器形と思われるもので，14は下部に1cmの無文帯を残して横位隆帯を施し，左右に連続爪形文を配し，中央部に連続刺突を施しているが，焼成はやや不良で，多量の砂粒を含み，赤褐色である。なおこの14，15の土器は後述の第44図2と同類である。なお15の中央部に連続刺突を波形に施してある。器厚は共に1cmを計る。16は口縁上部に二列の小形連続爪形を施し，下部は無文で，焼成は極めて良好で，赤褐色を呈し器厚は9mmで胎土に多量の雲母，石英を含む。時期的には14，15と同時期と思われる。17はやや内湾する口縁に中央の隆帯にそって「まがむ」模様の連続刺突を施し，内面に横位の整形痕が見られ，焼成は良好で，暗灰色を呈す。器厚は9.5mmで胎土に砂粒を含む。18は「V」字状と横位の隆帯に連続爪形を施しその間に竹管による沈線を縦に配し，灰褐色で，焼成は良好である。19は山形口縁で，内側に隆帯を持ち，斜めの隆帯に沿って連続爪形文を施してある。焼成は良好で，褐色を呈し，雲母，石英を含む。20は十字の隆帯間に連続山形刺突を施す。外面にスス状の炭化物が付着している。21は垂下する隆帯に曲線隆帯を配し，内部に山形平行沈線を施してある。焼成は良好で，色調は褐色，胎土に砂粒を含む。22はやや太めの沈線を曲線的に配してある。焼成は良好で，色調は暗灰色で胎土に雲母，石英を含む。23は口唇に波状隆帯を施し，口縁は「く」の字形で先端にゆくほど細くなっている。中央部に横位の沈線を配し，斜平行沈線を施し灰褐色で焼成は良好で内面に横位の整形痕が見られる。24は2本の横位隆帯間に斜平行沈線を施してある。焼



(1：3)

第43図　第8号住居址出土土器



第44図　第8号住居址，第2号ピット群出土土器
（1～3：8号，4～21：2号ピット群）

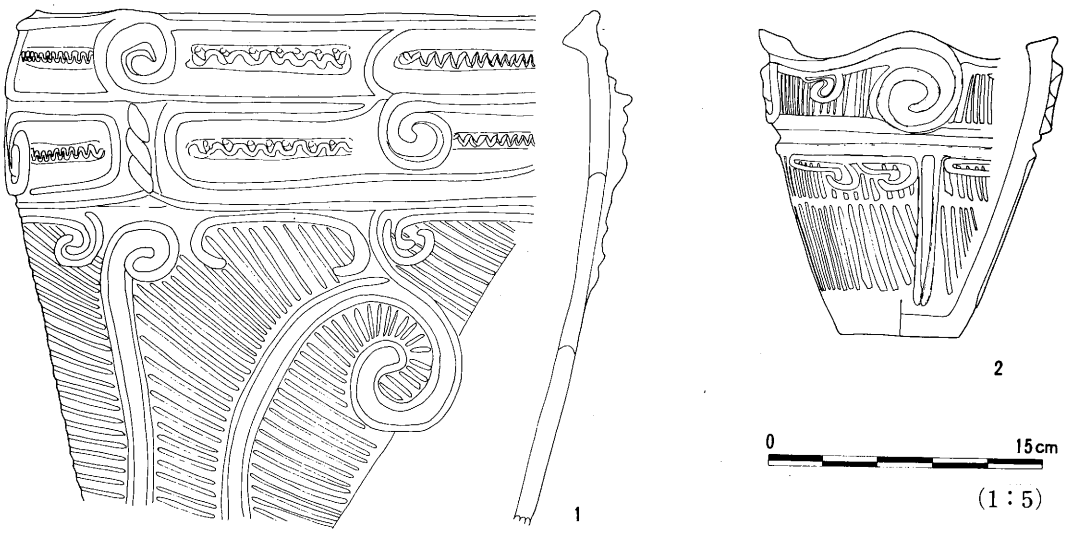
成良好，色調は褐色である。25は渦巻と縦，横沈線を施し，焼成は良好。26は縦に平行沈線を施してあり，黒褐色を呈し，焼成は良好，内面に横位の整形痕が見られる。27は横位の隆帯と縦，横の沈線を施し，やや太めの刺突を施し，やや薄い黒褐色で，胎土は多量の砂粒を含み焼成は良好である。29は数条の平行沈線を垂下させてある。焼成は良好で灰褐色である。28は細斜縄文を施し，焼成は良好で色調は褐色，内面に横位整形痕が見られる。30は「V」字形の沈線に横位隆帯を配し，中央部に斜縄文を施す。焼成は良好，色調は褐色である。31は2本の横位沈線を配し上部に細斜縄文を施し，下部は無文である。焼成は良好で，色調は暗灰色である。第44図3は口縁の内外面を肥厚させ，1.5cm下方に横位沈線を施し，研磨してある。焼成は極めて良好。色調は褐色で，内面に横位整形痕が見られる。第44図1は径13cmの底部破片で，垂下した太めの隆帯にそって連続爪形文と数条の太めの垂下沈線を施している。底部からほぼ垂直に立ち上がる器型で，内面にスス状の炭化物が付着し，外面はボロボロになっている。色調は赤褐色で，胎土に雲母，石英を含む。第44図2は径14cmの底部破片で，本址の床面より出土した。底部より4cmの無文帯を残し，その上に2本の横位隆帯を巡らし，横位隆帯間に縦の隆帯で横位の楕円形の区画を作り，やや太めの連続爪形を区画に沿って巡らし，上部隆帯には縦連続爪形と刺突を施してある。底部よりなだらかに立ち上がる器型で，焼成は良好，色調は赤褐色で，胎土に雲母，石英を含む。

（三村　肇・山越正義）

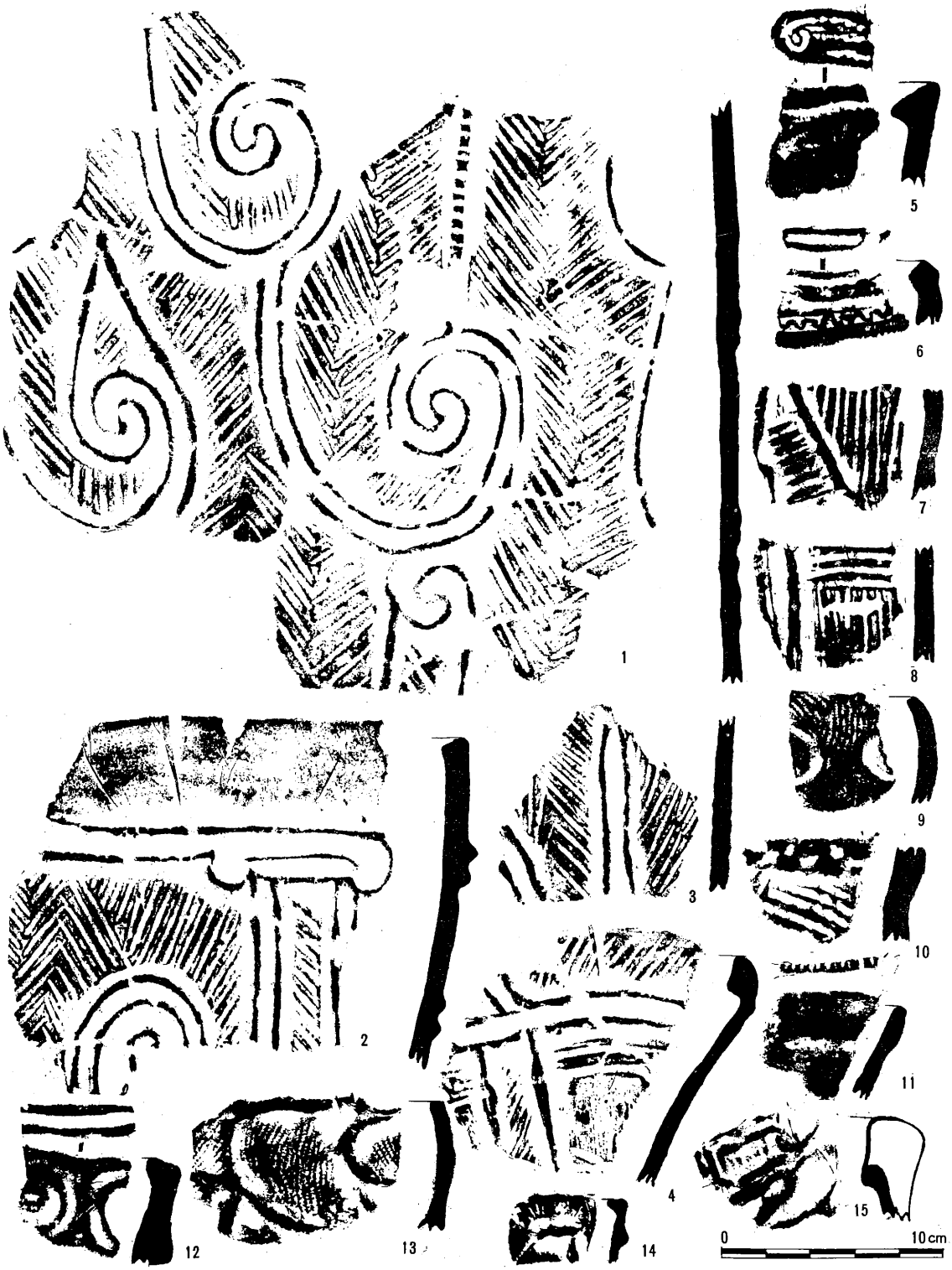
7）第9号住居址（第45～47図）

この住居址の土器は3区間にまたがり，全部が9号住居址の土器と見られぬ点もあるが，一応処理されたままについて述べる。

第45図2は黒色土の出土で，口径16.5，底径6.5，器高16.5の小形鉢形土器で，4単位の波状口縁を付し，口縁部がやや内湾した形態をとる。文様は波状口縁の山の部分の下に隆帯による渦巻



第45図　第9号住居址出土土器



(1：3)

第46図　第9号住居址出土土器

第47図　第9号住居址出土土器

文を配し，これに接するようにして口頸部に2条の隆帯が横走し，四角の区画文を作っている。区画文内は沈線による渦巻文と縦位の沈線文によって埋められている。胴部文様は，隆帯渦巻文の下

から2条の隆帯による懸垂文がつけられ，横走する隆帯文の下には沈線による渦巻文が施文される。さらに懸垂文間には2段の沈線文が若干斜めに施されている。色調は明るい茶褐色で，焼きは良い。

第45図1は褐色土中から出土したもので，器形は単純な甕形を呈する。口縁部に2段の横帯文をめぐらしている。隆帯による渦巻および楕円区画文が半単位づつずらせて配され，区画内は交互刺突文による蛇行状文が1条横走する。胴部には渦巻およびそのくずれた蕨手状文がつけられ，各文様間は斜行の沈線によって充塡されている。茶褐色で焼きは良い。口径32cm。胴下半部を欠いている。第46図の1，2は12区の上部褐色土層中の出土であり，加曽利E式の文様もまだ崩れておらず古い方に属する土器片である。3～15は11区の褐色土層中の出土で，1，2よりはやや時期が下る土器が多い。第47図の1～6も同じ地層内になるものであるが，3，6等は綾杉文に渦巻文のある土器よりは時期は下ると考えられる。7・8は10区の褐色土中の出土である。9～12は10区の床面の出土であり，9号址の本命の土器である加曽利E式の古い方になり，9号住居址の年代もこの時になる。遺構は全部が掘られていないが，土器もこの種のもので占める感じがする。

（小松　虔）

8）第10号住居址（第41図5～21）

ここで述べるものは全て覆土出土である。5は垂下する刻目をつけた太めの隆帯を配し，隆帯間に横位の沈線を施している。6は底部に近い部位のものである。胎土に雲母片を含む。7は櫛形文と連続刻目を施している。焼成・色調は6と同様に良好で明褐色を呈す。8は口縁がやや外反して，刻目を持つ隆帯と沈線で施文される。内面上部にスス状の炭化物の帯が認められる。9は竹管による垂下する沈線を施した上に「S」字状と斜めの隆帯を貼りつけている。斜めの隆帯には口縁寄りに爪形文を施している。10は焼成良好で口縁が「く」字状を呈する。色調はチョコレート色で，胎土に細砂を含む。口縁に無文帯を残しその下に平行沈線を巡らし，1つおきに交互刺突を連続させている。口縁内面には一段の凸帯を巡らし，横位の整形を加えている。11は10と同様な器形を示す。器厚は若干厚いものである。10と同時期のものであろうか。12は焼成良好。13は隆帯を垂下させ，隆帯間に擦痕様の沈線を垂下させている。14は肋骨状（綾杉状）の沈線を施している。15は胎土に砂を含む。16は横に2本の隆帯を巡らし，隆帯間に爪形文を施している。隆帯の上下には竹管による縦の平行沈線を施している。焼成は良好。17は渦巻状の隆帯と横走する隆帯とに区画された中に渦巻状の沈線を施し，沈線の上に刺突列点を加えている。焼成は良好で，内面に一段の凸帯を巡らしている。内面にはスス状のものが一部に認められる。18は細斜縄文を施している。焼成は良好，胎土に砂を含む。19は口縁部がやや「く」字状を呈し，口唇は内側に迫り出している，無文の土器である。内外面に横位の整形痕がみられる。20は焼成極めて良好。綾杉状の沈線を繰返している。器厚は5mmを計る。内外面に炭化物の付着を見る。21は細隆帯を横位に2本巡らし，下側の隆帯から1本隆帯を垂下させている。これらの隆帯には刺突列点が施されている。またこれらの隆帯にかけて「8」字状の粘土帯を貼りつけている。焼成は良く，外面に炭化物の付着をみる。

以上であるが，様相は縄文中期中葉より後期初頭を示している。

（浅輪俊行）

9）第5号集石（第48図1～20）

ここで述べるものは集石中及び直上より出土したものである。1は細斜縄文を全面に施している。焼成は不良で，内面は胎土に含む砂の為か横位の整形痕が見られる。2は1本の横位の隆帯を巡らして，その下に3本の沈線を施している。1・2本目の沈線には交互刺突を繰り返している。以下は曲線的な隆帯及び斜めと縦の沈線とで構成している。焼成不良。3は単節の斜縄文を施している。焼成良好。4は縦位の平行沈線を施している。

5は曲線的な隆帯を配し，隆帯以外を曲線的な沈線で埋めている。6は横位の隆帯と沈線で構成される。口縁内面に一段の凸帯が巡っている。7は太めの2本の平行沈線を口縁に沿って巡らして，沈線間に斜縄文を施している。8は口縁がやや迫り出しているもので焼成は良好。9は8と同様な文様構成であるが，隆帯の集まった所に深い刺突孔を1つ施している。焼成良好。10は9と同一個体を成すものと思われる。隆帯間の縄文の上に逆「U」字状の沈線を施している。11は口縁が内湾し，口縁上部に縄文を施し，その上に口縁に沿った2本の沈線を巡らしている。以下は細斜縄文を施し，その上に「蕨手」状の沈線を垂下させている。焼成は良好，内面に横位の整形痕を見る。12は口縁が外側に肥厚し内面に一段の凸帯を巡らしている。13は波状の隆帯が特徴である。14は爪形文を横に連続させている。15は数条ずつの平行沈線をやや斜めに施している。外面下部に炭化物の付着を見，胎土に砂を多量に含む。16は焼成良好である。17は口唇部が「冂」状を呈し，口縁は無文帯を残し1本の横位の沈線を巡らし以下に細斜縄文を施している。

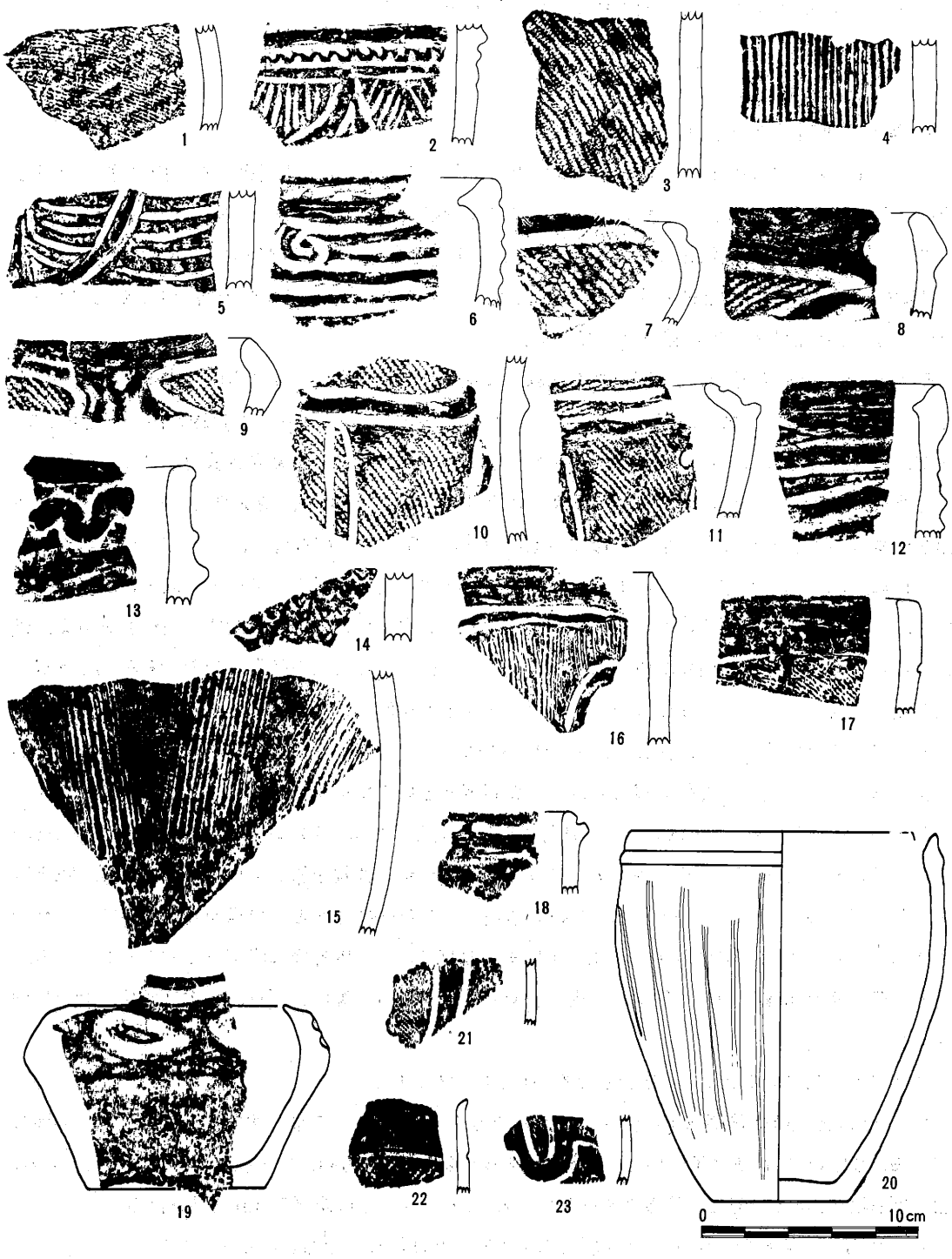
18は外側を肥厚させ，口縁に沿って沈線と刺突を施している。19は高さ8cm，最大径14cmの小形土器の破片である。口縁は内湾し，外面上部の粘土帯に沈線を施している。焼成は良く色調は黄褐色を呈する。20は高さ17cm，最大径15cmの小形土器である。口縁から下に行くにつれやや脹らみ，そこから底部に向かって急にすぼまる器形である。内外面に隆帯を1本巡らしている。外面の隆帯下は数条ずつの平行沈線を縦と斜めに施している。焼成は不良，色調は灰色，胎土に砂を含む。

このほか，6，10号の外から出土したものに21～23がある。

21～23は縄文時代後期初頭に位置するものである。21は2本の平行沈線を配し，細縄文を施している。22は口縁に無文帯を残し，1本の沈線を口縁に沿って巡らす。以下に細縄文を施している。23は曲線的な沈線を配し，細縄文を施している。21～23ともに器厚5mm内外を計る。

以上であるが第6号・10号の両住居址出土土器よりは新しさを感じるものである。

（浅輪俊行）



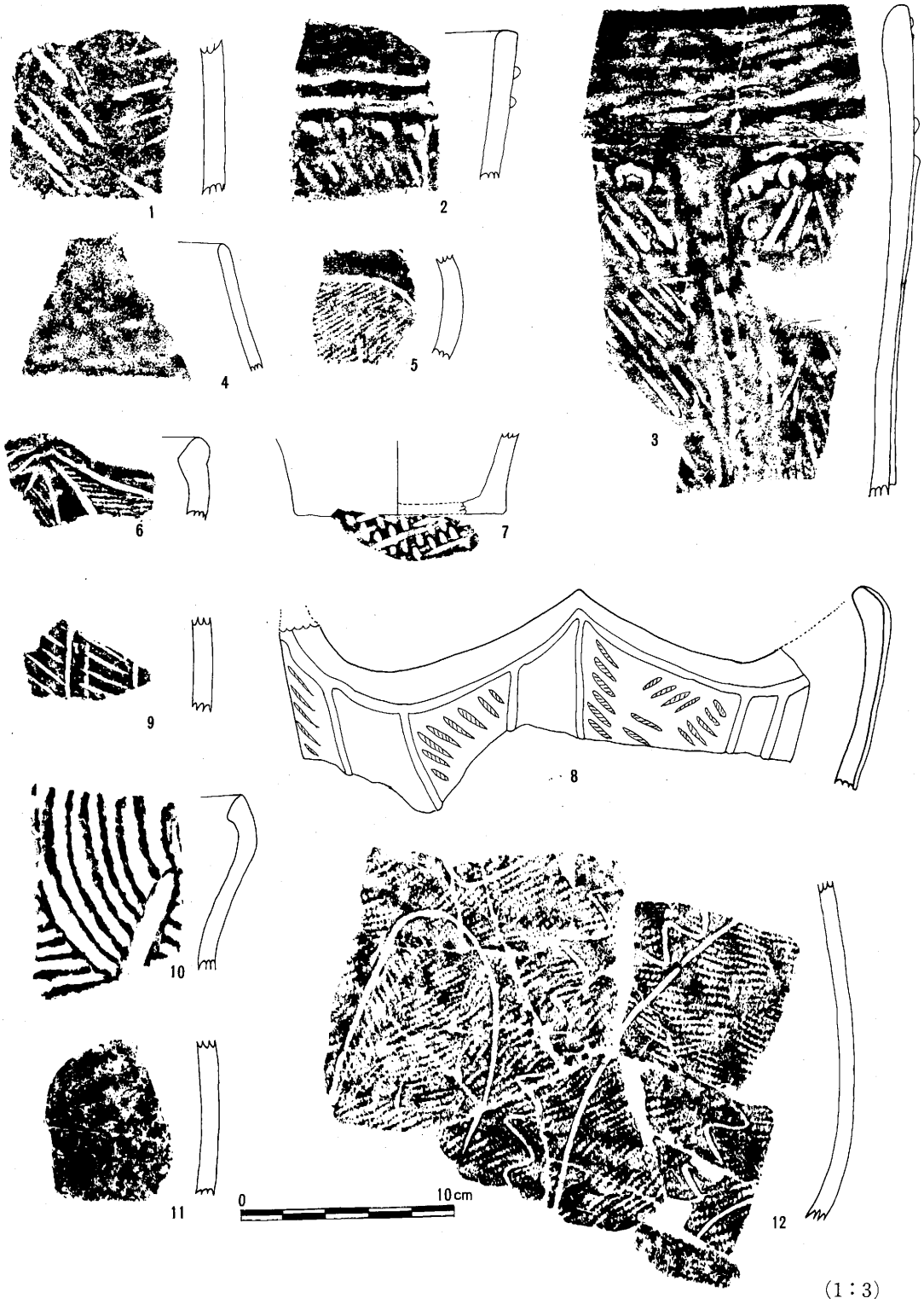
(1：3)

第48図　第5号集石・遺構外出土土器（1：3）
（1～20：5号集石，21～23：遺構外）

10）第2号ピット群（第44図4～21，第49図1～8）

4は上部に刺突を施し，垂下する数条の斜平行波線を施している。焼成は良好で器厚は0.55cmで色調は黒灰色である。5は無節斜縄文で，焼成は良好で黒褐色を呈し，胎土に砂粒を含み，内面に横位整形痕が見られる。6は単節縄文で暗灰色をおび，焼成は良好である。7，8，9は同類であり，2.3cmの無文帯を挟んで，大形の爪形様連続文を施してあるが，7は底部破片で底部より1.7cmの無文帯となっている。9は大形破片で，上部に横位隆帯を施し，連続爪形文を配している。焼成は共に良好。色調は暗褐色で，胎土に砂粒を含み，共に1cmの器厚である。10は本ピット群の時期を決定したピット内出土である口縁部土器片である。やや「く」の字形で，口縁より3.5cmの無文帯を残して，太めの横位隆帯の一部と垂下隆帯には交互に刺突を施してある。焼成は良好。色調は褐色で胎土に雲母，石英を含み，器厚は1.3cm，内外面に整形痕を見る。11は10と同類と思われるが2本の垂下隆帯の間に湾曲三角形隆帯を施してあり，色調は灰褐色である。12は上部に刻みめを施した曲線隆帯文を区画し，内面にやや太めの沈線と長めの連続刻みめを施してあり，焼成は良好で黒褐色を呈し内面に斜めの整形痕が見られる。13は内部刻みめ施文を欠くため，12と同一器形と思われる。13は横位隆帯に上下に縦，斜め隆帯を区画し，内部に櫛形文様を施してあり，焼成は良好，灰褐色で器厚は0.9cmを計り内部に横位整形痕が見られる。14は内湾した口縁に大きく張り出した山形の隆帯を施し，器厚0.8cmに比して，2cmの盛り上がりを見せている。3本の山形沈線の内部に連続刻めを巡らして焼成は良好で暗褐色である。15は山形口縁に逆「V」字形隆帯をつけて，連続爪形様刺突を施し，上部に縦平行沈線を巡らしている。焼成は良好，色調は灰褐色で内面に整形痕が見られる。16は口縁部外面が内側にぐっと迫り出している。ウドン状の切れ目のない縦長の「V」字形隆帯文で，器厚は1.01cm，焼成良好，色調は褐色。17は縦平行沈線文を区切って湾曲の括れめに細波形隆帯文を施してあり，焼成は良好，色調は暗褐色で胎土に砂粒を含む。18は曲線隆帯に曲線平行波線を施している。焼成は良好，色調は暗灰色で胎土に砂粒を含み，内面に整形痕が見られる。

19は内湾口縁で，0.5cmの無文を残して，垂直平行沈線を配しそれを区切って横位細隆帯を施している。焼成は良好で色調は暗褐色で内面に斜めの整形痕が見られる。20は垂直隆帯に斜め曲線隆帯を区画し，下部に浅めの縦沈線を配し，それを区切って深めの斜め沈線を施してある。焼成は良好で赤褐色を呈し，内面にスス状の炭化物が付着している。21は斜めの大きな飛沫沈線を施してあり，焼成は不良，色調は灰褐色で，胎土に多量の砂粒を含み，外面にスス状の炭化物が付着している。第49図2は口縁はやや垂直で，口唇は肥厚2.5cmの無文帯を残して，2本の横位隆帯を施し，下部隆帯に「まがむ」模様を配し，斜め沈線を施す。焼成は良好，色調は灰褐色で内外面に整形痕が見られる。第49図3は2と同類であるが口縁から無文帯の幅が4.2cmで第49図1に比して広く器厚は1cmで同一である。第49図4は口縁は傾斜をなし無文で焼成は不良で灰褐色を呈し，多量の粗粒を含む。第49図5は細斜縄文に曲線沈線を配し，1.5cmの無文帯を巡らし，焼成は良好にして灰褐色を呈している。第49図6は山形口縁で，口唇は肥厚し，口縁部より左右の斜め沈線



第49図　第2号ピット群，遺構外出土土器（1～8：2号ピット群，9～12：遺構外）

を施し，一つおきに磨消縄文を施してある。焼成は良好で，灰褐色で胎土に砂粒を含む。第49図7は綱代底部破片で1cmの無文帯の上部に明瞭ではないが斜縄文が見られる。焼成は良好で，灰褐色を呈している。第49図8は推定径29cmを計る口縁部である。隆帯区画内に無節縄文を施している。

（三村　肇・山越正義）

11）遺構外出土土器（第49図9～12）

9は垂下沈線を施し，さらにそれを切って斜沈線をひっかくように施している。焼成は良好で灰褐色を呈している。10は口縁が内面にするどく湾曲し，外面の斜め平行隆帯が，口縁部先端に張り出し，下部には横位隆帯が走って焼成は固く暗灰色で内面に整形痕が見られる。11は無文で器厚0.5cmの研磨土器で灰褐色で固く焼き締まっている。12は斜縄文に「U」字・逆「V」字・波状の沈線を施した大形破片で下部に無文帯がある。焼成は良好，色調は施文帯は褐色で無文帯は赤褐色であり，内面に整形痕が見られる。

（三村　肇・山越正義）

(2) 土　製　品

土製品には，土偶6，土製円板3，有孔円板1，耳飾1，小形土器1がある。

1）土　　偶（第50図）

土偶は3号住居址3（1～3），10号住居址1（5），7号住居址1（6），4号住居址1（4）と計6点出土している。全て覆土中からの出土で，他の土器・石器と同様に雑然とした状態で出土し，特別変わった状態で出土したものはなかった。

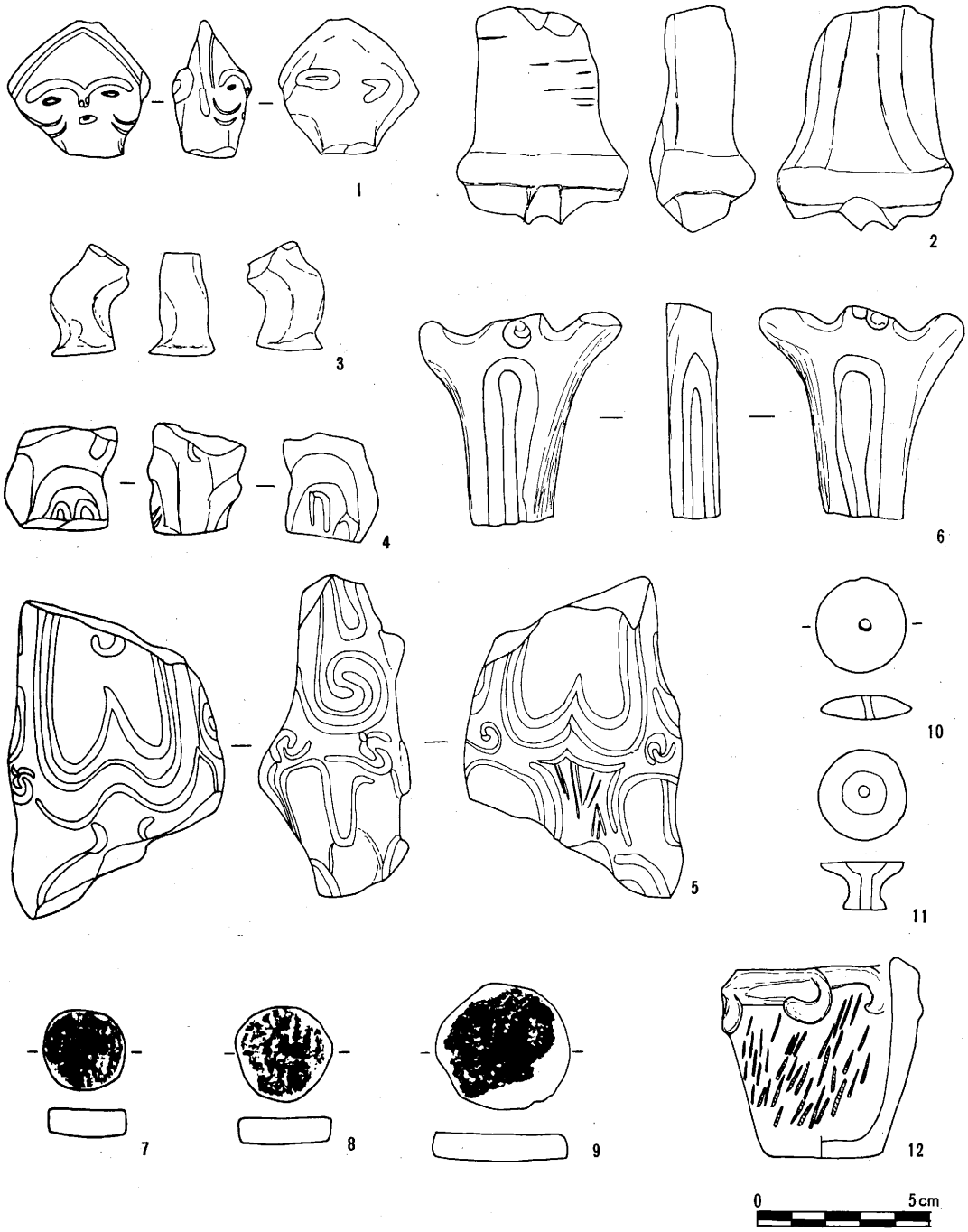
1は土偶の頭部で，褐色を呈し焼きは良い。目・口および口端から両頬にかけて引かれた2本の線は沈線で表現され，眉は粘土紐をはりつけ，鼻は刺突により表されている。裏面頭部には粘土紐をリング状にしたものが付けられている。

2は胴部破片で，現存長6.5cm，断面は板状を呈する。色調は黒褐色で，胎土中に小砂利・砂粒を含有し，焼成は悪く，表面は剝落している部分が多い。腰部に粘土紐をはりつけて凸状に張り出させ，背面には2本の粘土紐を縦に付している。他に横走するわずかな沈線が残されているが，表面が荒れているため明瞭ではない。

3は脚部破片で，膝をわずか折り曲げた姿勢をとっている。文様はない。淡褐色で，焼きは良い。現存長3cm。

4は脚部破片で，断面は円形を呈し，中心部に貫通孔があけられている。両面に隆線が∩字状に付けられ，その内側に沈線による文様が施文されている。赤褐色で焼きは良い。

5は胴部の破片である。色は赤褐色で，精選された胎土を用い，硬く焼いている。正面はヘソの



(1：2)

第50図　土　製　品

部分を粘土粒によるふくらみで示し，腹部はハート形の沈線が3重に描かれている。側面は渦巻文が3つ施文され，脇の部分には∩字状の沈線が施されている。背面はハート形に臀部を表し，くの字状に大きく突出している。突出部の下部には細い沈線が無造作に引かれ，両側に脇から続く∩字状の沈線が施されている。両脚から胴部上端まで貫通孔が2孔あけられている。現存長は9.4cm。

6は上半身の破片で，頭部・両手足・脚を欠いている。両手を大きく上に広げた板状の土偶である。正面には首部に円形の刺突文が押され，その下から腹部下半まで∩字状の沈線文が描かれる。側面にもやはり∩字状の沈線がみられ，さらに背面にも正面同様の文様が施されている。黒褐色で，焼成は良い。

2）土製円板（第50図）

7は3号住居址覆土から出土したもので，直径2.5cmの円形を呈す。厚さは8mm。周辺はよく磨かれている。8はやはり3号址の覆土から出土したものである。径2.8cmの円形で，厚さ7mm。表面は荒れてはっきりしないが縄文の痕跡が認められる。円形に打ち欠いたのち，部分的に磨かれている。9はc-23区から出土したもので，径3.8cm。厚さ7mm。1部破損している。周囲は，円形に打ち欠いた跡と研磨した跡とが認められる。表面はボロボロに荒れている。

3）有孔円板（第50図-10）

5号住居址上部の立石下，すなわち5号址の炉址内から出土したものである。径2.1cmの碁石状を呈し，中央に径3mmの孔が貫通している。淡褐色を呈する。表面には1部に指紋の痕跡らしきものが認められる。

4）耳飾り（第50図-11）

7号住居址のPの覆土から出土したものである。上面径2.6cm，下面径1.2cmの糸まき状を呈し，上面は臼状にえぐられ，下面に貫通している。器面には赤色顔料が塗布されている。焼成は良好。

5）小形土器（第50図-12）

5号址覆土褐色土中（地表より－55cm）より出土。口径5.4，底径3.5，器高5.5cm。文様は隆帯による渦巻文6単位が口頸部に配され，その端は口縁部の隆帯に接合している。胴部には不規則な無節縄文が施文されている。焼成は良好で，赤褐色を呈する。（小林康男）

(3) 石　　器

今回の小段遺跡の発掘によって得られた石器は総数210点を数える。それらの出土地点および点数等の詳細は第1～6表に示してある。以下各遺構別に石器類を概観したい。なお，各遺構に属す

る石器の記述にあたっては，多々問題はあるが地表から住居址床面までの間で出土した石器全てをその住居址のものとして記述した。出土層位等については第2表に掲載してあるので参考とされたい。

○ABトレンチ

ABトレンチからは18点の石器が出土している。このうち遺構に伴うものは2号住居址6点，2号集石7点があり，遺構外より出土したものが5点である。Cトレンチと比較し量的にも器種別にも貧弱な在り方を示している。

第2号住居址（第51図1～6）

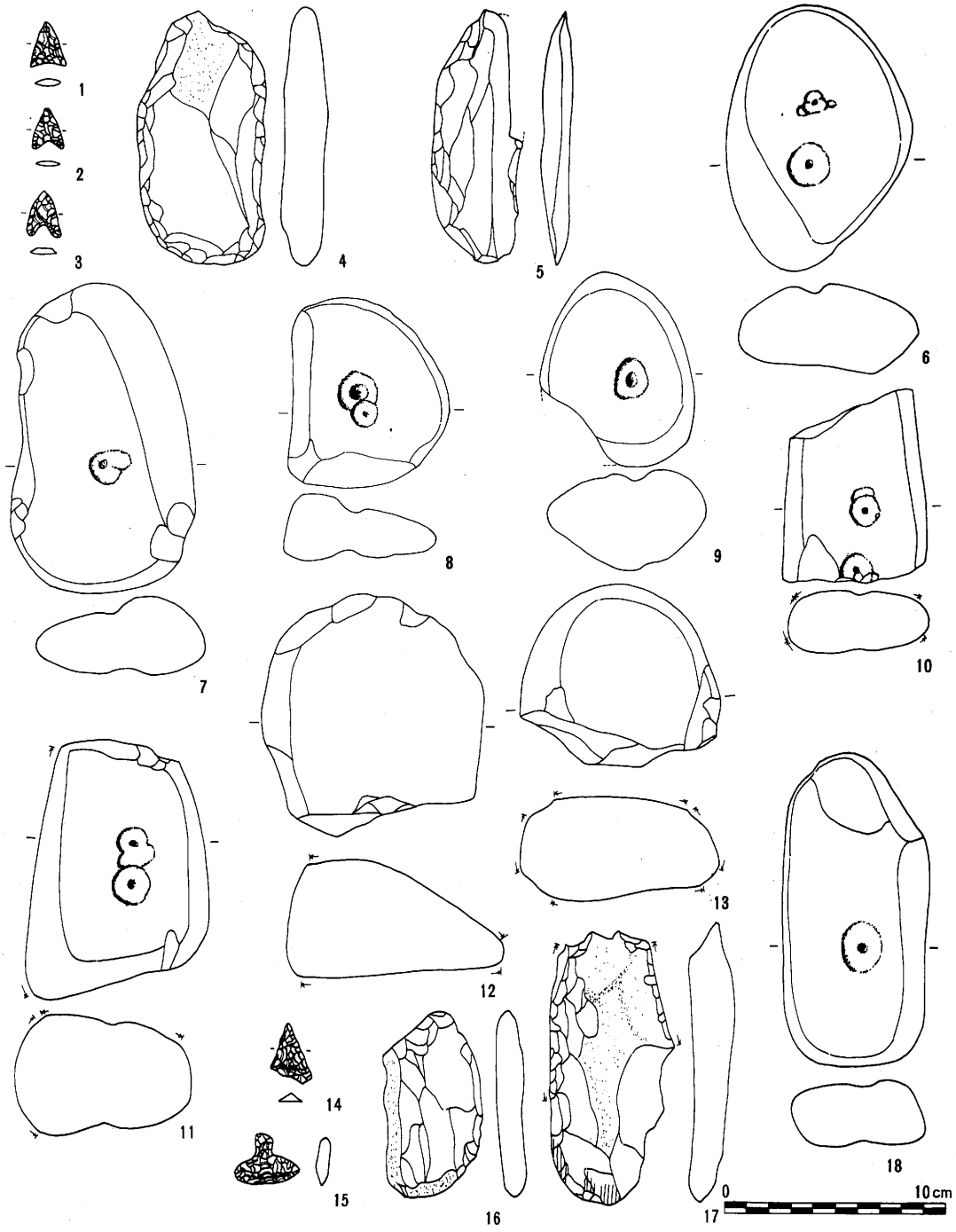
2号住居址からは石鏃3，打製石斧2，凹石1が出土した。石鏃(1)は底辺にえぐり込みの少ない三角鏃形を呈する。(2・3)はえぐりが作出され，(3)の裏面は第1次剥離面を大きく残し，ほとんど加工を加えていない。長さは1.7～2cmで，基辺は1.4～1.7cmを計る。打製石斧(4)は刃部が丸味をもち，左辺には磨耗痕が認められる短冊形で，やや部厚い。(5)は右辺を1部欠いている。凹石(6)は表面にロート状の深い凹み孔と，打痕が集中したような浅い凹みが1孔ある。裏面には打痕が集中した部分がみられ，ほんのわずかな凹みとなっている。

第2号集石（第51図7～13）

凹石3，凹石と磨石との兼用2，磨石2の計7点出土。凹石(7)は楕円形の礫の表裏面に各1孔があり，ともに擦ることによってできた浅い凹みである。(8, 9)は9×7cm前後の大きさで，(8)は表裏に連なった2孔があり，(9)は表裏とも1孔がある。(8, 9)とも擦ることによって凹みは作られている。凹石兼磨石(10)は両端を欠くが，現存部分で表裏に2孔があり，左辺および表裏面に平坦な磨痕を有する。(11)も表裏に2孔をもち，表裏と左辺に研磨面がある。特に左辺は非常によく擦られており，特殊磨石のような形状を呈し，主要機能部分であったことを示している。磨石(12・13)はともに下半を欠失している。磨面は(12)は表裏面，(13)は表裏および左右両面にあり良く研磨されている。

遺構外出土石器（第51図14～18）

遺構に属さないものに石鏃1，石匙1，打製石斧2，凹石1がある。石鏃(14)は長さ2.7cmを計り，えぐりをもったもので，左脚を欠いている。打製石斧(17)は表面に原石面を残し，両辺は胴上半まで磨耗痕が認められる。左辺刃部付近が欠損している。(16)は左辺から刃部にかけて原石面を残し，刃は右あがりの斜刃を呈する。石匙(15)は刃部が横長のもので，作りは丁寧である。凹石(18)は表裏に1孔ずつを有するものである。



(1：3)

第51図　ABトレンチ出土石器

○Cトレンチ

第3号住居址（第52・53図）

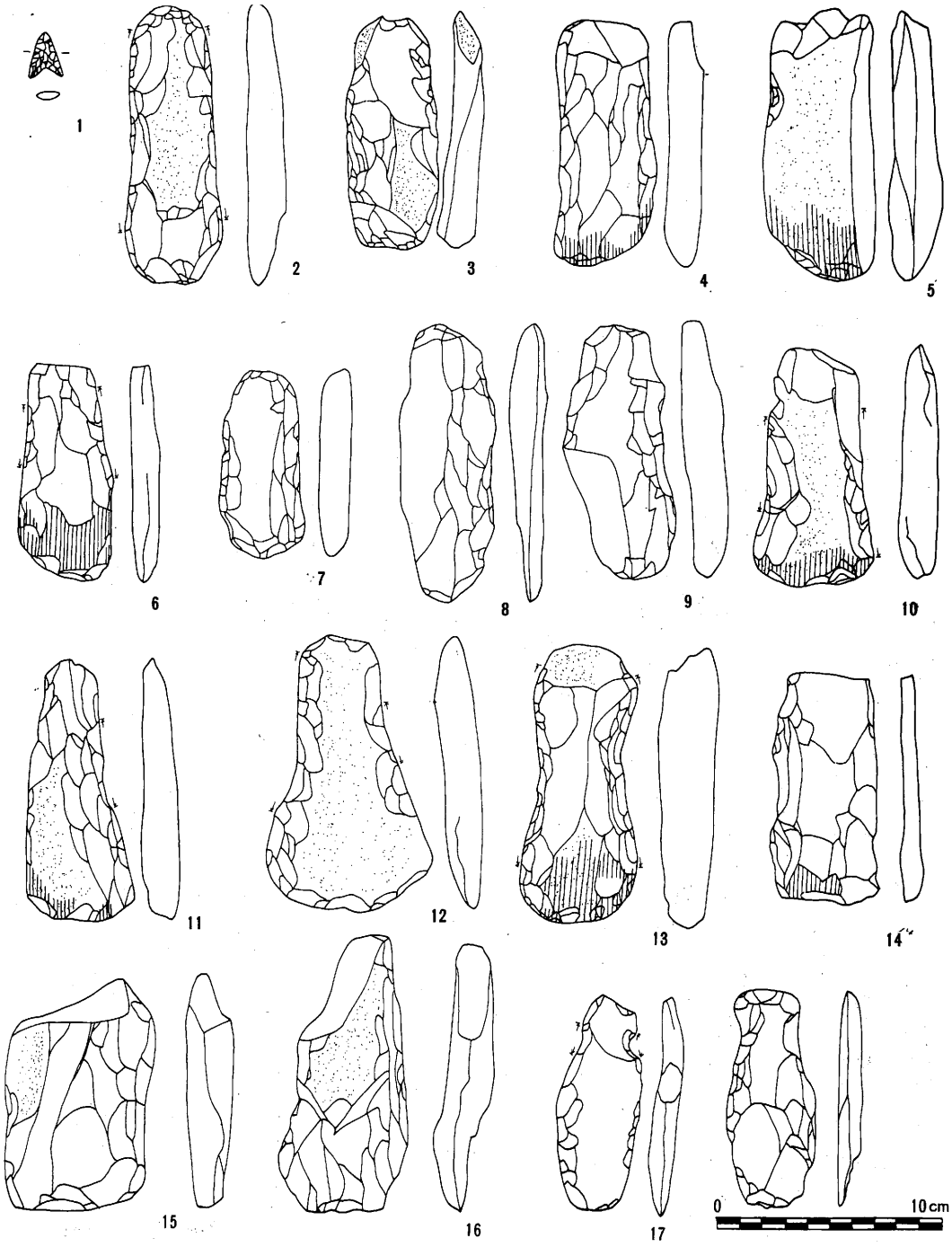
3号址からは石鏃1，打製石斧15，大型粗製石匙2，凹石9，凹石兼磨石1，磨製石斧3，石錐1，石棒2の計34点が出土している。

石鏃（1）は，1点の出土であるが，えぐりの入った完成品。作りは良好。打製石斧は15点という多くの出土があった。（2～9）までの8点は短冊形を呈するものである。（2）は表面に原石面を残し，両縁に磨耗痕を有する。刃部は直線状をなす。（4）は右あがりの斜刃で，刃部付近に擦痕が残されている。（5）は逆に左あがりの斜刃で，刃部にはかなり顕著な擦痕が残る。表面には原石面が大きく残されている。（6）は両肩の部分に3～4cmの磨耗があり，刃部周辺には擦痕がある。（7）は長さ8cmほどの小形品で，表面は風化が激しくボロボロしている。（8）は両端が尖頭状を呈し，頭部にはススの付着がみられる。（10～12）の3点は撥形を呈するものである。（10）は刃部がやや広がる形態で，表面には原石面が残り，両縁には磨耗痕が，さらに刃部付近には擦痕が見られる。（11）も表面に原石面が残り，右辺に磨耗痕が，刃部付近には擦痕が存する。（12）は典型的な撥形を呈する。表面には原石面が大きく残され，その周囲のみに加工を加え形を整えている。刃部は丸味を帯び，両肩の部分には磨耗痕がある。（13）は胴部がわずかにくびれ，そのくびれを中心に両縁に磨耗がある。頭・刃部に原石面を残し，刃部には擦痕が認められる。以上の13点は完形品であったが，（14～16）の3点は破損品である。3点とも頭部を欠いている。

大型粗製石匙（17）は，長さ9.5cm，幅3.7cmの縦長で，両肩にえぐりがある。作りは非常に粗雑で，周囲にわずかな加工を施してあるにすぎない。（18）も面肩の部分がわずかにくびれた縦形で，先端部を少し欠失している。

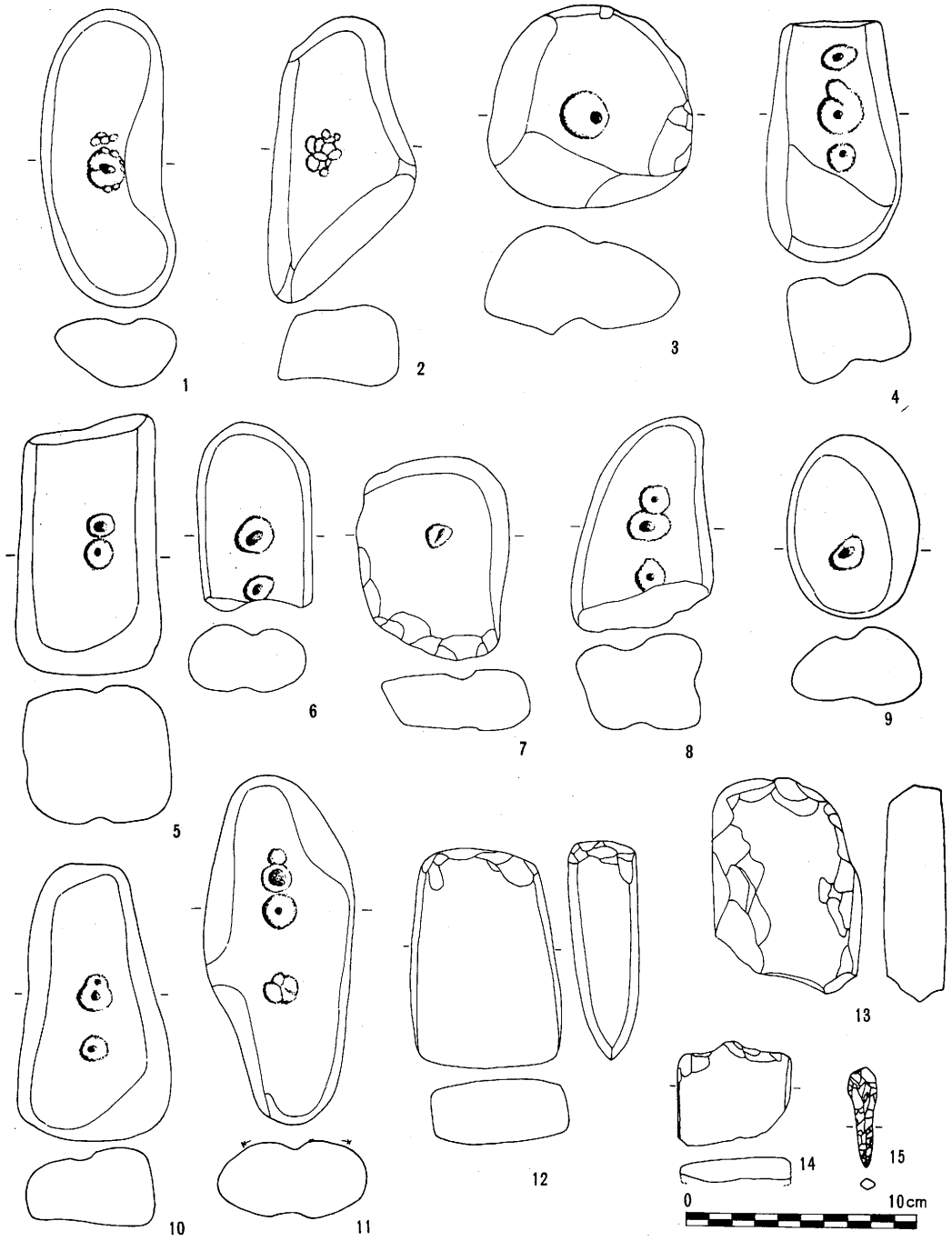
凹石は打製石斧に次ぐ9点という多くの出土をみた。第53図-1は楕円礫のちょうど中央に打撃によって作られたロート状の深い凹みが1孔ある。裏には打痕が集中している部分が1ヶ所あるが，凹みにまでは至っていない。（2）は角ばった礫を用い，やはりその中央に打痕が集中した部分が1ヶ所みられる。わずかな凹みとなっている。（3）は円形礫の表裏両面の中央に1孔ずつの深い凹みがある。（4）は先端を欠いている。表に3，裏に2孔を有し，左辺には打痕が集中し若干の凹みとなっている部分がある。（5）は表2，裏2，左辺1の計5孔がある。やはり先端を欠いている。（6）は表裏両面に2孔を有する。磨耗によったロート状の凹みである。（7）は表に深い凹み1孔が，裏には打痕が集中してわずかな凹みとなった部分が1ヶ所ある。（8）は下半部を欠失しているが，現在部分では表3，裏3，左辺1の凹みがあり，ともに擦ったような状態の深い凹みである。（9）は8×5.5cmの小形品で，表裏に各1孔を有する。（10）は表面に2孔をもつ。凹石兼磨石（11）は表にロート状の深い凹み1孔と2ヶ所の打痕集中部分があり，裏にはロート状の1孔がある。表面に研磨痕が認められる。

磨製石斧（12）は，定角式で，頭部を欠いている。しかし頭部が欠損した後，丁寧に再加工して使用している。両側辺と裏面全面にススが付着している。（13）も定角式であるが，周縁および刃部



(1：3)

第52図　第3号住居址出土石器



(1：3)

第53図　第3号住居址出土石器

を大きく欠失している。(14) も定角式であるが，現存部分はほんの一部分にすぎない。

石錐 (15) は錐部3.2cmで，製作は精巧で非常に鋭利で美しい。石棒 (64図-2) は頭部にくびれのある有頭のもので，くびれは斜めになりながら1周している。長さは21cm，幅8cmで厚さは4cmの扁平を呈し，表面は火でも受けたのかボロボロしている。(64図-4) は石棒の破片で，丁寧に研磨されている。覆土下層から直立した状態で出土した。

第4号住居址 (第54図・55図1～7)

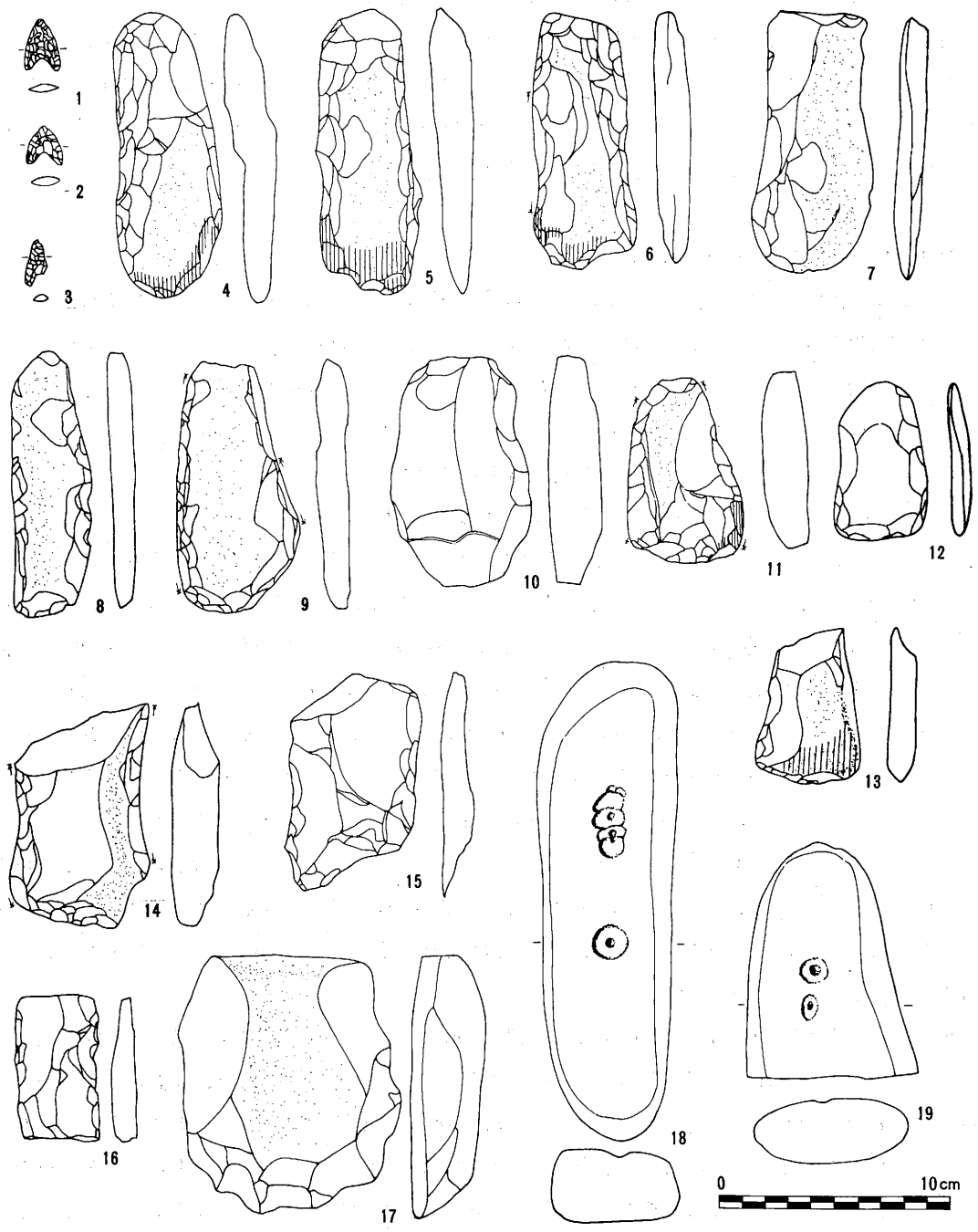
4号址は，西側部分に7号址の貼床があり，4号址床面より30cmほど上層には焼土および炉址様石組が検出されるといったように幾つかの遺構が入り込み複雑な様相を呈している。それ故，石器もこれら幾つかの遺構にそれぞれ属していたと思われるが，4号址上層の遺構との区分は調査時に明確にし得なかったため，一応一括して4号址として説明しておきたい (第2表の4号住居址欄の層位の褐色土上面までのものは上層遺構に属する可能性が強い)。

石鏃3，打製石斧14，凹石9，凹石兼磨石1，磨製石斧3の計25点がある。

石鏃 (1～3) はえぐりがあり，3点とも丁寧な作りである。打製石斧は14点が得られている。(4～8) は短冊形を呈する。(4・5) は刃部が丸味をもち，表面に原石面を残し，刃部には擦痕がある。(6) も (4・5) と同形態を示すが，左辺に磨耗痕が認められる。(7) は胴部付近がややくびれ，刃部は丸い。右半分に原石面を残し，縁辺は鋭利である。(8) は原石周囲にわずかな加工を施しただけの粗雑なものである。(9) は撥形を示すが，原石面が大きく残されている。両縁には長さの異なる磨耗痕が残存する。(10) は楕円状を呈するもので，分厚く粗雑な作りである。表面は風化し，剝離は明確でない。(11～13) は長さ7cm前後の小形品で，それぞれ撥状を呈する。厚さは (11) のように分厚いものもあれば，(12) のように薄いものもあり一定しない。刃部は直線状をなす。以上10点は完形品であるが，このほかに破損品が3点ある。(14・15) は頭部を欠き，(16) は刃部，頭部を欠いている。このほかに (17) のように，ほぼ円形を呈し，粗く周囲を打ち欠いてある。石核様の性格を有するものかもしれない。

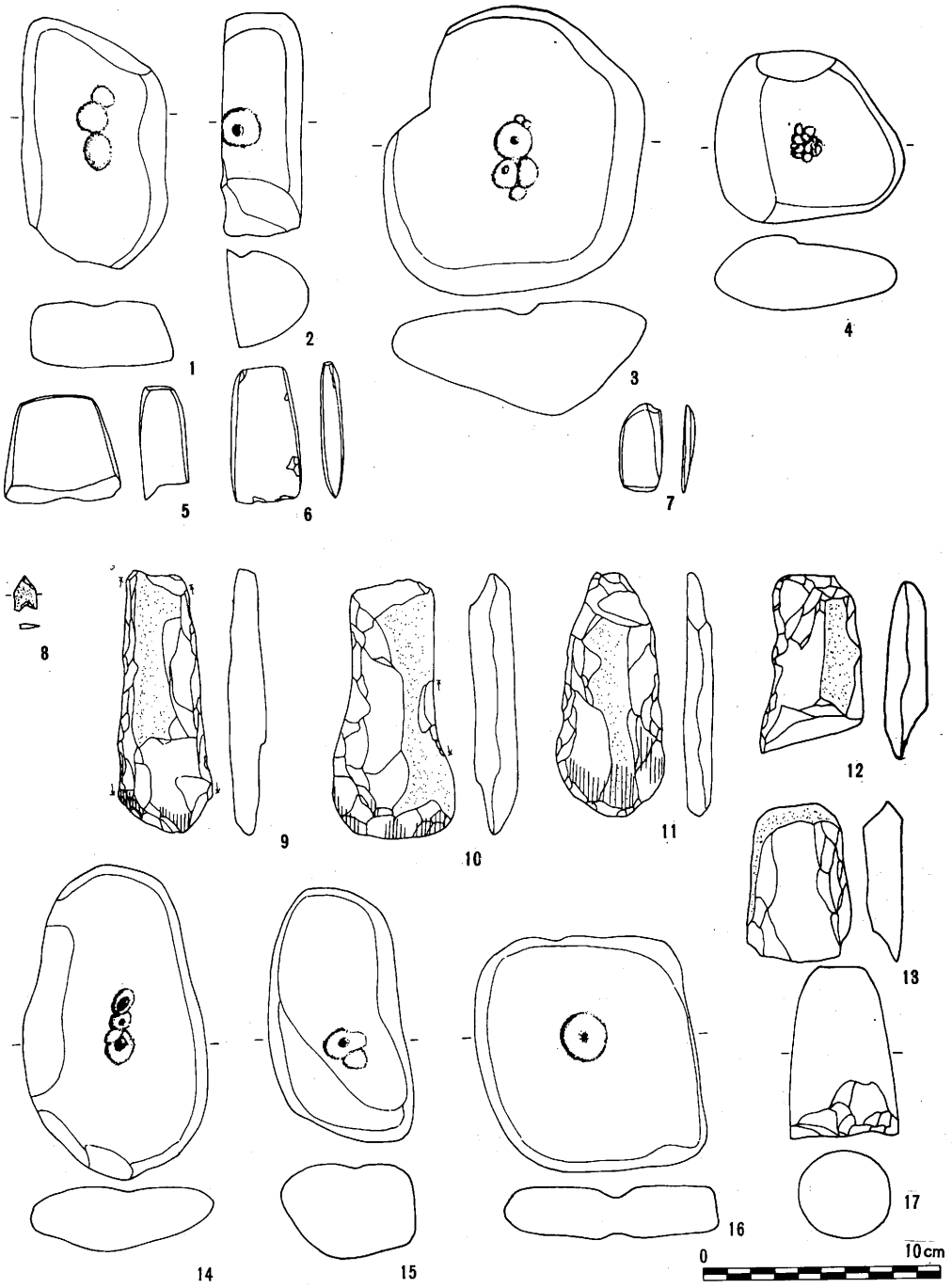
凹石 (18) は長さ20.5cm，幅5.5cmで，細長い礫の表面にロート状の深い凹孔と打痕が連らなった部分があり，裏面には深い凹みが1ヶ所存する。(19) は半欠品であるが，表面のみに小さな2孔がみられる。(55図-1) は下端の1部を欠くが，表面に打痕集中部分が3ヶ所連らなっており，わずかな凹みをなしている。(2) は4分の1ほどの残欠品であるが，表に深い1孔がある。以上の凹石は楕円形ないし縦長棒状の礫を用いたものであるが，このほかに (3) のように円形を呈するものがある。表面のみに4孔があり，内2孔は深い凹みとなっている。凹石兼磨石 (4) は表面にロート状の凹みと打痕集中箇所があり，この面が平坦に研磨されている。

磨製石斧 (5) は定角式の頭部のみのもの。(6) は小形の定角式で，刃部には使用痕が残されている。(7) は長さ3cmの小形定角式で，非常に薄い。



(1：3)

第54図　第4号住居址出土石器



(1：3)

第55図　第4号，第5号住居址出土石器（1～7：4号，8～17：5号）

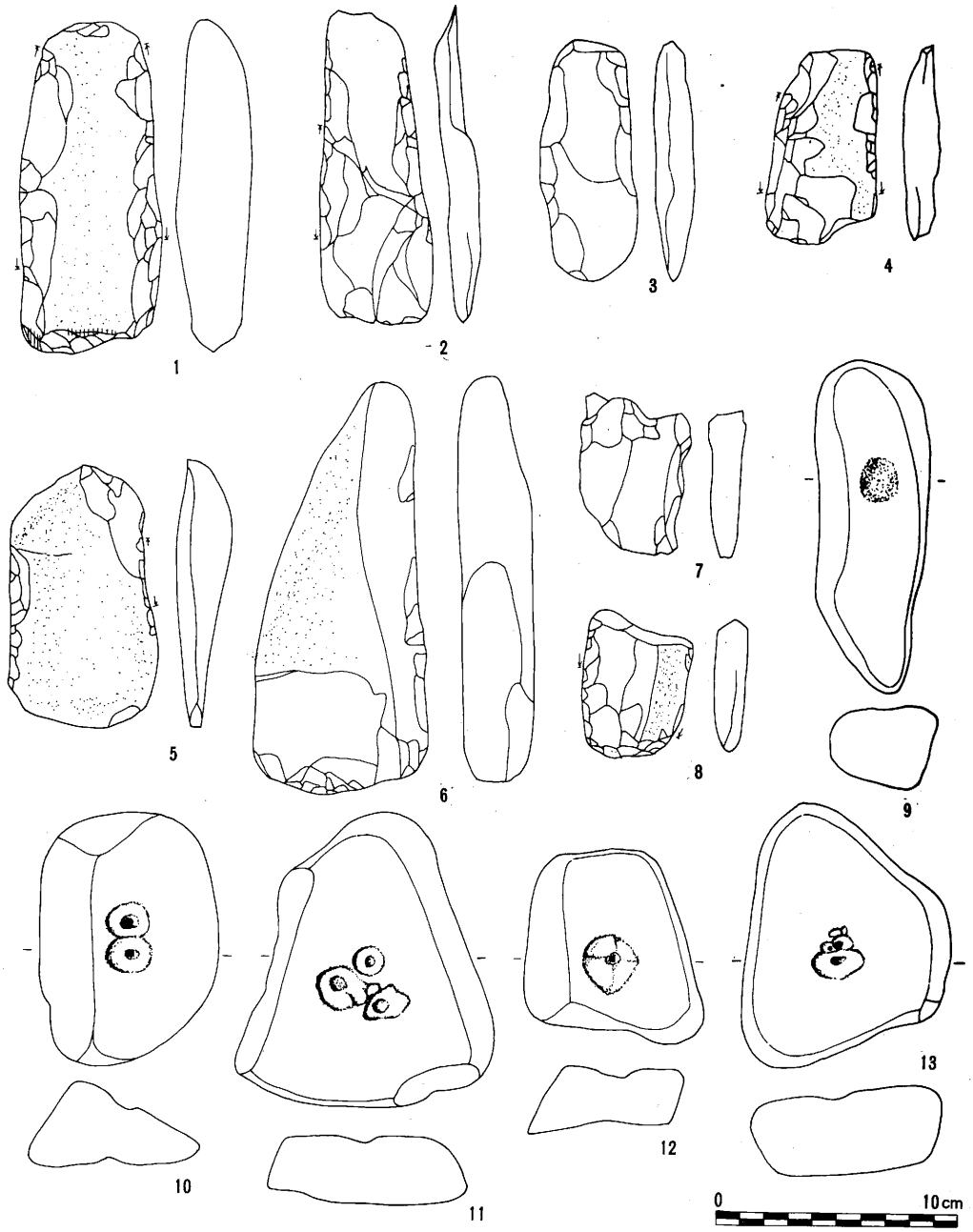
第5号住居址（第55図8～17，56図）

5号址は東側を10号址と接し，さらに褐色土層中（地表下40cm前後）には立石を持った住居址が存在する。出土石器の記述に際しては，上層の住居址と5号址とに分けた。

上層の住居址出土の石器には石鏃1，打製石斧5，凹石3，磨製石斧1，立石1の計11点がある。石鏃（8）は，原石に底辺へのえぐりの部分と，先端を作出するための加工を加えただけのもので，小形・粗製なものである。打製石斧（9）は短冊形を呈し，両縁が頭部から刃部周辺まで磨耗し，刃部は丸味をおび擦痕がみられる。（10）は撥形であるが，胴部のくびれた部分に磨耗が認められる。刃部には擦痕がある。（11）は尖頭形を示し，表面中央には原石面を残し，丸味をもった刃部には顕著な擦痕が残されている。（12・13）は頭部のみの破片で，胴部以下刃部までを欠いている。凹石（14）は表に3孔の連らなりの凹みがあり，裏には1孔がある。（15）は表に打痕の集中によって凹みとなった凹み2孔がある。（16）は表裏に各1孔ずつの凹みがある。磨耗によるロート状の凹みである。磨製石斧（17）は乳棒状石斧の頭部で，頭頂部は打痕が認められる。立石（64図-1）は長さ35cm，上面径8cm，下面径13cmの隅丸方形を呈する。上面は打ち割られたように平坦になっている。4面とも研磨されているが，そのうち2面は研磨により砥石状に幅3cmの凹みができている。

5号下層住居からは打製石斧9，凹石6，凹石兼磨石1，凹石・磨石兼叩石1，石皿1，石棒1の計19点が得られている。

打製石斧（56図1～4）までは短冊形を呈する。（1）は表面に原石面を大きく残し，周囲に加工を施し，両縁は胴下半まで磨耗している。刃部にはかすかに擦痕が残る。部厚く重量感あふれる石斧である。（2）は左辺のみに磨耗が残される。（3）は刃部は丸味をもつ。表面が風化しており加工の状態は余り良く観察できない。（4）はやや小形で，原石面を残し，両縁には磨耗が認められる。小形の割には分厚い。（5）は，ややずんぐりした楕円形を呈するものである。第1次の剝片にほとんど手を加えずに使用している。ともに分厚い。（6）は非常に分厚く，原石を余り加工することなく使用している。（7，8）は刃部の破片で，頭部を欠いている。凹石（9）は，表面にのみ打痕が集中した部分があるが，明瞭な凹みとはなっていない。（10）は断面三角形の礫を用い，表に2，裏1の磨耗によってできたロート状の深い凹みがある。（11）は表面のみに磨耗でできた3孔がある。左辺が若干破損している。（12）は表に大きな深い凹み1孔があり，裏には打痕の集中した部分が1ヶ所認められる。（13）は表に磨耗による1孔と打痕による1孔があり，裏には凹みとはなっていないが打痕の集中した所が2ヶ所ある。凹石兼磨石（63図-6）は表裏に浅い痕跡的な凹みが各1孔あり，表裏ともツルツルに研磨されている。この石器は凹石として使用された後，磨石として使用されたため，両面の凹みは研磨のため擦り減ってしまったものと思われる。凹石・磨石兼叩石（63図-7）は表裏に2孔があり，表裏面がツルツルに研磨され，右辺には長さ3.5cm，幅1.5cmの打痕が残されている。石皿（64図-6）は両端を欠失し，現存部分も表皮がはがれている。そのため研磨の度合などはっきりしないが，ほとんど凹みとならず平坦なままの磨面をもった石皿であったと思われ



(1：3)

第56図　第5号住居址出土石器

る。全体的に焼けて赤味をおびている。床面にくっついて出土した。石棒（64図-3）は，胴部破片で，花崗岩を使用し，丁寧に研磨されている。

第6号住居址（第57図）

6号址上層には第5号集石が存在するので，この集石址下面より床面上までに出土したものを記

(1：3)

第57図　第6号住居址出土石器

す。

石鏃2，打製石斧9，凹石3，磨製石斧1が出土している。

石鏃(1)は，えぐり込みの深い完形品。(2)は左辺を失っているが，長さ2.5cmの精巧品。打製石斧(3・4)は胴部付近で屈折し，しゃもじ形をしている。(5・6)は小形で，片縁ないし両縁が磨耗している。刃部は丸味をおびる。(7～10)までは欠損品で，(7)は右辺を，(8・9)は刃部を，そして(10)は頭部を欠いている。(11)は短冊形で肩の部分がややくびれ，その部分の両縁が磨耗している。広義の大型粗製石匙に含まれるものかもしれない。

凹石(12)は表面に打痕が集中する所が2ヶ所ある。やや凹みになっている。(13)は表裏に深いロート状の凹み1孔ずつがある。磨製石斧(14)は乳棒状を呈するもので，刃部には明瞭な使用痕が残されている。頭部は破損が著しい。

第7号住居址（第58図1～8）

7号址からは石鏃2，打製石斧2，凹石3，凹石兼磨石1の計7点が出土した。

石鏃(1)は底辺にわずかえぐりをもった粗製品。(2)は頭部を欠き，作りは粗雑で粗い。打製石斧(3)は短冊形で，胴部がややくびれ，その部分を中心に両縁に磨耗が認められる。左辺刃部周辺に擦痕が残されている。(4)は両端を欠くが，表面胴部中央には顕著な擦痕がある。凹石(5)は表面にのみ磨耗による深いロート状の凹み2孔がある。(6)は断面球形で，凹みは表面に磨耗による深いロート状1孔がある。(7)は表に2孔が連らなっている。凹石兼磨石(8)は表面に小さな1孔があり，全面が丁寧に磨かれている。

第8号住居址（第58図9～14，59図1～4）

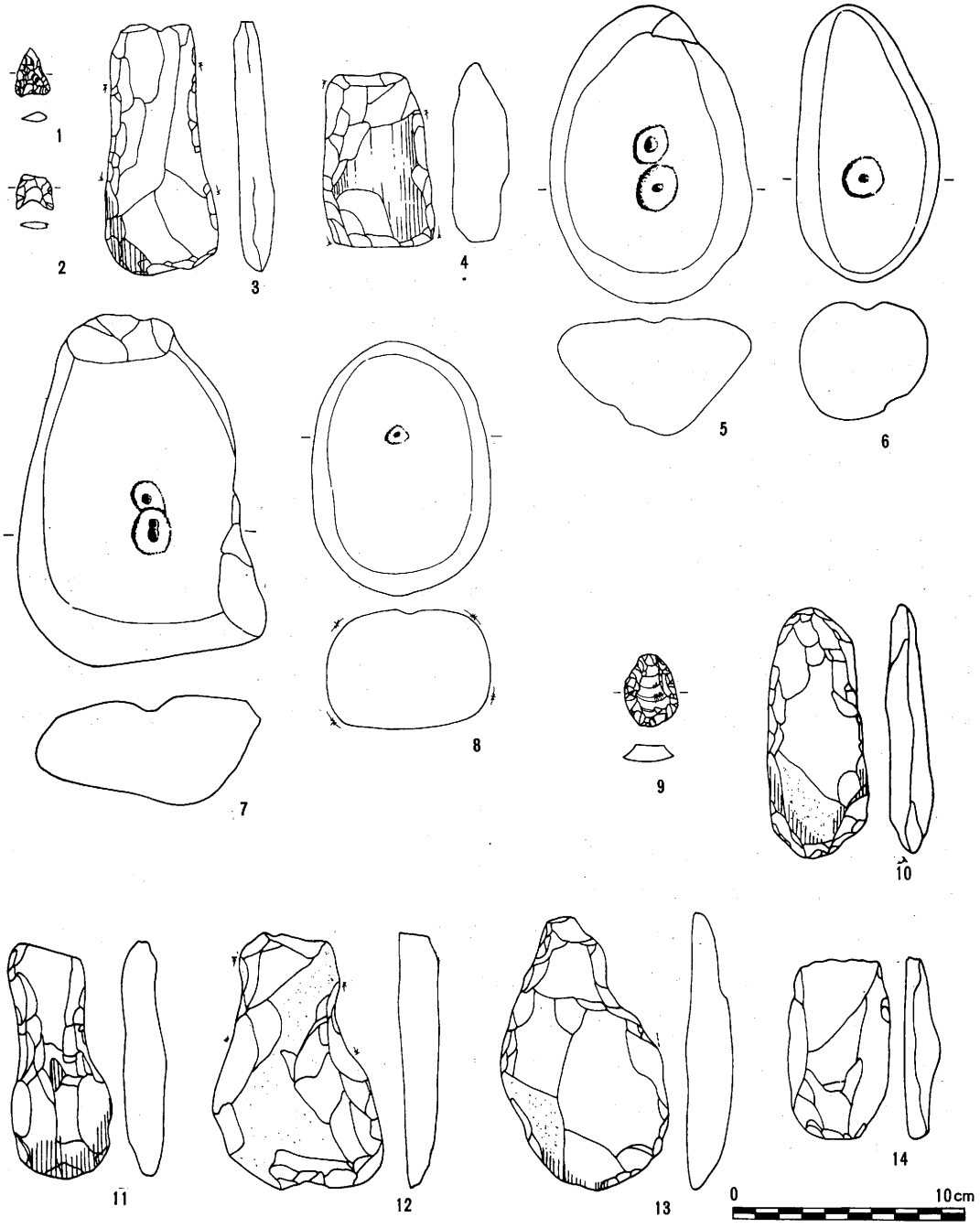
石鏃1，打製石斧5，凹石3，磨製石斧1が出土。

石鏃(9)はずんぐりした円形を呈したもの。打製石斧(10)は短冊形で，刃部に擦痕がある。(11・12)は撥形で，(11)は刃部に顕著な擦痕を残し，(12)は肩部にえぐりがあり，その部分が磨耗している。(13・14)は頭部を欠いた欠損品である。凹石(59図-1)は打痕による深い凹み1孔がある。(2)は表裏に1ヶ所ずつ打痕が円形に集中しているが，明瞭な凹みにまではなっていない。(3)は表のみに打痕がかなり広い範囲にみられ，わずかの凹みとなっている。磨製石斧(4)は乳棒状石斧の胴部破損品である。

第9号住居址（第59図5～22，60図）

9号址からは石鏃4，打製石斧12，凹石6，凹石兼磨石3，凹石・磨石兼叩石1，磨製石斧2，石錐1の計28点が出土。

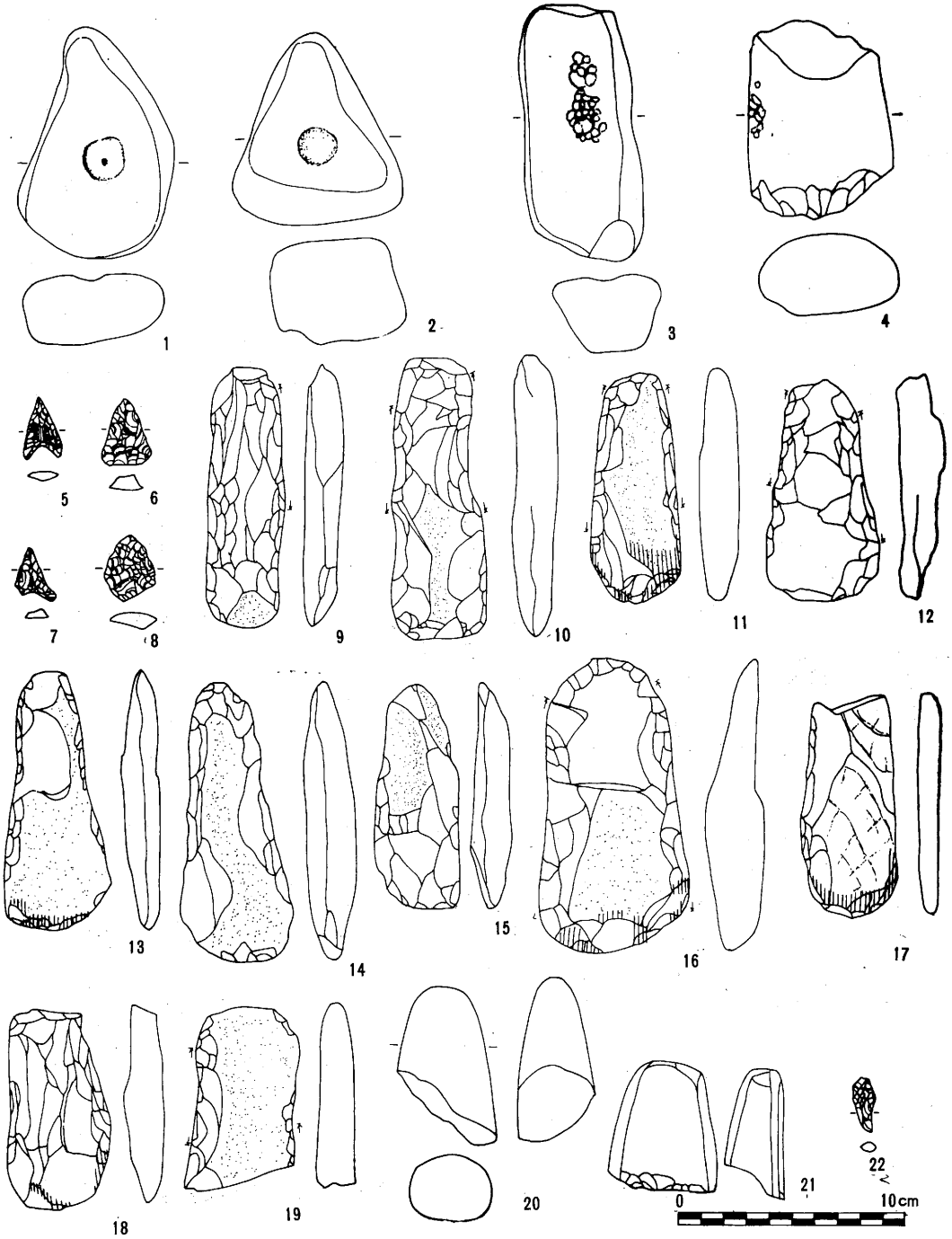
石鏃(5)は底辺にえぐりのある完形品で，表裏面の中央部が研磨されている。(7)は左脚を欠くが，脚が外に張り出した形態をとっている。(6)は全長3cmの大形品で，作りは粗い。(8)は尖頭



(1：3)

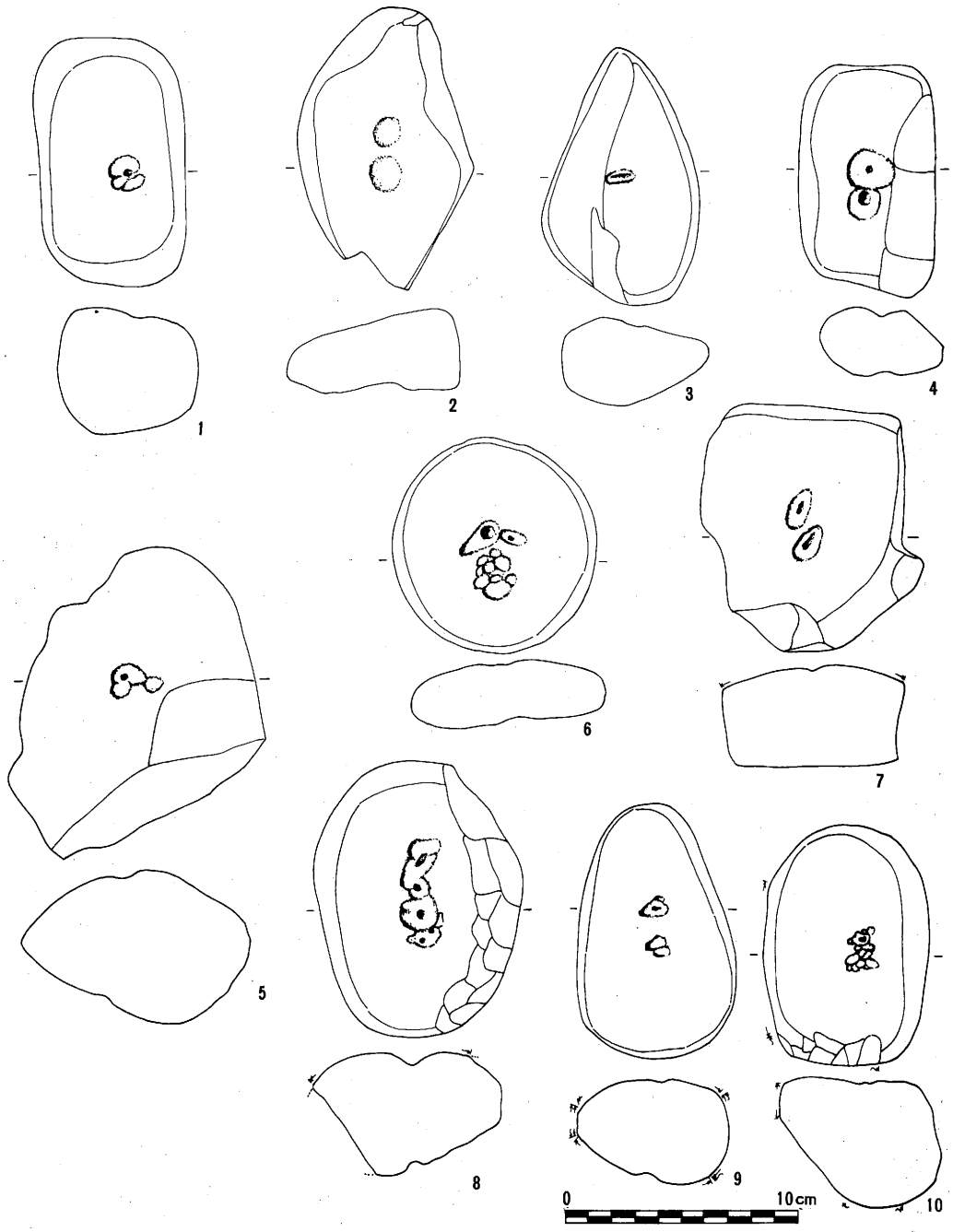
第58図　第7号，第8号住居址出土石器

(1～8：7号，9～14：8号)



(1：3)

第59図　第8号，第9号住居址出土石器
(1～4：8号，5～22：9号)



(1：3)

第60図　第9号住居址出土石器

器形を呈する。

打製石斧（9）は幅3.5cmほどの細身で，刃部には原石面が残されている。（10）は胴部上半がややくびれ，磨耗している。刃は直線状をなす。（11～18）は撥形である。（11・12）は頭部から胴部下半まで両縁が磨耗している。（13～15）は頭部が尖頭状をなしており，それぞれ表面には原石面を大きく残している。（16）は以上の打製石斧と比較し，幅広で，頭部から刃部まで両縁が磨耗し，刃部には顕著な擦痕がある。（17・18）は頭部を，（19）は胴下半部を欠いている。

凹石（60図1）は表裏に打痕の集中した各1孔がある。（2）は，表面のみに打痕が集中した部分が2ヶ所あり，わずかな凹みとなっている。（3）は表に不鮮明な1孔がある。（4）は表裏各2孔があり，磨耗による深い凹みである。（5）は3分の1ほどを欠失しているが，ロート状の凹みが表裏に各1つずつある。（6）は扁平な円形礫の中央部付近に打痕が集まり凹みとなっている。凹石兼磨石（7）は表に浅い2孔があり，表面にのみ研磨痕がある。（8）は表に一連ながりの4孔があり，ツルツルに磨かれている。凹石・磨石兼叩石（9）は表に2孔，裏に3孔がある。磨痕は表裏両面にあるが，表面は特に顕著で，研磨のために凹みは痕跡的になっている。周辺は打痕も著しい。（10）は表面に打痕が集中し，左辺には狭長な平坦磨面が残され，下端および裏面の下面端に打痕が認められる。

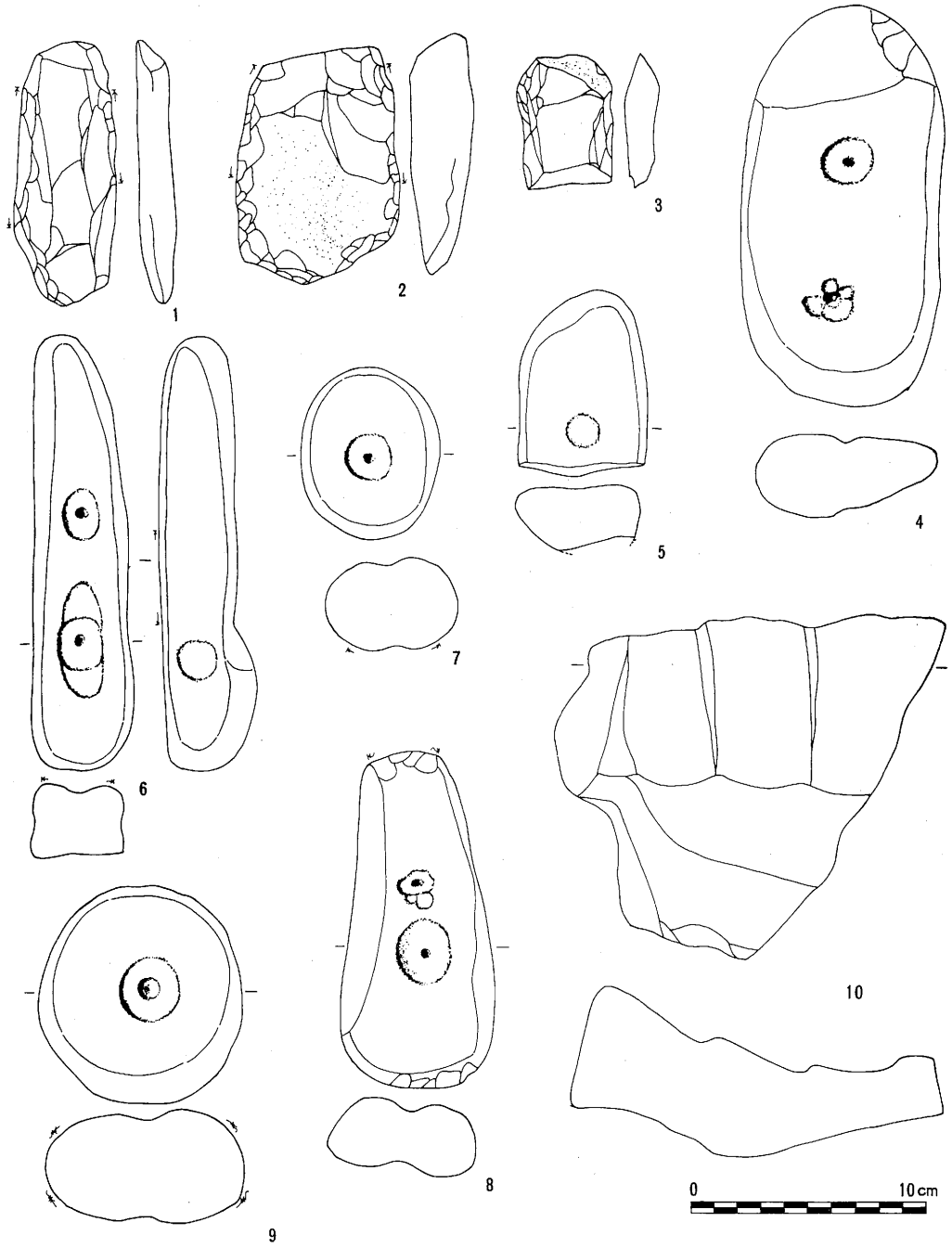
磨製石斧（59図-21）は定角式の頭部残欠である。（20）は乳棒状の頭部残欠品である。石錐（22）は錐部が1cmほどの小さなもので，錐先は右に曲がっている。

第10号住居址（第61図）

打製石斧3，凹石2，凹石兼磨石2，凹石兼叩石1，凹石・磨石兼叩石1，石皿1，砥石1，加工痕のある礫1の計11点が出土している。

打製石斧（1）は楕円形を呈し，両縁に磨耗痕を残す。（2）は頭部を欠くが，幅広な石斧である。（3）は胴部以下を欠失している。凹石（4）は扁平楕円形の両端に表裏とも2孔があり，表面は打痕によってできた深い凹みが，裏には打痕による浅い凹みがある。（5）は半欠品であるが，表面に円形に打痕の集中部分がある。まだ凹みとはなっていない。凹石兼磨石（6）は棒状の礫の表面に2孔，左・右側面に各1孔があり，表面のみに磨面がある。（7）は表裏に各1孔ずつあるが，裏面の凹みは研磨のため浅くなっている。凹石兼叩石（8）は表に2孔，裏に1孔と打痕の集中している部分が2ヶ所ある。敲打痕は先端にみられる。凹石・磨石兼叩石（9）は円形礫の表面に1，裏面に2孔あり，表裏面は平坦に研磨され，全周縁に打痕がある。

砥石（10）は表面に4ヶ所の砥面があり，幅は4cmである。幅4cm前後のものを研いだものと思われる。石皿（64図-5）は30×30cmの角形の完形品である。磨面はわずかに凹みとなる程度で，ほぼ平坦を呈している。磨痕はあまり顕著でない。



(1：3)

表 61 図　第 10 号住居址出土石器

第5号集石（第62図1～3）

6号住居址の上層にあり，打製石斧1，磨石1，凹石1が出土している。

打製石斧（1）は表面に原石面を残し，両縁に磨耗痕を残す重量感にあふれた石斧である。凹石（2）は表面に2孔がみられる。磨石（3）は表裏に平坦な磨面をもつもので周辺が若干破損している。

遺構外出土石器（第62図4～19，第63図1～5）

遺構外から出土した石器は，主として8号住居址より東の地域C_{20}～C_{23}までの区間で出土したものである。石鏃1，石匙5，打製石斧10，凹石1，凹石兼磨石1，磨石兼叩石1，磨製石斧1，砥石1の計21がある。

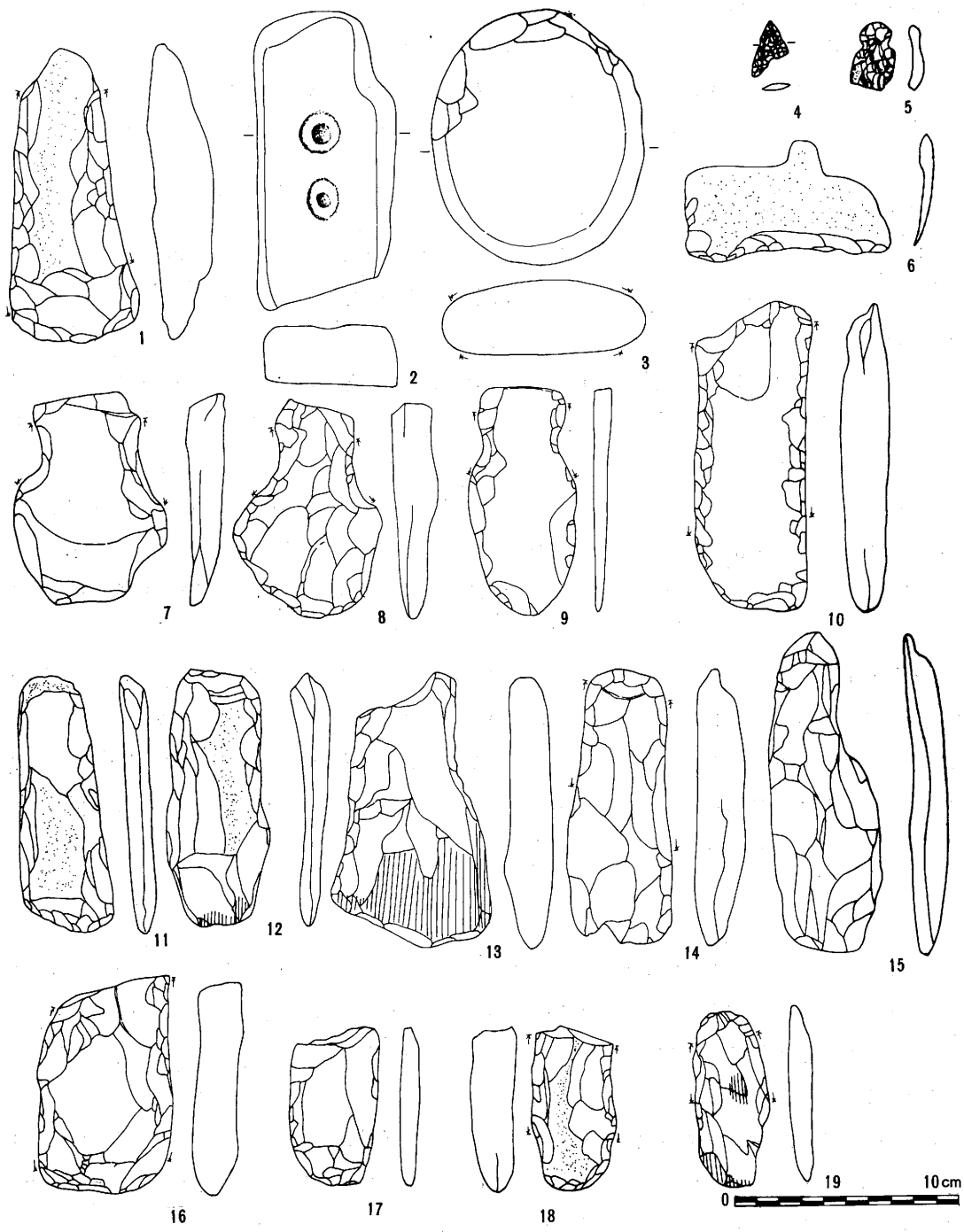
石鏃（4）はえぐりの深い精巧品。右脚を失っている。石匙（5）は縦型の小形品，他の石匙は大型品で，（6）は横長で，表面には大きく原石面を残す。（7・8）は刃部が円形状を呈し，（7）はつまみ部分のくびれ部に加工を行った程度で粗い作りである。（8）は肩のくびれ部が大部磨耗している。（9）は縦長で，薄い。打製石斧（10～12）は短冊形，（13）は撥形で，擦痕が顕著である。（14）は刃部の1部を，（15）は頭部の1部を，また（16・17）は胴上半を，さらに（18）は下半部を失っている。（19）は全長7.5cmの小形品で，胴上半の両縁に磨耗があり，刃部および胴中央部に擦痕がある。

凹石（63図-1）は表に一連ながりの4孔，裏に2孔，左右両辺に2孔ずつの凹みがあり，ともに磨耗による深いロート状をなしている。凹石兼磨石（2）は表面の2ヶ所に明瞭な凹みとはならない打痕集中部分があり，平坦に研磨されている。磨石兼叩石（3）は球形を呈し，全面に研磨および打痕が残されている。磨製石斧（4）は定角式で刃部に使用痕が残る。砥石（5）は表裏および左辺が砥面となり，表裏面はU字状に深く研磨されている。

ま　と　め

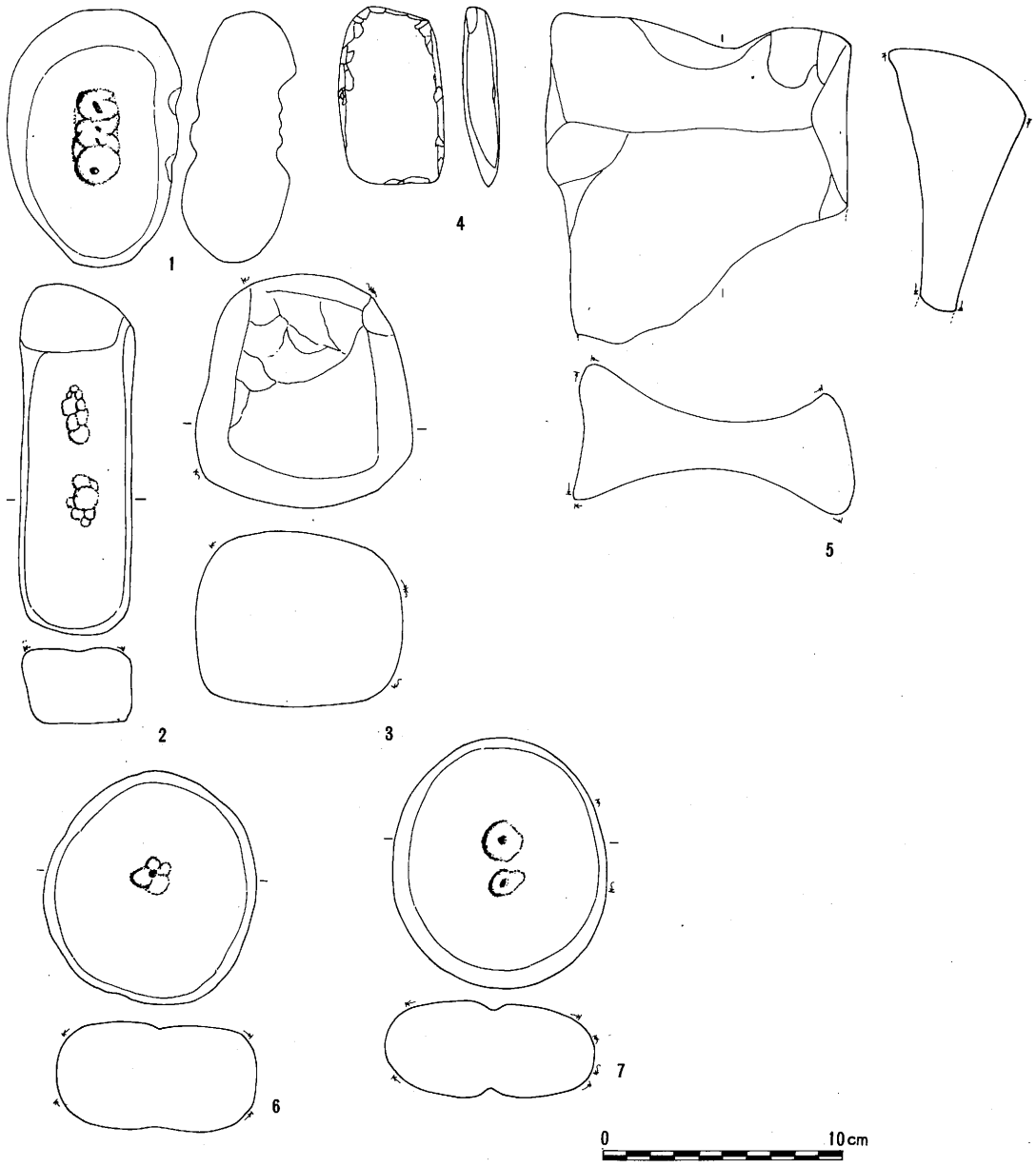
以上，ABトレンチおよびCトレンチ出土の全石器を簡単にみてきた。総数210点の出土石器の内訳は石鏃19，石匙8（小形2，大形粗型6），打製石斧90，凹石51，磨石3，凹石兼磨石12，凹石兼叩石1，磨石兼叩石1，凹石・磨石兼叩石3，磨製石斧12，石錐2，石棒3，砥石2，石皿2，立石1である。

打製石斧は全出土石器の42.8％を占め，凹石は24.2％を占める。これに凹石との兼用石器の比率を加えると凹石としての機能を有する石器は31.8％を占めることになる。つまり石器をみる限りにおいては小段遺跡は打製石斧と凹石とによって支えられていたと言っても過言でない。このような状態は中信および天竜川流域の縄文中期後半の遺跡ではごく一般的な在り方である。本遺跡もこうした特徴を如実に表しているといえよう。しかし仔細に内容を検討してみると，幾つかの相違点も見出すことができる。その一例として石皿があげられる。凹石との兼用品も加えるとかなりの数量出土している磨石と対に使用される石皿は，2点と出土も少なく，しかも中期に伴出する楕円形



(1：3)

第62図　第5号集石，遺構外出土石器
(1～3：5号集石，4～19：遺構外)



(1：3)

第63図　Cトレンチ遺構外，第5号住居址出土石器
(1～5：遺構外，6･7：第5号住居址)

で凹み面を有する典型的なものが出土していない。このほかに剝片石器の類も皆無に等しく，しかも黒曜石，チャートなどの剝片も余り検出されていない。本遺跡の特徴の1つに数えておいてよい

(1：6)

第64図　第3, 5, 10号住居址出土石器

であろう。

多出した凹石・磨石について簡単に触れておきたい。凹石の凹みに関してはすでに長崎元広氏によって何種類かに分類整理がなされているが（長崎他「長塚遺跡」），本遺跡の凹石の凹孔をみると，打痕が1点に集中して凹みになるものが主体をなし，磨耗により凹みになったものが若干出土した。またごく少量であるが，この中間のようなもので，最初打撃によりある程度の凹みをつけた後，磨耗によってさらに深い凹みとなったようなものもあった。何らかの機能差を示しているといえよう。

小段遺跡から出土する河原石の表面を良く観察してみると，礫の表面に打痕がある程度の範囲（1cm前後）に集中し，ザラついた部分が認められるものがかなりの数量含まれていることが分かった。このような礫の中には打痕がさらに集中し，わずかな凹みにまでなっているものも多かった。このような使用初期とも思われるような状態の凹石は，その多くが片面にのみしか打痕集中部分が認められないことも分かった。つまり最初片面に打撃によりある程度の深さになるまで凹みが作られた後，その礫を裏返し，さらにそこに凹みをつけたことを示しているものと受取られた。あるいは凹石の凹みの深さはある程度の深さになれば凹石としての機能が果たせなかったのかもしれない。ある深さまで凹みが達すると次々と新しい凹み孔が作られたのかもしれず，その礫につける凹みの数が限界にくると，新しい礫が次々に使用されていったのかもしれない。

このほかに磨石との兼用を示す凹石で，両面に凹孔があり，その片面の凹みが研磨のために痕跡的になるまでに擦り減っているものがかなり目についた。このことは，これらの石器は，最初に凹石としてまず片面に凹孔がつけられ，さらに裏にして凹みをつくり，両面凹みができた後，この凹石は磨石として使用され，まず片面が研磨されて以前あった凹みが擦り減ったことを示していよう。凹石と磨石は一連の作業工程の中で同時に使用された場合も多かっただろうが，そのほかにも凹石の有する機能と磨石の有する機能とは分離した作業目的のために使用されたこともあったことを示しているのではないだろうか。

縄文中期中葉から後葉にかけて多出する凹石の性格を究明することなしに縄文時代中期の生活様式を明らかにすることは困難であろう。そうした意味で小段遺跡で出土した多数の凹石は多くの問題を提出していよう。（小林康男）

第1表　地点別出土石器一覧表

		石鏃	石匙	打製石斧	石皿	凹石	磨石	凹石・磨石	凹石・叩石	磨石・叩石	凹石・磨石・叩石	磨製石斧	石錐	石棒	立石	砥石	計
ABトレンチ	2号住	3		2		1											6
	2号集石					3	2	2									7
	遺構外	1	1	2		1											5
Cトレンチ	3号住	1	2	15		9		1				3	1	2			34
	4号住	3		15		9		1				3					31
	5号上			5		3						1			1		10
	5号下	1		9	1	6		1			1			1			20
	6号住	2		9		3						1					15
	7号住	2		2		3		1									8
	8号住	1		5		3						1					10
	9号住	4		12		6		3			1	2	1				29
	10号住			3	1	2		2	1		1					1	11
	5号集石			1		1	1										3
	遺構外	1	5	10		1		1		1		1				1	21
合計		19	8	90	2	51	3	12	1	1	3	12	2	3	1	2	210

第2表　出土石器一覧表

（単位cm）

図版番号	No.	遺構名	種別	最大長	最大幅	最大厚	石材	備考
51	1	2号住	石鏃	1.9	1.6	0.4	黒曜石	
	2	〃	〃	1.8	1.4	0.3	〃	A－25褐色土
	3	〃	〃	2.1	1.4	0.3	〃	床面直上
	4	2号住	打製石斧	11.2	5.7	1.8	頁岩	〃
	5	〃	〃	11.2	3.8	1.3	〃	〃
	6	2号住	凹石	11.7	8.3	3.8	砂岩	〃
	7	2号集石	〃	13.9	8.2	3.5	〃	
	8	〃	〃	8.4	6.9	3.0	〃	
	9	〃	〃	8.7	7.0	4.2	安山岩	
	10	2号集石	凹・磨	8.2	6.4	2.8	砂岩	
	11	〃	〃	11.2	8.0	5.3	〃	
	12	2号集石	〃	10.6	9.8	5.2	砂岩	
	13	〃	〃	8.1	8.9	4.7	〃	
	14	遺構外	石鏃	2.8	1.8	0.4	黒曜石	A－26褐色土
	15	〃	石匙	2.2	2.8	0.5	チャート	A－25褐色土上面
	16	〃	打製石斧	8.3	4.4	1.2	粘板岩	A－14褐色土上面
	17	〃	〃	12.3	5.6	2.1	硬砂岩	黒色土A－14
	18	〃	凹石	14.1	5.9	2.8	砂岩	褐色上面B－16
52	1	3号住	石鏃	2.0	1.3	0.3	黒曜石	床面直上
	2	〃	打製石斧	12.2	4.2	1.7	頁岩	褐色土
	3	〃	〃	10.1	4.1	1.6	〃	褐色土
	4	〃	〃	10.8	4.2	1.6	泥岩	床面直上
	5	〃	〃	11.9	4.9	2.4	ホルンフェルス	褐色土下層
	6	〃	〃	9.4	4.1	1.2	ホルンフェルス	褐色上面
	7	〃	〃	8.3	3.7	1.4	粘板岩	黒色土
	8	〃	〃	12.3	4.3	1.7	輝緑凝灰岩	褐色土
	9	〃	〃	11.2	4.5	1.8	粘板岩	炉址内
	10	〃	〃	10.5	5.3	1.7	頁岩	褐色上面
	11	〃	〃	11.6	4.7	1.7	粘板岩	黒褐土
	12	〃	〃	12.1	7.2	1.6	砂岩	黒色土
	13	〃	〃	12.3	5.1	2.6	ホルンフェルス	黒褐色土
	14	〃	〃	(10.0)	4.4	1.0	〃	褐色土
	15	〃	〃	(9.8)	6.2	2.1	泥岩	〃
	16	〃	〃	(12.2)	5.3	2.1	頁岩	黒色土
	17	〃	〃	9.5	3.7	1.1	輝石安山岩	〃　下層
	18	〃	〃	9.6	4.0	1.1	粘板岩	黒色土
53	1	〃	凹石	12.9	5.3	2.8	砂岩	〃
	2	〃	〃	12.8	6.3	3.4	〃	〃
	3	〃	〃	8.8	8.6	4.7	〃	褐色土
	4	〃	〃	(10.5)	5.7	4.5	砂岩	褐色土
	5	〃	〃	(11.2)	6.4	6.0	〃	〃　下層

図版番号	No.	遺構名	種別	最大長	最大幅	最大厚	石材	備考
53	6	3号住	凹石	(7.9)	5.0	2.9	砂岩	黒色土
	7	〃	〃	(8.7)	(6.6)	2.6	石英安山岩	〃
	8	〃	〃	(10.1)	5.1	4.2	砂岩	褐色土
	9	〃	〃	8.0	5.7	3.3	砂岩	黒色土
	10	〃	〃	12.2	7.7	3.5	砂岩	褐色上面
	11	〃	凹・磨	15.2	6.5	3.4	〃	黒色土
	12	〃	磨製石斧	9.5	6.4	3.0	〃	褐色下層
	13	〃	〃	(8.5)	6.4	2.6	凝灰岩	
	14	〃	〃	(4.3)	4.9	(0.9)	流紋岩	黒色土
	15	〃	石錐	4.3	1.2	0.4	チャート	褐色土下層
54	1	4号住	石鏃	2.3	1.3	0.3	黒曜石	褐色土（−60）
	2	〃	〃	1.7	1.7	0.3	〃	〃（−45）
	3	〃	〃	2.1	0.6	0.3	〃	黒色土（−30）
	4	〃	打製石斧	12.3	4.6	2.0	粘板岩	（褐色土（−80）
	5	〃	〃	12.4	4.4	1.7	〃	
	6	〃	〃	11.1	4.6	1.5	頁岩	黒色土（−20）
	7	〃	〃	11.2	5.1	1.1	粘板岩	褐色土（−75）
	8	〃	〃	11.4	3.5	1.1	〃	褐色上面（−35）
	9	〃	〃	10.8	5.5	1.4	頁岩	褐色度（100）
	10	〃	〃	10.0	6.6	2.2	安山岩	〃（−80）
	11	〃	〃	8.0	5.0	1.9	粘板岩	褐色度（−60）
	12	〃	〃	6.7	4.1	0.8	〃	黒色度（−30）
	13	〃	〃	6.6	4.5	1.2	頁岩	〃（−18）
	14	〃	〃	(10.0)	6.3	2.0	ホルンフェルス	黒色度（−20）
	15	〃	〃	(9.8)	5.4	1.4	粘板岩	褐色上面（−30）
	16	〃	〃	(6.3)	3.7	1.1	ホルンフェルス	〃（−35）
	17	〃	〃	11.3	9.5	3.2	安山岩	褐色土
	18	〃	凹石	20.8	5.5	3.2	砂岩	〃
	19	〃	〃	(10.2)	6.6	2.8	〃	褐色土床面直上（−90）
55	1	〃	〃	(10.7)	6.0	2.6	石英安山岩	褐色土（−45）
	2	〃	〃	(9.1)	(3.3)	4.2	砂岩	黒色土（−32）
	3	〃	〃	12.0	10.5	4.8	安山岩	褐色上面（−30）
	4	〃	凹・磨	7.1	7.6	3.1	砂岩	褐色土（−80）
	5	〃	磨製石斧	(4.5)	(4.9)	2.0	蛇紋岩	〃（−80）
	6	〃	〃	5.7	3.0	0.9	流紋岩	〃（−45）
	7	〃	〃	3.8	1.8	0.5	泥岩	褐色上面（−30）
	8	5号住上層	石鏃	1.6	0.9	0.1	黒曜石	黒色土
	9	〃	打製石斧	11.2	4.0	1.6	粘板岩	褐色上層
	10	〃	〃	10.8	5.1	1.9	硬砂岩	黒色土
	11	〃	〃	10.3	4.5	1.2	輝緑凝灰岩	〃
	12	〃	〃	(7.6)	4.4	1.8	粘板岩	褐色土

図版番号	No.	遺構名	種別	最大長	最大幅	最大厚	石材	備考
55	13	5号住上層	打製石斧	(6.6)	4.3	1.6	硬砂岩	褐色上面
	14	〃	凹石	13.2	7.8	2.7	砂岩	黒色土
	15	〃	〃	10.8	5.8	3.9	〃	〃 (−15)
	16	〃	〃	9.9	9.1	2.1	〃	〃 (−20)
	17	〃	磨製石斧	(7.1)	4.6	3.6	閃緑岩	褐色土
56	1	5号住下層	打製石斧	13.7	5.8	3.0	頁岩	褐色土下 (−80)
	2	〃	〃	13.0	4.7	1.3	粘板岩	褐色土 (−65)
	3	〃	〃	9.9	3.8	1.6	泥岩	〃 (−60)
	4	〃	〃	8.0	4.5	1.5	硬砂岩	〃 (−55)
	5	〃	〃	10.9	6.1	2.2	頁岩	〃 (−70)
	6	〃	〃	17.3	5.8	3.0	〃	〃 (−75)
	7	〃	〃	6.5	4.4	1.5	〃	〃 (−45)
	8	〃	〃	(6.0)	4.4	1.3	〃	〃 (−65)
	9	〃	凹石	13.7	4.7	3.4	砂岩	〃 (−75)
	10	〃	〃	10.4	7.1	3.4	〃	〃 (−45)
	11	〃	〃	12.3	10.6	3.0	〃	〃
	12	〃	〃	8.2	6.8	2.5	グリンタフ	〃 (−50)
	13	〃	〃	11.2	8.5	3.2	砂岩	〃 (−70)
57	1	6号住居	石鏃	1.5	1.2	0.3	黒曜石	〃
	2	〃	〃	2.7	1.5	0.3	チャート	〃
	3	〃	打製石斧	11.2	4.6	1.7	粘板岩	〃
	4	〃	〃	12.0	5.8	1.7	泥岩	〃
	5	〃	〃	8.6	4.5	1.4	硬砂岩	〃
	6	〃	〃	8.1	4.4	1.4	輝緑凝灰岩	〃
	7	〃	〃	11.7	4.2	1.4	粘板岩	〃
	8	〃	〃	(9.6)	4.5	2.0	硬砂岩	黒色土
	9	〃	〃	(14.0)	5.2	2.2	頁岩	黒色土下
	10	〃	〃	9.3	4.6	1.2	輝緑凝灰岩	褐色上面
	11	〃	〃	13.2	4.2	1.5	頁岩	〃
	12	〃	凹石	16.1	8.2	2.8	砂岩	〃
	13	〃	〃	9.9	(6.4)	5.3	〃	〃
	14	〃	磨製石斧	(11.9)	5.1	3.8	グリンタフ	〃
58	1	7号住居	石鏃	2.1	1.6	0.3	黒曜石	
	2	〃	〃	(1.4)	(1.5)	0.3	ハリ質安山岩	褐色土
	3	〃	打製石斧	10.8	4.8	1.5	頁岩	黒色土
	4	〃	〃	(7.4)	4.6	2.3	グリンタフ	
	5	〃	凹石	12.8	8.3	5.0	砂岩	褐色土
	6	〃	〃	11.9	6.0	5.0	〃	黒色土
	7	〃	〃	(15.3)	10.3	4.8	〃	〃
	8	〃	凹・磨	11.0	7.5	5.2	安山岩	褐色土
	9	8号住居	石鏃	3.2	2.2	0.8	黒曜石	〃

図版番号	No.	遺構名	種別	最大長	最大幅	最大厚	石材	備考
58	10	8号住居	打製石斧	11.2	4.3	1.9	輝緑凝灰岩	褐色土
	11	〃	〃	10.0	4.4	1.9	頁岩	〃
	12	〃	〃	10.8	7.1	1.8	粘板岩	〃
	13	〃	〃	(11.6)	6.6	2.1	泥岩	〃
	14	〃	〃	7.7	4.4	1.5	頁岩	〃
59	1	〃	凹石	10.2	6.5	3.1	砂岩	〃
	2	〃	〃	8.4	7.5	4.4	〃	〃
	3	〃	〃	10.6	5.2	3.0	〃	〃
	4	〃	磨製石斧	(8.5)	6.3	3.5	グリンタフ	〃
	5	9号住居	石鏃	2.6	1.7	0.4	黒曜石	〃
	6	〃	〃	2.9	2.2	0.7	〃	〃
	7	〃	〃	2.4	1.4	0.4	〃	〃
	8	〃	〃	2.9	2.2	0.6	チャート	〃
	9	〃	打製石斧	11.5	3.4	1.7	頁岩	黒色土
	10	〃	〃	12.3	4.2	1.9	硬砂岩	〃
	11	〃	〃	10.1	4.0	1.7	頁岩	〃
	12	〃	〃	9.7	4.9	1.9	泥岩	〃
	13	〃	〃	11.4	4.7	1.6	硬砂岩	〃
	14	〃	〃	12.3	4.9	2.1	輝緑凝灰岩	褐色土
	15	〃	〃	9.8	3.8	1.7	頁岩	黒色土
	16	〃	〃	12.9	6.7	2.6	硬砂岩	
	17	〃	〃	(9.5)	4.2	0.9	頁岩	黒色土
	18	〃	〃	8.7	4.4	1.7	硬砂岩	〃
	19	〃	〃	(7.8)	5.0	1.8	頁岩	褐色土
	20	〃	磨製石斧	6.9	4.2	3.0	グリンタフ	
	21	〃	〃	(5.6)	4.7	2.8	砂岩	黒色土
	22	〃	石錐	2.5	1.0	0.4	黒曜石	〃
60	1	〃	凹石	10.5	6.3	5.4	砂岩	褐色土
	2	〃	〃	(12.2)	7.4	3.4	〃	〃
	3	〃	〃	11.0	6.7	3.7	〃	〃
	4	〃	〃	9.9	5.7	2.7	〃	〃
	5	〃	〃	(13.7)	11.2	6.5	〃	〃
	6	〃	〃	9.3	8.3	2.8	〃	〃
	7	〃	凹・磨	10.4	8.6	4.4	〃	〃
	8	〃	〃	11.9	(9.0)	5.2	〃	〃
	9	〃	凹・磨・叩	10.9	6.8	4.5	〃	〃
	10	〃	〃	10.3	6.9	5.5	〃	〃
61	1	10号住居	打製石斧	11.0	4.3	1.4	粘板岩	黒色土
	2	〃	〃	(9.6)	7.0	2.6	泥岩	〃
	3	〃	〃	(5.5)	3.9	1.4	硬砂岩	褐色土
	4	〃	凹石	17.3	8.3	3.5	砂岩	褐色土床面直上

図版番号	No.	遺構名	種別	最大長	最大幅	最大厚	石材	備考
61	5	10号住居	凹石	(7.7)	5.4	2.7	砂岩	褐色土・床面直上
	6	〃	凹・磨	18.5	4.4	3.2	〃	褐色土
	7	〃	〃	7.4	5.8	3.9	〃	黒色土
	8	〃	凹・叩	14.3	6.7	3.0	〃	〃
	9	〃	凹・磨・叩	9.2	8.7	4.9	安山岩	〃
	10	〃	砥石	13.4	12.5		砂岩	褐色土
62	1	第5集石	打製石斧	13.0	5.7	2.7	粘板岩	黒色土
	2	〃	凹石	(13.0)	6.2	2.6	石英安山岩	〃
	3	〃	磨石	11.3	9.2	3.3	花崗岩	〃
	4	遺構外	石鏃	2.4	1.4	0.3	黒曜石	C－23褐色土
	5	〃	石匙	2.9	1.8	0.5	チャート	黒色土
	6	〃	〃	4.9	9.2	0.6	泥岩	C－22褐色土
	7	〃	〃	9.4	6.9	1.7	砂岩	C－21 〃
	8	〃	〃	9.7	6.6	2.0	泥岩	C－1黒色土
	9	〃	〃	10.1	4.8	0.7	ホルンフェルス	C－21 〃
	10	〃	打製石斧	13.8	5.0	2.1	ヒン岩	C－23 〃
	11	〃	〃	11.5	4.0	1.2	頁岩	C－22褐色土
	12	〃	〃	11.5	4.7	1.7	ホルンフェルス	C－28 〃
	13	〃	〃	12.3	8.3	2.2	〃	C－24褐色土
	14	〃	〃	12.3	4.7	2.2	粘板岩	C－25 〃
	15	〃	〃	14.3	4.8	1.9	頁岩	C－24褐色土
	16	〃	〃	(9.6)	6.0	2.0	〃	C－23 〃
	17	〃	〃	(7.0)	3.9	0.9	粘板岩	
	18	〃	〃	(7.4)	3.8	2.0	頁岩	C－22黒色土
	19	〃	〃	7.8	3.3	1.0	〃	C－24 〃
63	1	〃	凹石	10.8	7.1	4.3	砂岩	C－25褐色土
	2	〃	凹・磨	14.4	4.5	3.2	〃	C－22 〃
	3	〃	叩石	9.6	9.0	7.3	安山岩	C－22 〃
	4	〃	磨製石斧	7.4	4.3	1.5	流砂岩	C－22 〃
	5	〃	砥石	14.4	14.8	6.4	砂岩	
	6	5号住居	凹・磨				安山岩	
	7	〃	凹・磨・叩				砂岩	
64	1	〃	立石			19.0	〃	
	2	3号住居	石棒	20.0	8.0	4.8	安山岩	
	3	5号住居	〃	21.0	14.3	14.0	花崗岩	
	4	3号住居	〃	18.8	12.6	5.2	緑泥片岩	
	5	10号住居	石皿	28.0	28.0	11.2	砂岩	
	6	5号住居	〃	30.0	34.0	12.4	〃	

第V章　結　　語

今回の調査はトレンチ発掘で終わり，遺跡と遺構を知る上では，不充分な調査であるが，調査の性質上やむを得ないところである。従って報告記述の中にも追究の足りないところがあるが，いたしかたない点である。

小段遺跡は戦後土取りにより良好な出土品が得られ私達に知られるようになった遺跡であり，その時の状況から私達は今回調査した地域よりむしろ道の西側の地域を注目していた。出土品もそちら側により多く出土していたから，今回のABトレンチは，小段遺跡の南限に近い位置でないだろうか。

ABトレンチ内に発見されている遺構中，性格の明らかでないものに西側に発掘された不整形の幾つもの小竪穴は縄文時代に関係する遺構には立証資料にとぼしく，さりとて私達が農耕作業の中では知られないものである。またこの東に発見された拳大の石を集めたような石群の状態も考古学関係の遺構では今までに出土例をきかず，近世の遺構の一つではないかと思われるが，それを立証する資料はない。

住居址として第1号は小形であり，壁も直立せず，床面・柱穴・炉址など種々，不備な点もあるが生活址の一つとしておきたい。1号址の東に発見された第2号住居址は，住居址内に大小の礫がほぼ一面にあり，住としての廃絶後，石を投入するような，何らかの風習があったのではないだろうか。一般の住居址にない点である。両住居址の時期であるが土器など，時代を知る良い資料が得られず困難であるが，僅かに得られた土器の小破片がこの遺構に関係するならば，縄文中期を少し上った時期の遺構としてよくないであろうか。

Cトレンチは，良好な遺構の連続する中に設定された結果となった。最上部の耕土から下部のローム面まで，トレンチ全域にわたり遺構の連続であり，2m幅のトレンチであったが，よくこの遺跡のもつ性格と内容を知ることができた。トレンチの西寄り1区～10区にかけて黒色土層や褐色土上面に発見された配石の存在は，発掘地域を拡げ，調査時間をかければ遺構も個別に発掘が可能であり，その生活様式の移り変わりも組立てることはできるが，調査はその生活の一端を知ったにとどまった。第5号住居址の上部で発見された立石はこれに伴う住居址は確認できなかったが，周囲の状況よりして，住居址内部に設置されたものとみても無理はないであろう。下部の住居址に石棒の折れた部分のあることを考える時，この立石は石棒と共通するものを持ちはしないだろうか。大湯の配石遺構に近い性格のものであろうか。祭祀の遺構とみるが，間違いであろうか，偶然の立石でないと筆者は確信する。

室内の遺構である埋甕にしても3号址の場合は最初のものは破損が著しかったが，こわれるような激しくというか，数多くの使用はいったい何であったろうか。5号址の埋め甕と比べる時，両者

の住いの人々の生活の違いに差があったのだろうか。

縄文中期後半のあまり時期のちがわない時に，ローム面を掘りこんだ竪穴と，全くローム面を考えず，褐色土の中，黒土の中に作られた敷石住居址が同時に存在するということは，どのような理由によるのだろうか。それぞれ違った様式をとり入れて住居址を造ったのだろうか。理由はあるはずである。

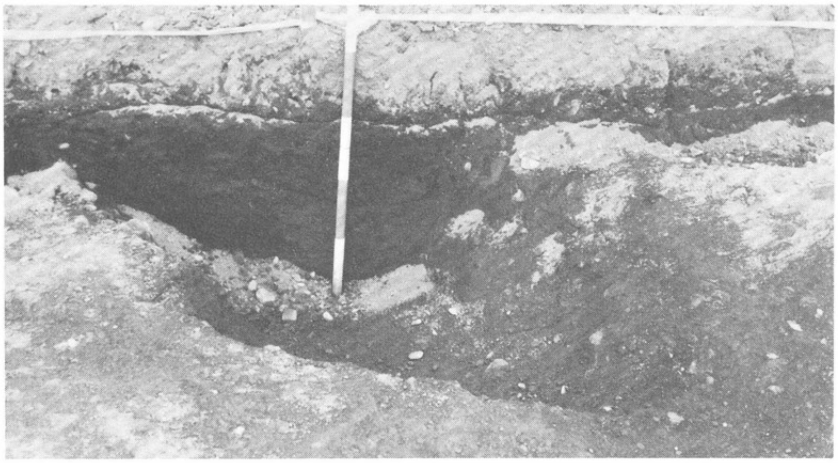
第4号址も勝坂期の土器が多いが，この土器の多いことにも種々の説があるが納得のいく説はまだ出ておらず今後の問題点である。3区～4区・13区に発見された小さな柱穴状の穴は上部の遺構に関連していると考えられるが，今後の出土例をまつより仕方ない。また5号址の炉址内より発見された小形の土製品も例があまりなく用途は不明であるが，この住居址には石棒の折れた物もあり，信仰に関係した装飾品の一つであるかもしれない。

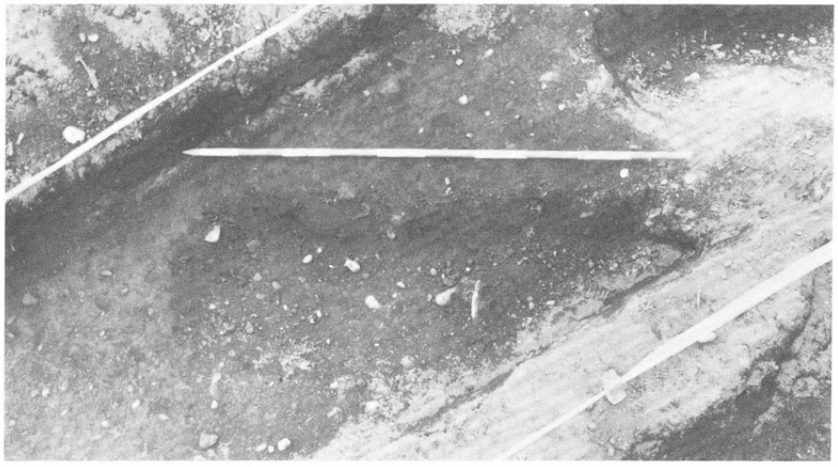
小曽部川の右岸のこの地点に縄文人に住を構えさせた主な理由は何であるのか，川にあるのか，背後の山地にあるのか，現在の私達にはいろいろな疑問が出てくる。目の前に提示されている住のプラン一つも解決できずに終わり誠に残念なことである。

今回の調査は道路の敷地や水道埋設予定地にトレンチの発掘がなされたのみであるが，小段遺跡の内容の一部を知ることができ，今まで以上にこの遺跡の重要性を知ることができ，調査は有意義であった。調査にあたり御多忙の中を参加下さった皆様に心から厚く御礼を申し上げ，報告書の作成に多忙の中を執筆下さった信州大学理学部地質学教室・酒井潤一先生に厚く御礼を申し上げたい。

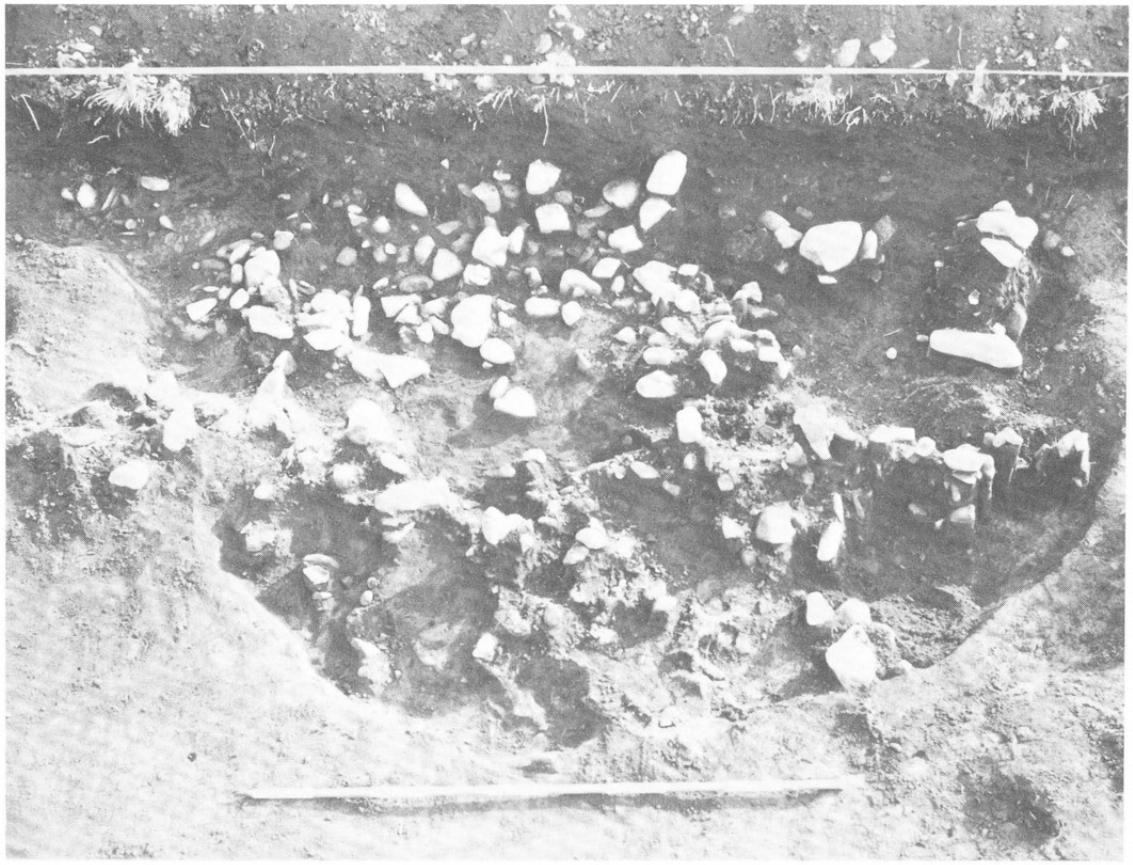
（小松　虔）

図版第１　上発掘地点A, Bトレンチ遠景
下左Bトレンチ，右Aトレンチ発掘状況

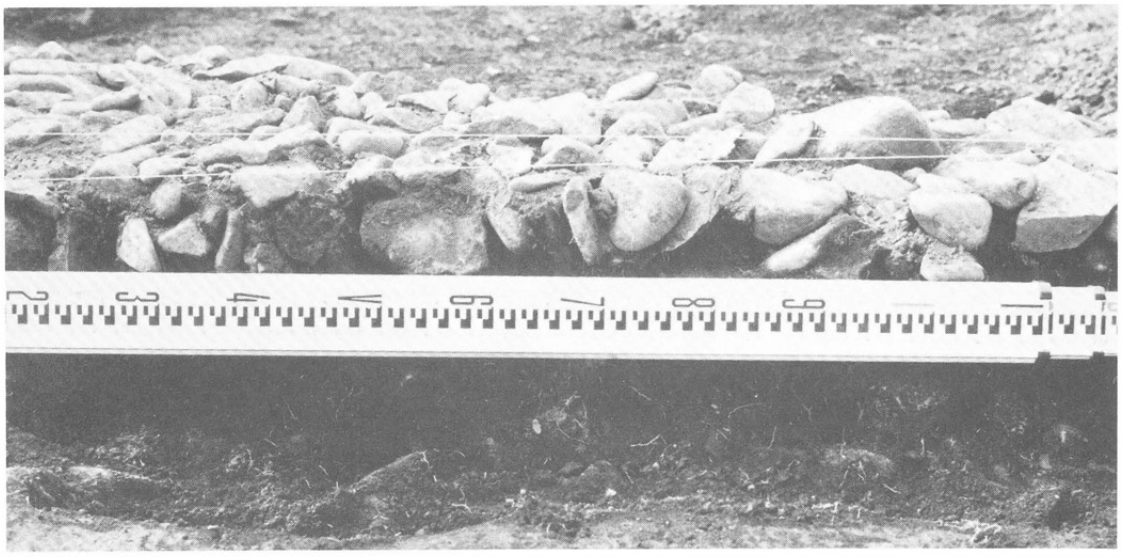




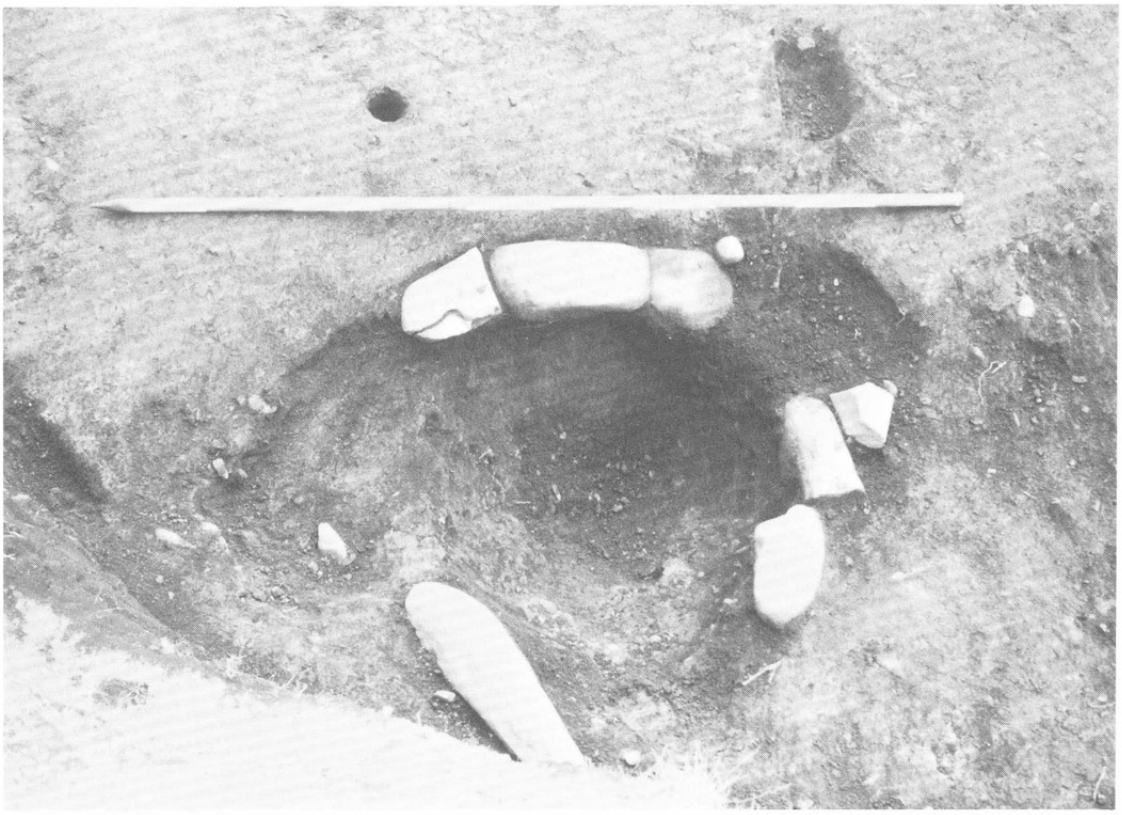
図版第２　上第１号住居址
中第３号小竪穴
下第２号小竪穴



図版第３　上第４号集石
下第２号住居址

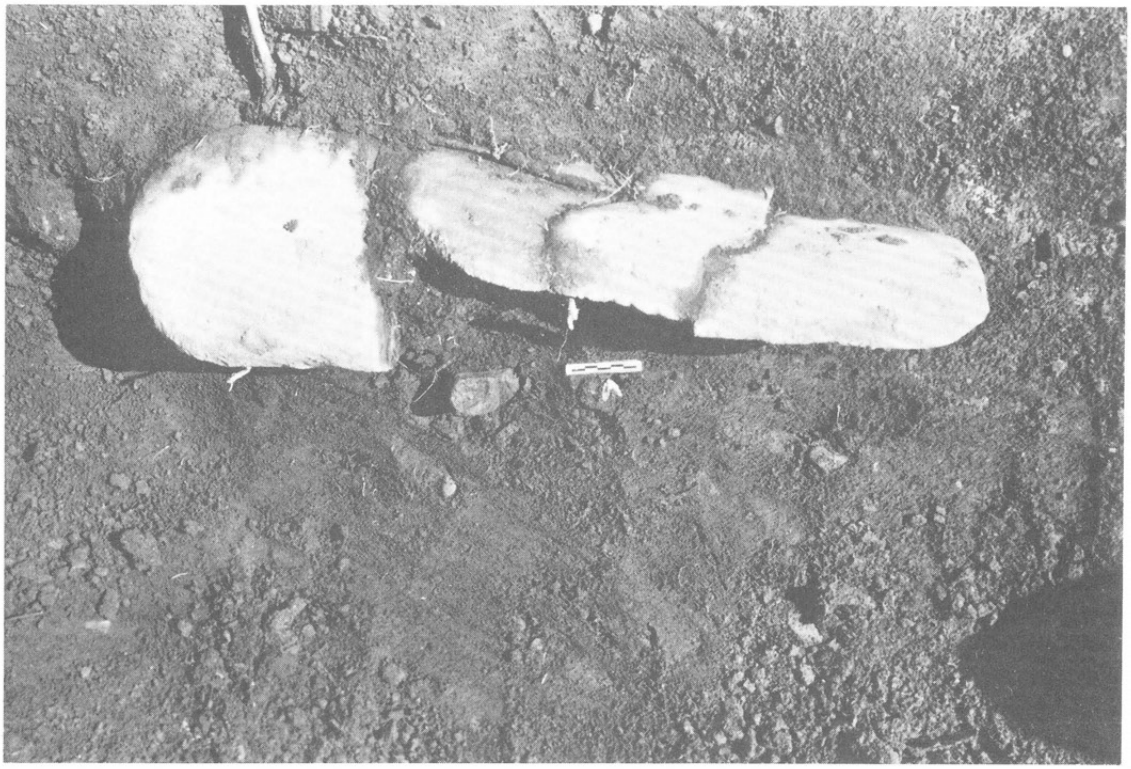


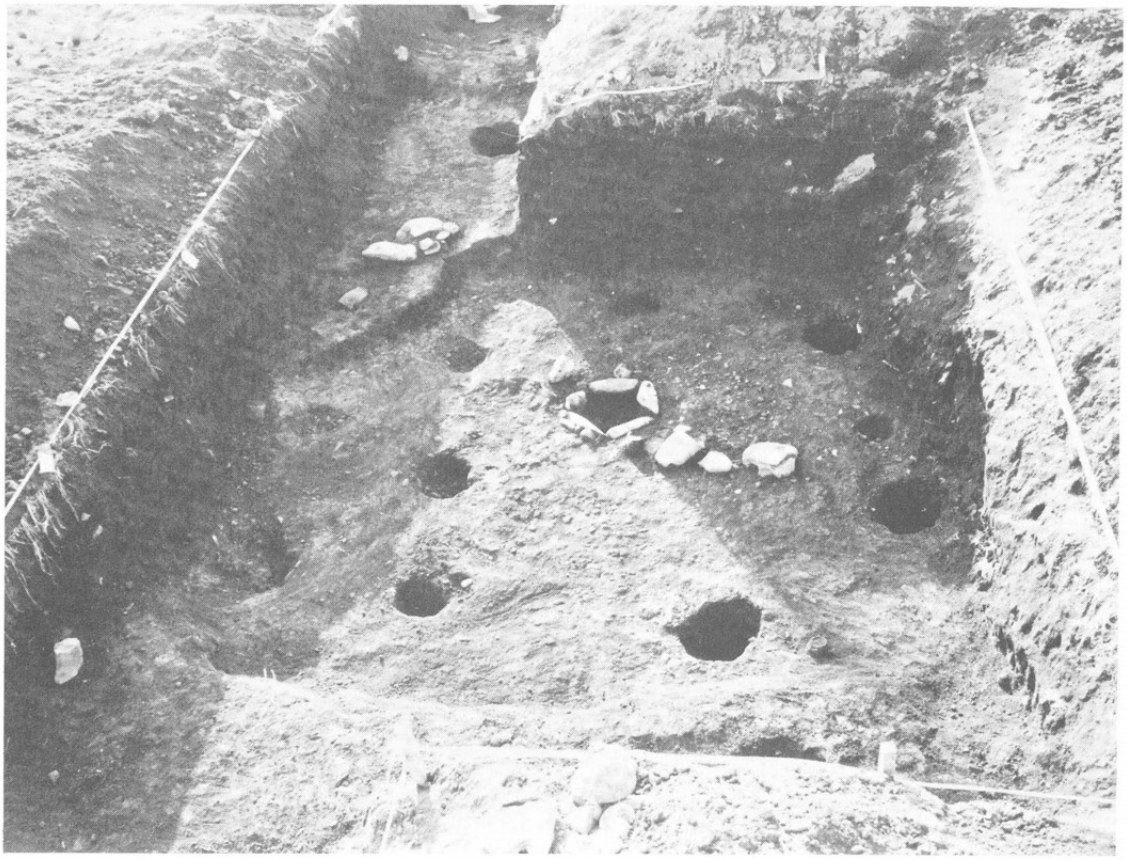
図版第４　上左第１号・２号集石
右第１号集石下掘り込み
下　第１号集石断面



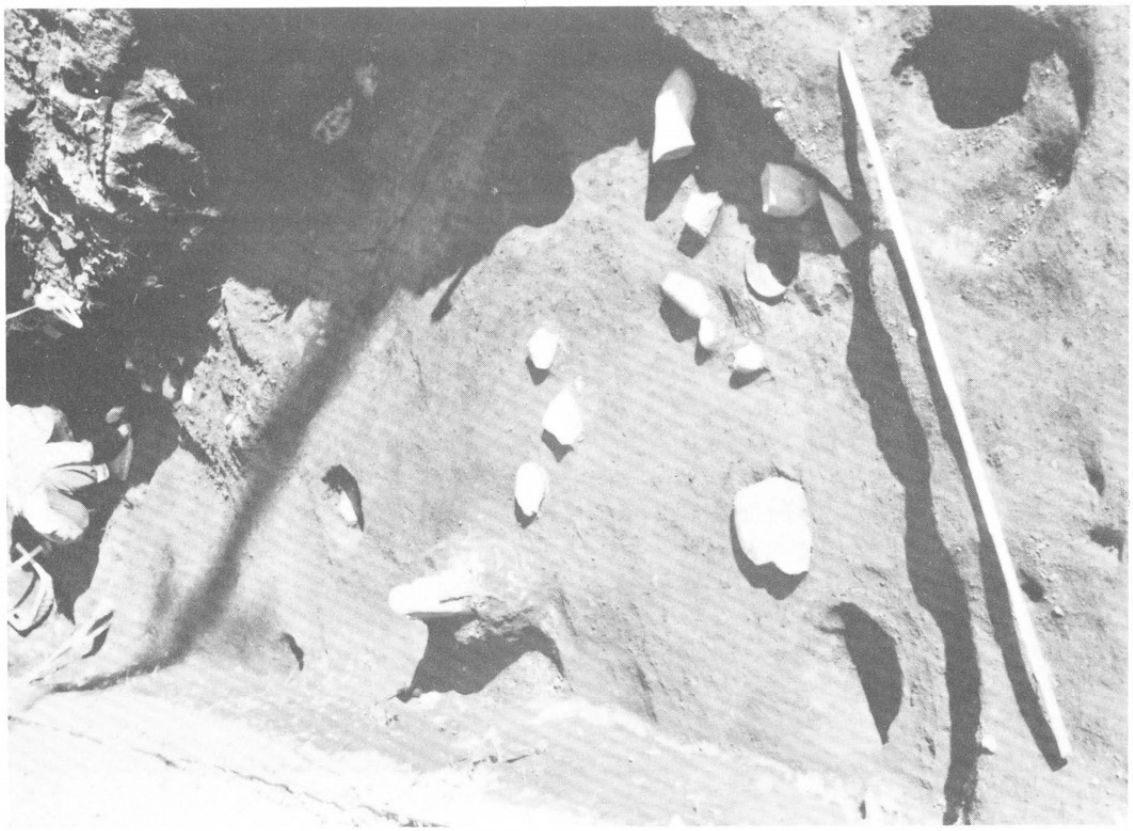
図版第5　上第3号住居址
下第3号住居址炉

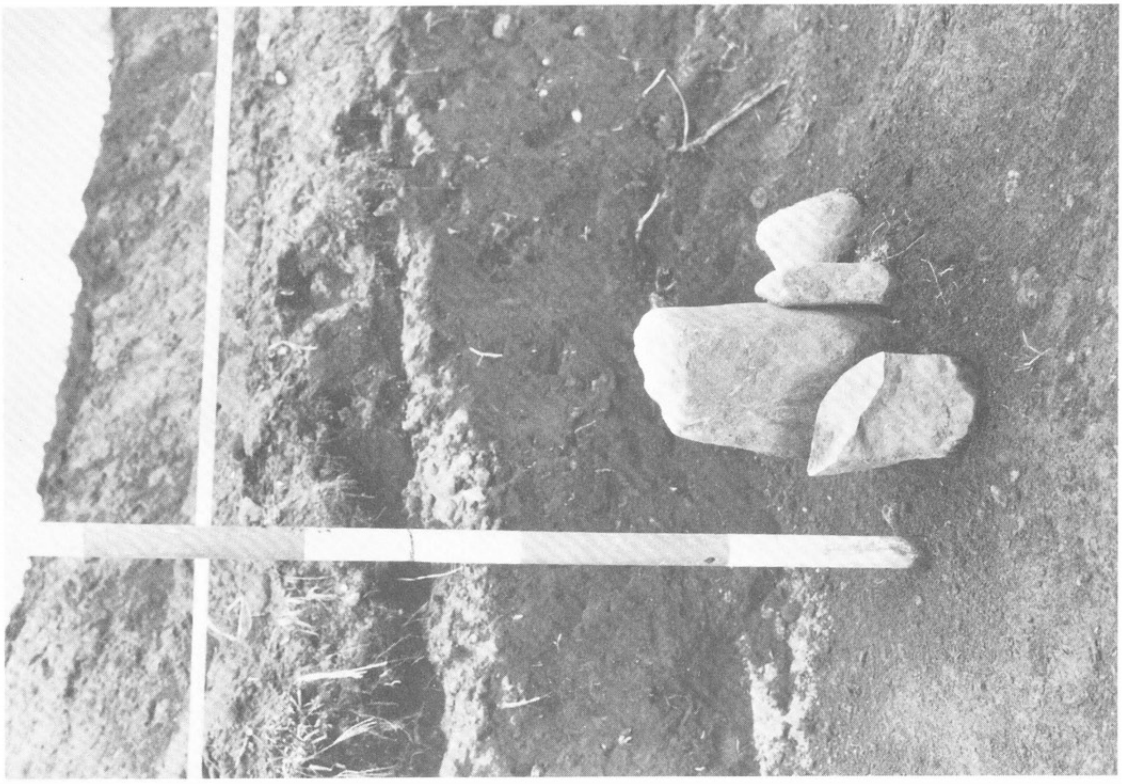
図版第6　第3号住居址埋甕出土状況



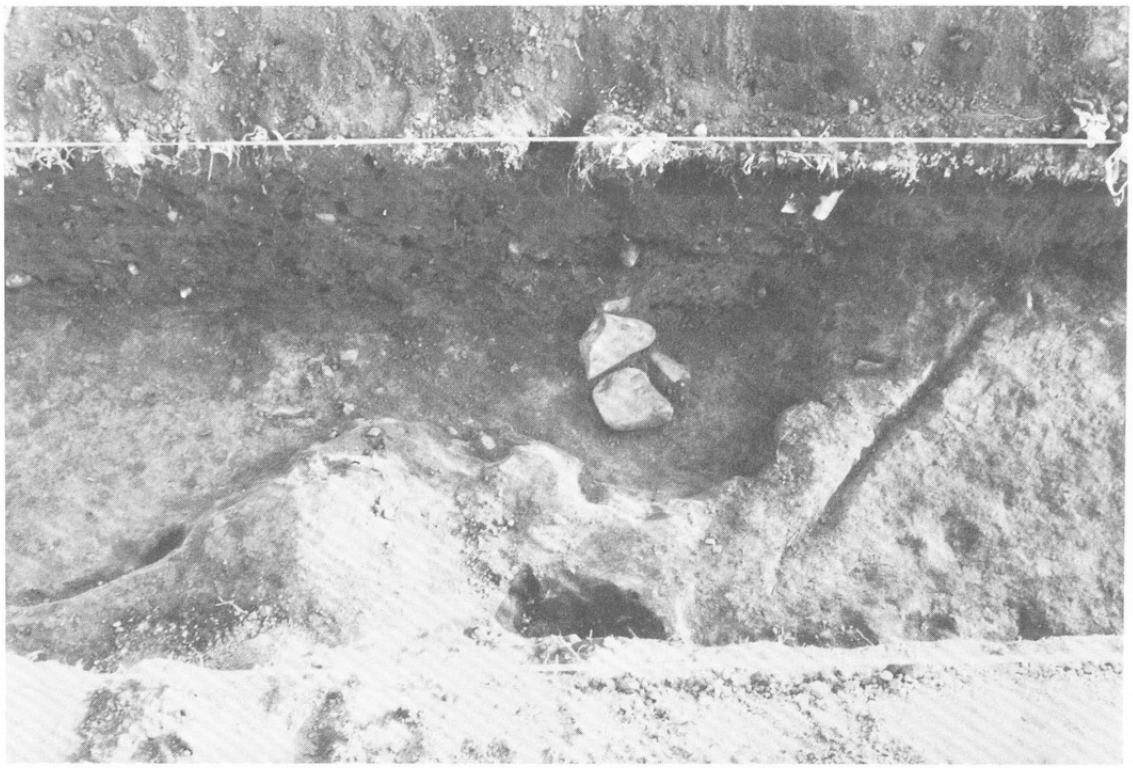


図版第7　上第4号住居址上層炉址
下第4号住居址

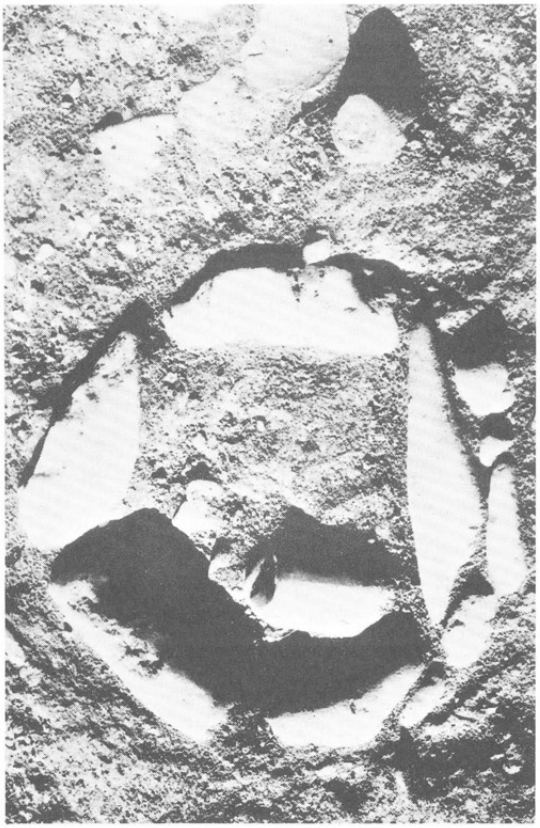


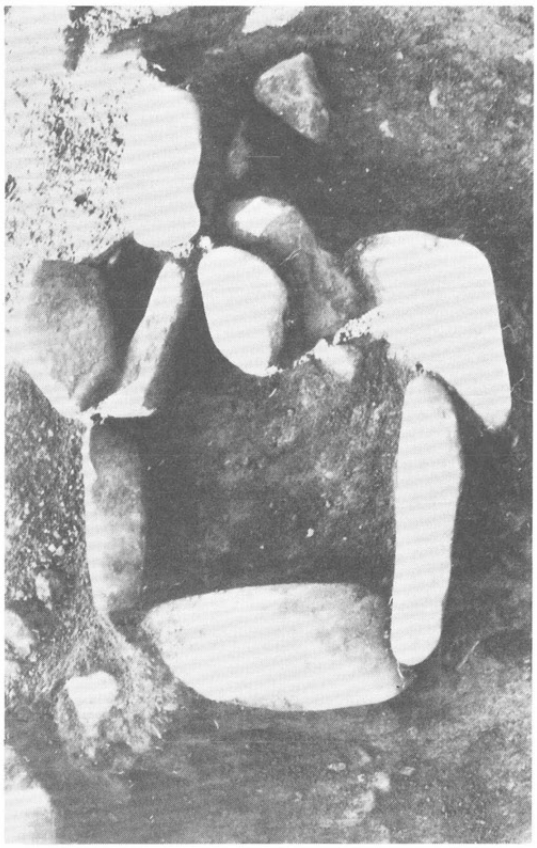


図版第８　左立石
右第５号住居址

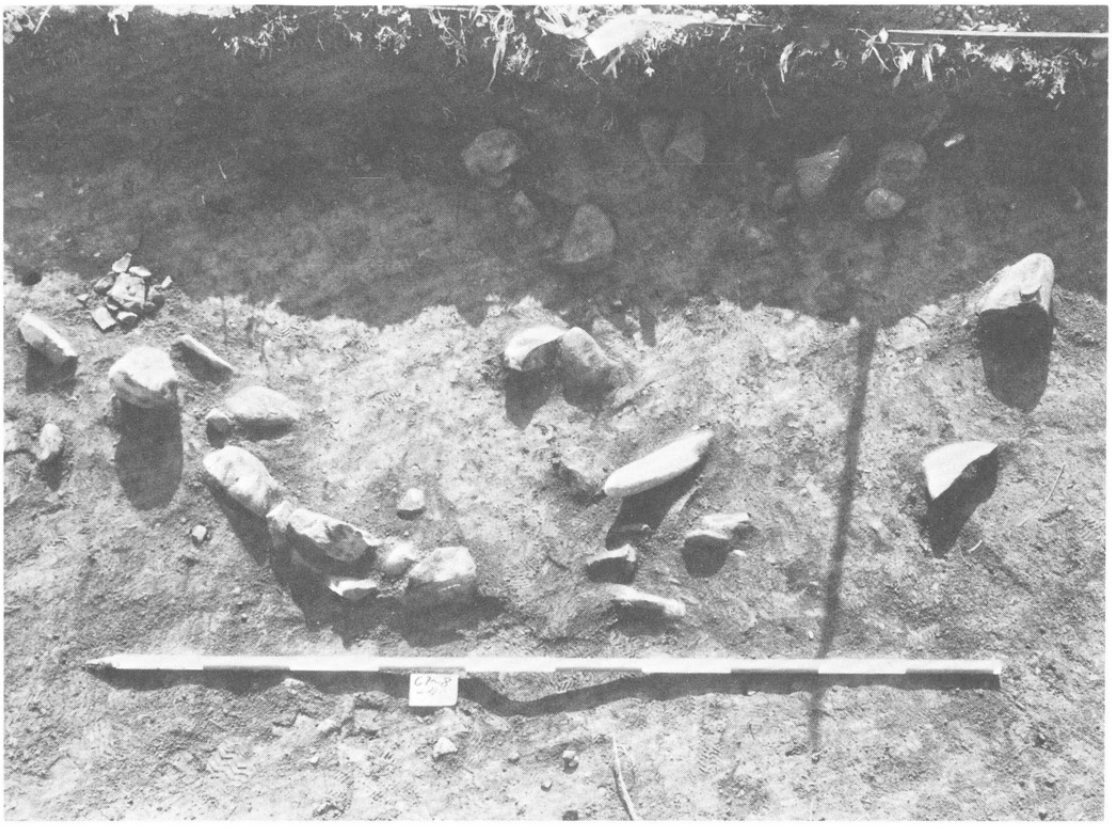


図版第9　上第6号，10号住居址
下第8号住居址



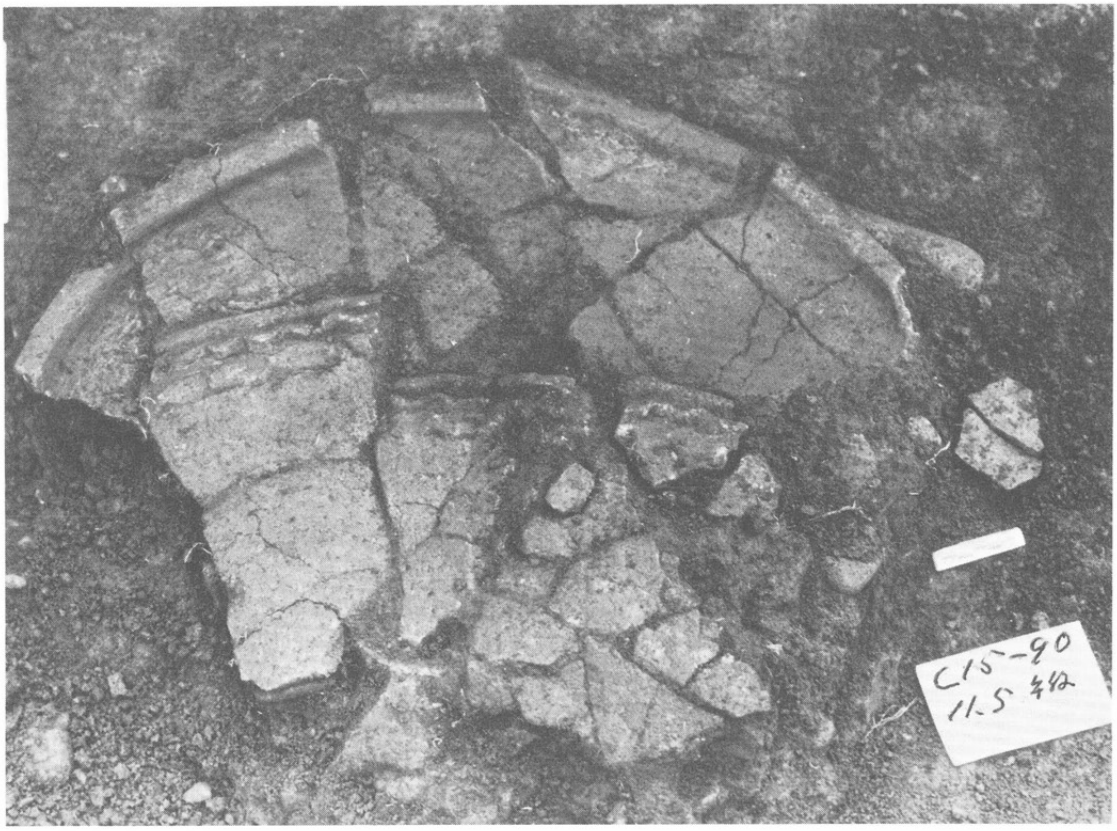


図版第 10　上第 9 号，6 号住居址
下左第 1 号住居址炉・右第 4 号住居址炉

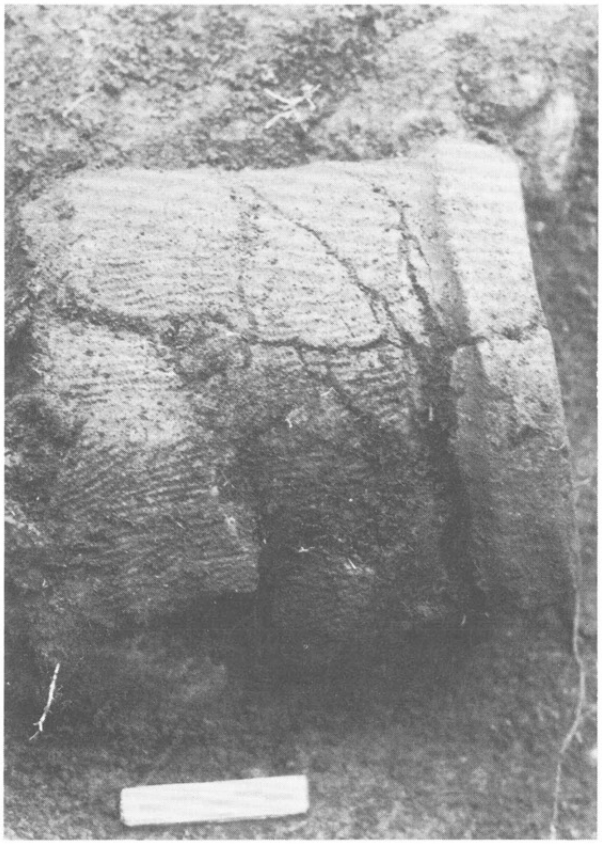


図版第 11　第 6 号集石

図版第12　第3号住居址土器出土状況



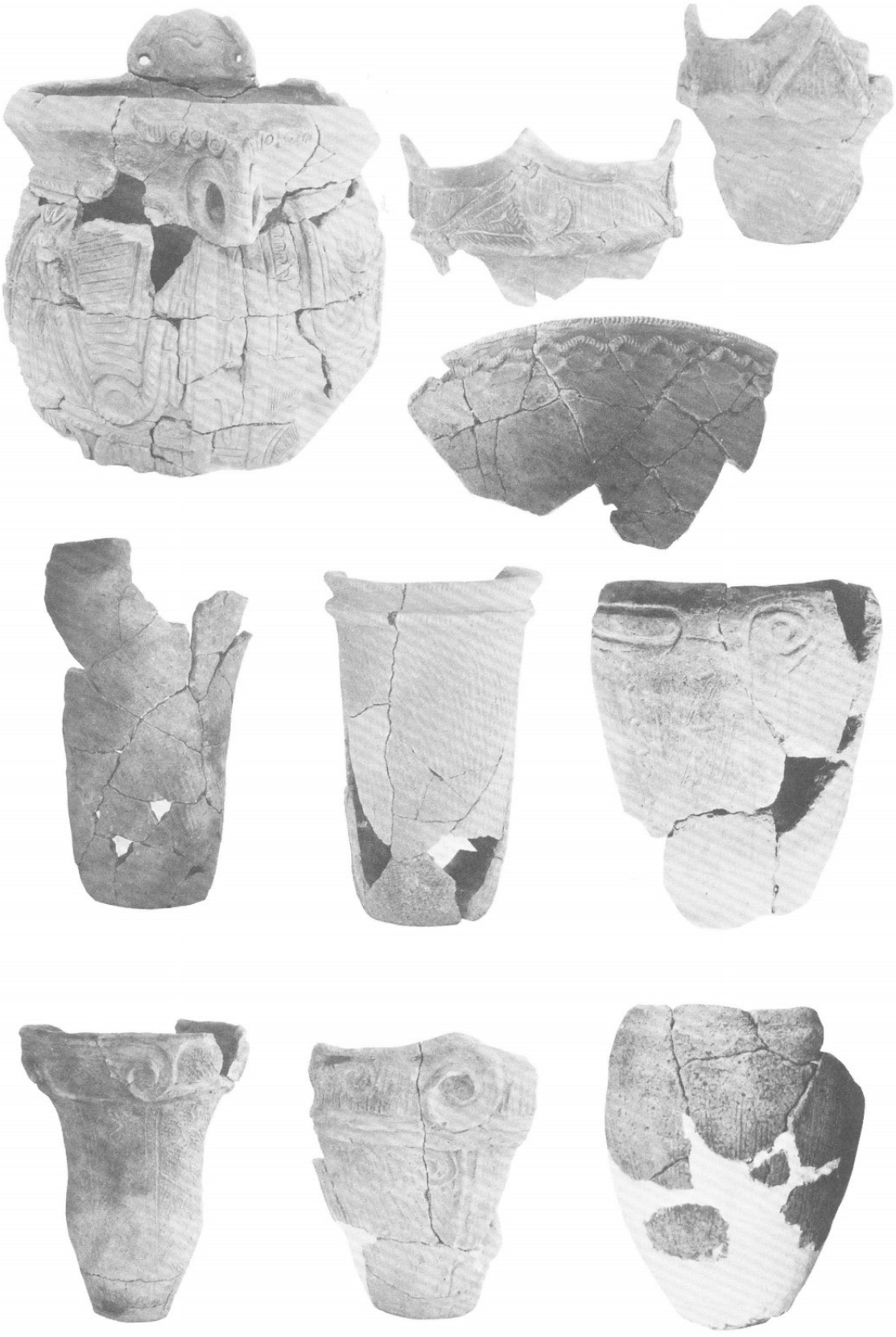
図版第13　第4号住居址土器出土状況



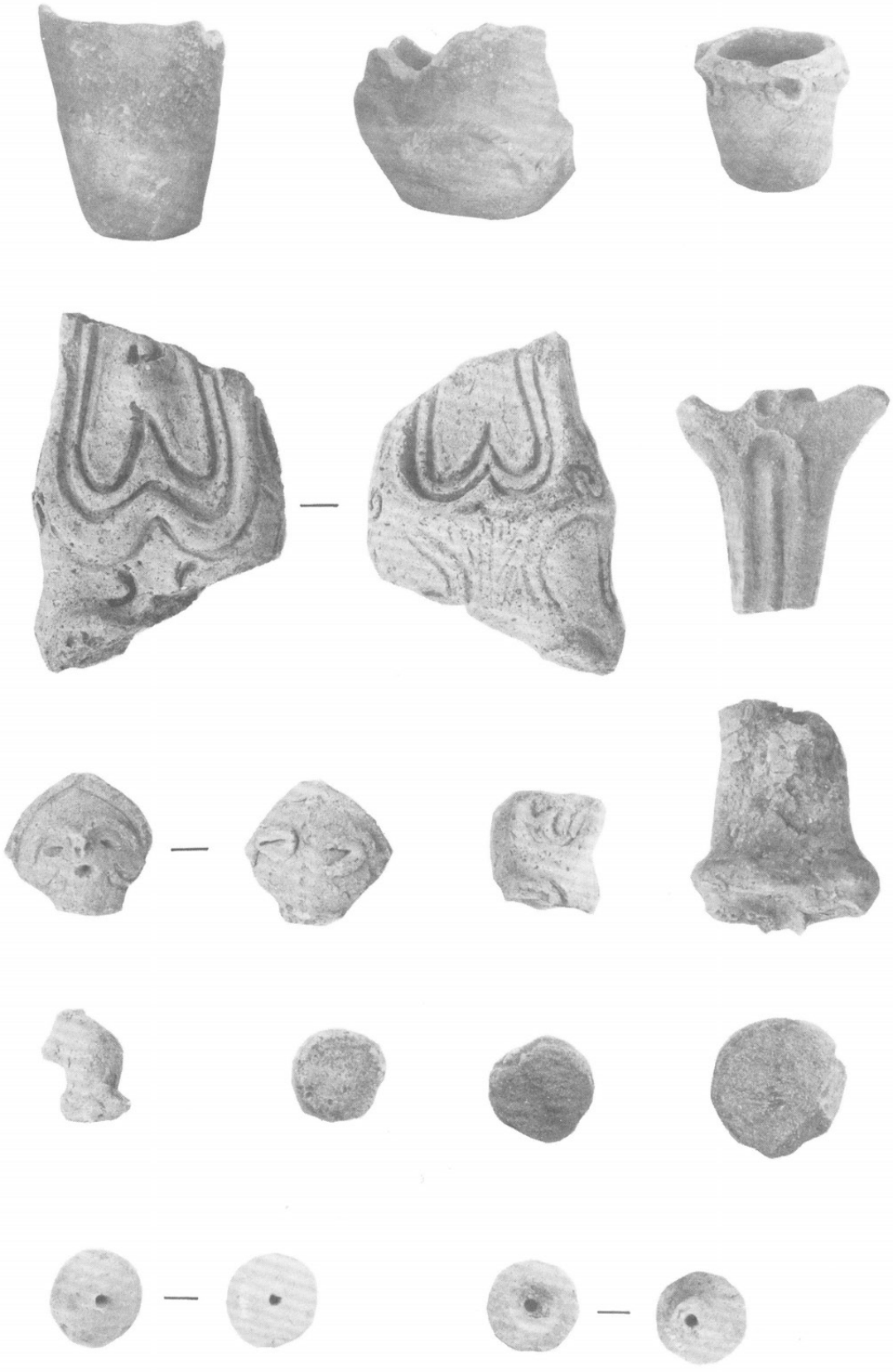
図版第 14　第 4 号住居址土器出土状況

図版第15　第4号住居址土器出土状況

図版第16　第3号，4号住居址出土土器



図版 17　第 4 号，5 号，9 号住居址，第 6 号集石出土土器



図版第18　第4号住居址出土土器・土製品

小　段　遺　跡

長野県塩尻市小段遺跡調査報告

〔非売品〕

昭和54年１月５日　印刷

昭和54年１月10日　発行

発行所　長野県塩尻市教育委員会

印刷所　㈱　高　砂　印　刷　所